
雨の足音

EAST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の足音

【Nコード】

N9773X

【作者名】

EAST

【あらすじ】

ある雨の夜、主人公の元に『雨の精霊』を名乗る少女がやって来る。少女は主人公の願いを何でも三つだけ叶えてくれるという。ただし叶えるには条件があり、少女が願い事として相応しいと納得する必要があるのだ。この夜から、雨の精霊の少女と、主人公の奇妙な共同生活が始まる。

プロローグ（前書き）

とある新人賞向けに書いた原稿を、期間限定で公開させていただき
ます。なにぶん初めてのジャンルですので、至らない所が数多くあ
るかと思えます。ご意見ご感想などいただけましたら幸いです。 1
1 / 1 : 前後の整合をとるために若干の加筆をしました。

プロローグ

俺は、雨の夜が好きだ。

もちろん、洪水になってしまつような激しい雨は困りものなんだけど、静かな夜の街に響く雨の音を聴くのは心地いい。まるで天から落ちてくる滴が、屋根や地面を叩いて音楽を奏でているような、そんな気分になる。

今夜はちょうど、俺好みの雨の夜だった。

雨粒が屋根を叩く音をBGMに、俺は苦手な数学の宿題をやっている。でも、気分がいいと何故か問題を解くのもはかどるから不思議なものだ。ほら、普段なら五分は頭をフル回転させなきゃならぬ問題が、あっさりと解けてしまった。

「毎日が雨ふりだったら、俺の成績はうなぎ登りだな」

誰にいうともなく、俺は呟く。応える者はだれもない。

俺はこの家に一人きりで住んでいる。母親は物心つかないうちに病気で亡くなっていたし、父親は海外赴任で欧州暮らしだ。父の赴任が決まる直前に、今通っている私立仁正学園高校の合格が決まり、俺は父に無理を言つて一人日本に残ることにした。

「一人には慣れたけど、やっぱりこの家は一人で住むには広すぎるよな……」

俺は口の中でそう呟くと、天井の蛍光灯の光に惹かれた蛾が小さな羽をパタパタと羽ばたかせて飛んでいるのを、ぼんやりと見ている。俺はさっきより強くなっている。

時を追うごとに、屋根を叩く雨の音が大きくなっているのがハッキリ分かる。

まるで雨雲の本体が近づいてくる足音のようだ。

これはもしかしたら雷くらいは鳴るかもしれない。

次の瞬間、家全体が震える程の大音響とともに、蛍光灯の灯りが消えた。

電気という文明の力で煌々と照らされていた部屋の中は、一転開始の闇に包まれ、灯りに慣れきつた目には全くなにも映らない。

「参ったな、停電か？ 落雷の影響……にしちゃ、部屋の外は明るくならなかったけど」

カーテンを開けて隣の家を見る。やはり電気は消えているようだ。ということは、この一帯が停電しているということか。仕方なく、俺は停電が回復するのを待った。

その時、俺の頬にぽつりと冷たい物が当たった。

「雨漏り？ にしてはえらく量が多いな」

真つ暗な天井を見上げると、濃い闇の中に僅かに薄い闇がある。

あれは蛍光灯の横あたりだろうか。どうやら、屋根と天井に大穴が空いているらしい。落雷はうちを直撃したようだ。

「参ったな……。物置にブルーシートか何かあったっけ」

唐突に部屋の蛍光灯が点灯した。闇になれきつた俺の目に、白い光が突き刺さる。思わず俺は目を閉じていた。

だが、閉じるまでの一瞬の間に見えた『それ』に、俺は気づいてしまった。

『それ』は人の形をしていた。

……ちよつと待て、人だつて？

俺は恐る恐る目を開ける。そこに『それ』は確かにいた。

部屋の真ん中あたりで俺と同年ぐらいの女の子が、目を回してぶつ倒れている。

当然、俺の知らない顔だ。

「……これはあれだ、きつと夢だな。はやく夢から覚めないと……」
俺は部屋の隅に置いてあった極厚の月刊マンガ雑誌を手に取ると、

その角で少女の後頭部を思いきりぶん殴った。

「いった　　っ！　はっ！　ここはどこですかっ！？　なんだか後ろ頭がズキズキしますっ！」

「それはきつと、うちの天井をぶち破ったときの痛みだろうね。目は覚めたかい？」

「はいっ！　もうバツチリ！　で、なんでわたしはこんな小汚い部屋にいるんでしょうか？」

俺は握りしめた凶器（極厚月刊マンガ雑誌）で再度少女の側頭部を強打した。

「へぶんっ！！」

「小汚くなつたのは君のせいだろ！　人んちの屋根をぶち破って登場なんて、どこのアニメかマンガだよ！」

俺はあまりの少女の失礼さ加減に、手にした凶器（極厚月刊マンガ雑誌）を連打したい衝動をなんとか抑え、まだ頭をさすっている少女をじつくりと観察した。

床にぺたりと座り込んでいたのでよく分からないが、背丈は俺より頭一つくらい低いだろうか。ストレートの黒髪は艶やかで、腰のあたりまで伸ばしているが、雨に濡れた上に天井を破壊したときについたのだろう細かい木くずやら何やらで悲惨な状態だ。

すらりとしていながらふつくと柔らかかみのある手脚や腰のラインはまさに神の造形。胸は悲惨なほどぺったんこだけど、その上についている小ぶりの頭には、これまた精緻の限りを尽くしたような目鼻が、バランスも絶妙に配置されている。

服は白い上品なワンピース。高原の別荘地で日傘でもさして散歩していたら、さぞ似合うだろう。ずぶ濡れで、その上木くずまみれだけ。

要するに、一言でいえば目の前にいる少女は、俺の美的感覚からするとかなりの美少女なのだった。だが、何かが俺の脳裏に引っかかっていた。何かは分からない。ただ言えるのは、何とも言えない既視感のようなものを、この少女から感じるということだけだ。確

かに知らないはずなのに、どうしてもどこかで逢ったことがあるような気がしてならないのである。

「あつうう……。そうは言われましても……。はっ！ 思い出ししましたっ！」

少女は頭からパラパラと木片を落としながら、すつくと立ち上がった。立ち上がると、少女の頭のでっぺんがちようど俺のあのあたりになる。綺麗な形のつむじが俺の目の前にあった。

「わたし、雨の精霊なんです！ この世にあつて雨をこよなく愛する人の願いを叶えるため、雨の神様の使者として、こうして時々地上に降りてくるんですっ！ 天文学的な確率でしか有り得ないことなんです！ あなたはその幸運に感謝しなくてはいけませんよっ！」

無残なほど平べったい胸をそっくり返して、少女はなにやら電波なことを言いだした。もしかして少し頭を強く殴りすぎたのだろうか？ 俺が少しばかり心配になつてきたところで、少女はブンつと音がしそうな勢いで俺の方を振り向いた。

「願い事を叶えるには、いくつかの条件があります！ 叶えられる願いは三つです！ あ、願い事を無限に増やす……。つていうのは無しですよ？ それ以外で三つだけ、あなたの願いを叶えてあげます。条件というのは、わたしが『願い事に相応しい』と認めることです！」

目の前の少女は自信満々の表情で、腰に手を当てて仁王立ちしている。

「……こういう場合、病院に連絡するべきなのか？ 救急車を呼ぶべきか？ それとも警察だろうか？ 俺はしばらく考えたあと、これ以上ないであろう願い事を彼女に伝えることにした。

「願い事は何でもいいんだよね？ んじゃ、とりあえず君がぶち抜いた屋根と天井を修理してほしいんだけど」

彼女が落ちてきた時に開けてくれた大穴から雨が降り込んで、俺の部屋は悲惨な状態になりつつある。まずはこれを何とかしてもらわねばなるまい。

「おやすい御用ですっ！」

少女はすつと目を閉じ、深く息を吸い込んだ。その花びらのような唇から、聞き取れないほど繊細なつぶやきが漏れ出てくる。その言葉は英語でも日本語でもない独特の響きをもっていて、不思議な旋律を伴った音の流れとでも言えばいいのだろうか。意味は分からないが、耳に心地いい。

やがて、少女の身体がぼうつと光を帯び始めた。光はだんだんと強くなり、やがて直視していられないほどの明るさになる。俺は少女から目を逸らし、片手で目を覆い光を遮った。

唐突に光が消える。元の蛍光灯の明かりだけが、俺の部屋を照らしていた。小さな蛾も蛍光灯の周りで羽ばたいている。

降り込んだ雨でびしゃびしゃだった絨毯も、大穴が開いていた天井も、そこに転がっていた木ぎれや瓦の破片なども、すっかり姿を消して、部屋は元通りの姿を取り戻していた。

「どうでしょうか！ お気に召しましたかっ？」

少女はくりくりと大きな瞳をきらきら光らせながら、上目遣いで俺を見上げてくる。

部屋の修復のついでにずぶ濡れだった自分の『修復』もしたようで、艶やかな髪はさらさらに乾き、ぐしょぐしょだったワンピースはふんわりと上品な曲線を描いている。胸のあたりは見ていて哀しいほど扁平だけど。

いや、ちよつと待て。

俺はさつきからとんでもない現象に遭遇しているんじゃないのか？ 落ち着いて考える。女の子が空から屋根をぶち抜いて降ってきた、自分は『雨の精霊』だと名乗りあつという間に部屋を元通りに修復してしまった。

「……………やっぱり夢だ。俺は夕子の悪い夢を見ているに違いない。はやく夢から覚めないと……………」

俺は握りしめたままだった極厚月刊マンガ雑誌を大きく振りかぶると、目の前で目をきらきらさせている少女の脳天に打ち下ろした。「いた　っ！　はっ！　わたし何でこんなところに？　あなたは誰ですかっ！」

「俺はこの部屋の主だ！　なんだよ！　悪夢じゃないのかよ！　なんの因果で俺がこんな目に遭うんだよ！」

「そうでしたっ！　思い出しましたよ！　願い事はあと二つです！　さあ、何なりとおっしゃって下さい！」

「だから、そうじゃなくて　。　……願い事はなんでもいいんだっただよね？」

「はいっ！」

「じゃあ俺の目の前から消えてくれ。今すぐ！」

「はいはい、今すぐ……っつて、えええええっ！？　そ、そんなの困ります！　それじゃ願い事を叶えたことになりません！　クラオカミさまに叱られちゃいます！」

晴れやかな表情から一転して絶望のどん底に突き落とされたような顔になる少女。

「クラオカミさま？　なにそれ？」

「雨の神様ですっ！　言ってみればわたしたち雨の精霊の眷属を統べる上司ですっ。お願いです、ちゃんとした願い事を言って下さいっ！」

願い事を言ってくれとしつこく食い下がる少女の脳天にもう一撃加えたい衝動に駆られたが、俺は自制心をフル稼働させて何とか回避すると、俺は少女に尋ねた。

「願いを叶えないと、俺の前からは消えてくれないってこと？」

「はいっ！　それがわたしのお仕事ですからっ！」

「それじゃあ、二つめの願い事。君の名前を教えて。知らないんじや呼びにくいから」

「そんなことでもいいんですか？」

少女はくりくりとした目の中に『？』を浮かべている。

「うん。二つめの願い事はそれでいいよ」

俺の言葉に嘘がないと感じたのか、少女は多少不満げな表情を浮かべつつも、こう答えた。

「雨音です。雨の音と書いて、あまね」

「そう、雨音か……。いい名前だ」

「そうですか？ えへへっ、褒められちゃいましたっ。それでは最後の願い事をおっしゃって下さいっ！」

最後の願い事といわれて、俺はなんとも困ってしまった。

願い事はなんでもいいらしい。でも、雨音が納得してくれないと願い事とは認められないようだ。だが、俺は今の生活がそこそこ気に入っていて、特に不満も感じていない。大それた夢もなければ、野心もない。

……死んだ母に会ってみたい気もするが、それは願ってはいけないことのような気がする。

つまらないヤツだと笑ってくれてもいい。だけど、俺は本当に今のそこそこ楽しい生活に満足しているのだ。

眉間に皺を寄せてなやむ俺の目の前には、胸がぺったんこなこと以外は完璧超人な美少女が瞳を輝かせて立っている。俺の願い事を待ちながら。

「んー、本当に何でも願いを叶えてくれるんだよね。……しばらく考えさせて……。って、これも願い事にカウントされちゃう？」

「特別にノーカウントにしておきますっ！ 願い事が決まるまで、ゆっくり考えてくださいっ。で、わたしからお願いが二つあります。聞いていただけますか？」

「頼み？ いったい何？」

少女は曇りのない笑顔を俺に向けて、問うた。

「まず一つめ。あなたの名前を教えてください。知らないと、呼びにくいでしょ？」

そうきたか。確かにこちらはすでに雨音の名前を知っている。でも、俺は自分の名前があまり好きじゃない。……死んだ母が付けた

から、というのは関係ないと思いたいが、多分本当は多いに関係しているのだろう。

だから、俺は幼なじみが俺を呼ぶ渾名を教えることにした。

「みーとでも呼んでくれればいいよ。みんなそう呼ぶし。俺、自分の名前があまり好きじゃないんだ」

「みーくん……。なんか可愛いですねっ！ 仔猫みたいですよっ！」
「で、二つめの頼み事って、なに？」

少女は再び俺の顔を正面から見つめると、少し緊張した面持ちで言葉を継いだ。少し頬が赤くなってるのは気のせいだろうか？

「えーとですね、最後の願い事が決まるまで、わたしをみーくんのおうちに置いて頂きたいのです。精霊とはいえ、受肉して実体化したら住むところも食べるものも必要になりますので……。ダメ……ですか？」

「いや、ダメって言うか。俺、一応男だけど……。それに一人暮らしたし」

なんとというか、この子は俺を一体なんだと思ってるんだろう。それとも男だと意識されてないのか？ 少しは身の危険を感じたりはしないものだろうか。

「一人暮らしなんですかつ！ それはかえって都合がいいですよっ！

ご家族がいらつしやると暗示をかけたりと色々面倒ですので！」

「いや、そうじゃなくてね。俺は男なんだけど」

「大丈夫ですよっ！ 雨を愛する人に悪い人はいません！ わたしはみーくんを信じます！」

お話にならない。信頼してくれるのはいいんだけど、男として警戒されてないというのもちょっと悲しい。

「分かったよ。願い事が決まるまで、俺の家に居ていい。今日はもう遅いから、とりあえず俺のベッド使って寝て。俺は居間のソファーで寝るから」

「いえいえ！ わたしが居間で寝ますからっ！」

「遠慮しなくていいから。布団はちゃんと干してるし、シーツだっ

てちゃんと洗濯してあるから」

雨音はまだ何か言いたそうだったが、俺が引かないことを察したのか、ふうと溜息をついた。

「分かりました。ちよっと着替えさせて頂きますね」

再び雨音が目を閉じ、さっき部屋を修復したときと同じように呪文を詠唱する。身体がまばゆい光に包まれる。光がきえたときには、雨音はピンクのパジャマ姿だった。

「それじゃあ、すみませんが今夜はベッドお借りしますね」

「それでよし。部屋は内側から鍵がかかるから、電灯のスイッチはここね。って、電灯って分かるよね？」

雨音は俺の言葉を聞くと、ぶんぶんという擬音がぴったりな感じに頬を膨らませた。

「その位知っていますっ！ 馬鹿にしないうでくださいっ！」

「ごめんごめん。悪気はなかったんだ。精霊だっていうから、人間の常識が通用するかわからなかった。気を悪くしないで」

俺は両手を顔の前で合わせて拝み倒すようにして謝る。ふくれてきた雨音だったが、その表情は少しずつ柔和なものになっていった。「それじゃ、俺が出たら鍵をかけてね。何かあったら一階の居間で寝てるからたたき起こして。それじゃ、おやすみ」

「はい！ おやすみなさいです！」

扉を開けて俺は部屋を出た。カチリという鍵をかける音を確認した後、俺は階段をおりて一階の居間へと向かった。

こうして、雨の精霊である雨音と俺との、奇妙な共同生活が始まったのだった。

ブログ（後書き）

いかがでしたでしょうか？ まずは導入部を公開させていただきます。1〜2日に一回のペースで更新していきたいと思っています。よろしければご意見ご感想をお寄せください。

第一章

みーくんと兩音とひなた

1 (前書き)

本編第一章の1をお送りします。

1 1 / 1 前後の整合をとるために加筆修正をしました。

なんだかいい匂いがする。甘い甘い、花のような香り。何の香りだろう？ 俺は居間のソファの上でボンヤリとそんなことを考えていた。はて、なんで俺はソファなんかで寝ているんだっけ。俺はまだ覚めきらない脳みそに無理やり命令して、うつすらと目を開いた。目の前になんだか黒い髪の毛のようなものが見える。それが少女の髪の毛だと気づくまでに、かなりの時間を要した。

「ちよっ！ なんで雨音が俺に抱きついて寝てるんだっ！」

それは昨夜、俺の前に現れた雨の精霊、雨音の頭だった。彼女は俺の胸に顔を埋めて幸せそうに寝息を立てている。なるほど、この甘い匂いは雨音から香ってきていたのか。いやいや、ちよっと待てよ。この状態は非常によろしくない。

朝だから男の生理現象も起こっている。そんな状態でいくら胸が無残なまでに扁平だとはいえ、超絶美少女であるあまねにしがみつかれているのは、蛇の生殺しだ。俺は絡みついていて雨音の両腕をそつと解くと、静かに彼女に声をかけた。

「雨音、雨音……。おい、雨音さーん」

俺の胸に埋められていた頭がゆっくりと持ち上がってくる。長いまつげがびくりと動き、ゆっくりと大きな瞳が開かれていく。その瞳が俺を映している。

「ん……。おはようございます」

「おはよう……。とりあえず、離れてくれないかな……。すぐくまざい体勢になってるんだけど」

雨音は寝ぼけ眼で自分がどういう体勢かを確かめる。次の瞬間、雨音は頭から湯気を噴き出しかねない勢いで真っ赤になると、ボクの隣から跳ね起きた。

「おおお、おはようございますっ！ すすす、すごくいいお天気です！ それと、朝ご飯、できてますよっ！」

雨音はあたふたと窓のところまで行き、シャツと音をたててカーテンを開いた。一瞬、俺の視界が白い光で遮られる。

明るさに慣れた俺の視界に飛び込んできたのは、白のワンピースの上に、普段は俺が料理するときに使ってるちよっと野暮ったいエプロンを着けた雨音の姿だった。

「さ、起きて下さい。朝食はしつかり食べないとダメですよ！」

「う、うん……」

俺は雨音に背中を押されながら、ダイニングへと足をはこんだ。

ダイニングのテーブルの上には、だし巻き卵にほうれん草のおひたし、豆腐とネギの味噌汁、それに納豆と、実に正しい日本の朝食が用意されていた。

「冷蔵庫の中身、勝手に使わせていただきました。大した物は作れませんでしたけど、お口に合えばいいんですが……」

俺は黙って席に着く。茶碗に盛られた炊きたてのご飯の香りが、俺の鼻腔をくすぐる。

「さ、召し上がれ」

「い、いただきます」

俺はまず、ネギと豆腐の味噌汁から口を付けた。うん、丁寧に汁を取ってあって、凄く美味しい。ダシの素なんかじゃなくて、ちゃんと煮干しで出汁をとったんだろう。寝起きの身体に染み渡るようだ。続いてだし巻き卵。綺麗に巻かれてほどよく焦げ目がついた卵焼きを見ていると、それだけで口の中に唾が湧いてくる。

「……いかがでしょうか……」

雨音の瞳に不安げな色が滲む。俺は無言でガツガツと食べ続けた。どんな言葉より、一番美味しいことをアピールするには、何も言わずに美味しそうに食べるのが一番だと思ったからだ。俺の食べっぷりを見て、雨音の不安げな表情はだんだんと薄らいでいき、ご飯をおかわりする頃にはすっかり笑顔になっていた。

「ふう……、ごちそうさま。雨音は料理上手いなだね」

「そ、そんなことないですっ。このくらい、女の子なら当然ですよ」

っ

いや、俺はその言葉が嘘であることを嫌というほど知っている。女の子なら料理が出来て当たり前？ とんでもない！

世の中には立派な食材を、見るも無惨な物体にメタモルフォーゼさせる女が存在するのだ。

そして、そいつは俺の幼なじみであり、すぐ隣に住んでいる。

ピンポーン

玄関のチャイムが軽快な音色で来客を伝える。俺は何故か身の危険を感じた。理屈ではない。生物としての本能が揺さぶられる。そんな恐怖感だ。

「あら、こんな朝早くからお客様ですか？」

雨音はエプロン姿のまま、ぱたぱたと小走りに玄関の方へと向かう。

俺は足の裏が摩擦で焦げるほどのダッシュユ力をみせて、雨音の進路を遮った。

「あああ、雨音さん？ ででで出なくていいからね？ ちょっと部屋奥の方に隠れていてくださると非っ常〜に助かるのですが、お願い出来ませんか？」

「おはよう、みーくん。昨夜はなんか凄い落雷だったけど、大丈夫だった？ ……ところで、その可愛らしいお嬢さんは一体どなたかしら？」

敵は合い鍵をつかって室内に侵入してきていた！ しかもバツチリと雨音のエプロン姿を見られている。これは非常に危険な状況だ！

「説明、してくれるよね？」

侵入してきた敵であり、食材を食べ物以外の何かに加工するプロフェッショナルであるところのひなたは、その名の通り日だまりのような笑顔で俺に状況の説明を求めてきた。

居間のテーブルを囲んで、俺とひなたと雨音が顔をつきあわせている。なんだか家族に内緒で女の子を連れ込んだのがばれて、その子を交えての家族会議でもしているかのようだ。いや、状況は大してかわらないけど。

雨音はひなたにあっさりと自分の正体を明かし、自分が俺の願い事を叶えるためにここにいる事も簡単に白状していた。ひなたはショートカットの前髪を弄りながら、うさんくさそうな目を雨音に向ける。

「ふーん。ということとは、キミは雨の精霊で、みーくんの願い事を叶えるために空から降ってきたつと、そう言うんだね？」

「はいっ！ その通りですっ」

ひなたはにつこりと微笑むと、その笑顔のまま言い放った。

「ふざけんな、このデンパ女！」

そうなのだ。ひなたという女は超が付く現実主義者で、オカルトとか超常現象の類を一切信じない。「自分の目で見ないと信じない」

どこの話ではなく、例えば自分の目の前に幽霊がいたとしたら、そいつをぶん殴って「ほら、こんなの幽霊でもなんでもないじゃない」とでも言いかねないほど、その手の話を受け付けないのである。

「キミねえ……。どこの家出娘か知らないけど、いくらみーくんがお人好しだからって、十代のやりたい盛りの男の子の家に転がり込むなんて自殺行為よ？ 何をされても文句は言えないんだから！」

「何をされてもってなにさ！ ひなたは俺のことをどういう人間だと思ってるんだ！」

「えーと……。最後の願いが『それ』でしたら、わたしには断ることができないんです……」

雨音が頬を赤らめ、もじもじしながら話をややこしくしてくれる。「絶対ダメよ！ もっと自分を大切になさい！ それに、みーくんの面倒は昔からボクがみることになってるの。みーくんのお父さん

からも任されてるんだから、キミの出る幕はないよ！」

お隣さんにして物心ついた頃からの幼馴染みであるところのひなたは、半年ほど誕生日が俺より早い。たかが半年なのに、完全にお姉さん気取りで俺の世話を焼きたがる。

(ろくに家事もできないくせに……)

困ったことに食事も作りたがるのだが、俺はありとあらゆる手口を使ってその罠を回避し続けていた。何しろ命がかかってるんだ。それはもう真剣そのものだぞ。

「それはこまりますっ！ わたしは彼の願い事を叶える義務があるんです！ これはわたしの存在意義に関わる問題です！」

雨音は真っ向からひなたに食らいついていた。俺の願いを叶えるためなら身体を差し出すというのも、あながち冗談ではないのかもしない。

「どうあっても、引く気はないってことね？」

「はいっ！ 他のことで譲歩したとしても、これに関しては譲れません！」

それまで鋭い視線で雨音を睨め付けていたひなただったが、雨音のその言葉を聞くと、ふっと表情を緩めた。

「分かったわ。雨の精霊云々は信用しないけれど、キミがみーくんの願いを叶えたいと本気で思ってることは分かった。でもね」

すっと息を吸い込んで、ひなたは腹の底から響く声で言った。

「みーくんとボクの間割り込めるとおもったら大間違いだよ。十年以上も一緒にいるんだから！ キミが逆立ちしてもかなわないほどの強い絆が、ボクとみーくんの間にはあるんだからねっ！」

ひなたは不適な笑顔を浮かべて雨音の方を見やった。雨音も正面からその視線を受け止める。二人の視線が絡み合う。俺には理解出来ない女の戦いが繰り広げられていた。

「えーと、ひなた、雨音がここに居ること自体は認めてくれる気になっただけ……のかな？」

「ええ。みーくんの願い事でもなんでも叶えればいいよ。ただし……」

…万が一にもみーくんが不埒な願い事をしたら……」
「ないない！ そんなこと絶対ないから！」

ようやくひなたが帰ったのは、それから1時間ほど経ってからだった。朝の『スーパードローム』を我が家で最期まで見ていたからだ。まったくそんなのは自分の家に帰ってから見ればいいのか。

ひなたは帰り際に、思い出したように本来の用件を俺に告げた。

曰く、天気がいいからどこかに出かけよう、と。

「今から帰って支度してくるから。みーくんもすぐ出られるように準備してね」

まったく、押しの強いひなたであった。

まあ、言い出したら一直線なのがひなただから、いつもの通りなんだけど。

俺はひなたを玄関まで見送ったあと、台所で食器の後片付けをしている雨音を誘うことにした。雨音一人だけをのけ者にするのは、やはり気が引ける。

「ねえ、雨音さえよければ、雨音もいつしよにどこかに遊びに行かない？ 天気もいいし、森林公園なんか気持ちいいと思うんだ」

雨音はちよつと考えるようなそぶりをみせて、

「そうですね……でも、わたし、雨の精霊ですから、ちよつとした事で雨を降らせちゃいますよ？」

「例えばどんなことで？」

「悲しい事があったときとか……」

「それなら大丈夫だよ。悲しい思いをさせることなんて無いから」
雨音は僅かな迷いの色をその瞳に滲ませていたが、やがて、意を決したように俺の目を正面から見据えて答えた。

「分かりましたっ！ これってその、デートなんでしょっかっ！」

耳まで真っ赤になっている雨音は、それでも俺の目から視線を逸らさずに、まるで睨み付けるようにして俺の顔を見つめる。両の手を胸の前で握りしめ、必死の形相だ。胸はがっかりするほど平坦だ。

「まあ、広義のデートには入るかもしれないな。ひなたも一緒だから、本当にデートと言えるかどうかは微妙だけど。よし、善は急げだ。森林公園はここから歩いて三〇分くらいの所にある。今が八時半だから、ゆっくり行っても九時には着けるな」

「だったら一時間ほど待って下さい！ わたし、お弁当つくりますっ！」

「それは構わないけど、でも面倒じゃない？」

雨音は満面の笑顔を浮かべ、こう言い切った。

「誰かに料理を食べてもらうの、嬉しいですからっ！」

「そう？ それじゃ、ひなたには俺から電話しておくね」

俺は自室に戻って、机の上に置いてあった携帯電話を手取る。短縮ダイヤルの一番最初に登録してあるひなたの番号を呼び出し、発信。数回の呼び出し音のあと、ひなたの声が携帯のスピーカーから聞こえてきた。

「ひなたか？ 雨音が弁当を作ってくれるっていうから、出発を少し遅らせたんだけど……」

『お弁当！？ そんな餌でみーくんを釣ろうっていうのね、あの貧乳デンプア女！ いいよ、ボクもお弁当作る！』

俺はとんでもない間違いを犯してしまったことに気づかされた。

頭から血の気が引いていく音が聞こえる。ひなたの性格を考えれば、『雨音が弁当を作る』と聞いて黙っているわけがないのだ。

「いいい、いや、ひなたさん？ 雨音が人数分弁当を用意してるから、あまり多くても食べきれないよ？ だから……」

『作る！』

「……はい」

俺はマリアナ海溝のチャレンジャー海淵より深く後悔しつつ、電

話を切った。あまりに深い後悔のため、俺の寿命は水圧でどんどん縮んでいきそうだ。ひなたの弁当を食べたら、確実に、

……父さん、天国の母さん。俺は今日死ぬことになるかも知れませんが。

一時間半後、俺たちは家を出て一路森林公園へと向かった。

梅雨の中休みといったところなのか、空には雲一つ無い。

雨音はどこからか出てきた白の日傘をさして、俺の右隣を歩いている。

左隣にはイラスト入りのＴシャツに白のショートパンツにスニーカーというカジュアルな出で立ちのひなたが陣取っている。ちなみに、俺はカーゴパンツにグレーのＴシャツという地味きわまりない格好である。その上、雨音には小ぶりな風呂敷包みを、ひなたからはバスケットを押しつけられて両手が塞がっている。要するに荷物持ちである。

女の子二人と並んで歩いているというのに、俺はちっとも嬉しくない。むしろ全力でこの場から逃げ出したいのは何故だろう。

しかし、こうして雨音をみると、まるでどこかいいところのお嬢様のようなのだ。

だが、雨音は人間じゃない。正真正銘、雨の精霊だ。

信じられないような昨夜の体験を思い出す。あれをすんなりと受け入れられた俺という人間は、実はすごく器の大きいヤツなんじゃないだろうか？

そんなことを思っていると、雨音が日傘をくるくる回しながら問いかけてきた。

「そういえば……最後の願い事、決まりましたか？」

「いや、ただだけど……。急がないとダメ？」

「いえっ！ ゆっくり考えていただいて結構です」

そういうと、雨音は柔らかな笑顔を俺に向けてくれた。晴れた青空のように澄んだ深い色の瞳が、俺を映している。最後の願いごと。

それを叶えたら、雨音は俺の前から消えてしまう。ただそれだけのことだし、昨夜はすぐにも消えてしまっただけだ。欲しいと思っただけだ。

だけど、いざ『最後の願い』を考え出したら、ちっとも自分のして欲しいことや、欲しい物が見あたらなかった。雨音はゆっくり考えればいいと言ってくれた。そうだな、自分が本当は何が欲しいのか、何を叶えてほしいのか、じっくり自分自身と向き合うのも悪くない。

時間はたっぷりあるんだ。今は雨音の言葉に甘えよう。

第一章

みーくんと兩音とひなた

1 (後書き)

いかがでしたか？ よろしければご意見ご感想などお寄せください。

第一章

みーくんと兩音とひなた

2 (前書き)

ちよつと遅くなりましたが、本編一章の2をお送りします。楽しんでいただけたら幸いです。

1 1 / 1 1 3 : 4 6 加筆修正しました。

やがて、道は上り坂へと姿を変えていく。

森林公園はちよつとした山の中腹から頂上にかけて広がっているのだ。当然、歩いて行こうと思えば上り坂を歩かざるを得ない。バスも通っているのだが、三〇分に一本しか来ないので、若い俺たちは自分の脚であるいていくことにしたのだ。ただ、途中でバスに抜かれたのはちよつと凹みだけだ。

軽いハイキングコースのような遊歩道を上っていると、眼下に街の風景が広がり始める。普段住んでいる街をこんな形で見下ろす事は滅多にないので、俺は自然と自宅のある辺りを探していた。あつたあつた。あの瓦葺きの屋根の家がうちで、その隣に立っている赤い屋根の家がひなたの家だ。

「いい景色ですね！ 空の上から見るのとちよつと似てるかも」
白い日傘をくるりと回し、俺の横を歩く雨音が言う。確かにいい景色だ。でも、雨音の普段いるであろう天空からの眺めとは、きつと比べものにならないだろう。

さらにしばらく上り坂を歩いて行くと、前の方に森林公園の入り口が見えてくる。

特に遊ぶ場所があるわけでもなく、ただ自然が豊かに残っているというだけの公園だ。そのてっぺんにある展望広場は見晴らしがとてもよく、空気の澄んだ日にはかなり遠くの山々まで見渡せるほどだ。

券売所で三人分の入場料を支払って、俺らはゲートをくぐる。この時期だと紫陽花が綺麗ですよと、券売所のおばさんが教えてくれた。

雨の精霊の雨音と、紫陽花の取り合わせ。そして今日は抜けるような青空。カメラを持ってくるんだったと後悔したが、そもそも精霊は写真に写るのだろうか？ でも、券売所ではちゃんと雨音の分

の料金取られたしなあ。

園内に入ると、早景色とりどりの紫陽花が俺らを迎えてくれた。一体何本くらい植えられているのだろう。順路にそって、森林公園を散策する。樹の葉がが日の光を遮ってくれるので、雨音は日傘を畳んでいた。

木漏れ日が時折雨音の白い肌を照らし出す。それが何故か俺にはとても眩しく感じられた。

「みーくんはずいぶん熱心にその子の顔を見てるようですねえ」
ひなたの冷たい声が俺に投げかけられる。

確かに抜けるように白い雨音の肌に見とれていたのは事実だが、決して変なことを考えて居たわけじゃないぞ？ 少なくともちよつと、ほんのちよつとドキドキしただけだ。

「みーくん、やっぱり最後の願い事はエッチなことにしようとしてるんじゃないの？」

「そ、そんなことないぞ！ 大体、俺にそんな度胸があると思ってるのか、ひなたは！」

ひなたは一瞬ぼかんと惚けた顔をしたあと、大口を開けて大爆笑してくれた。

「そりゃそうだ！ みーくん甲斐性なしだもん！ そんな大それた願い事なんて無理だよな」

「わたしには彼がそんなに甲斐性がないとは思えないんですが……」
「騙されちゃダメよ。みーくんは優しい男の皮を被った単なる優柔

不断男なんだから」

「そうなんですかつ？ それにしては昨夜、初対面で激しいSプレイをわたしに……」

「Sプレイってなんだよ！ それは、やりどころのない怒りを極厚の雑誌に乗せて頭を叩いただけじゃないか！ 人聞きの悪い事いうな！」

「そうやって言い訳するあたりが男らしくない」

俺はがっくりと肩を落とすと、「もう好きに言っってください」

とつぶやいた。

何だか目の前が霞んでいるけど、これはきつと汗が目に入ったからであって、決して涙ではないはずだ。

森林公園には、開けた湿地もあり、そこではハナシヨウブが一面に紫の花をつけて咲き誇っていた。雨音もひなたも、そして俺も思わず感嘆の声を上げてしまうほどに綺麗だった。ホント、カメラを持ってこなかったのは大失敗だ。

ハナシヨウブの園を抜けると、今度はヤマユリが待っていた。可憐なヤマユリの花に、これまた清楚な外見の雨音がそつと手を伸ばす。そういえば、ユリの花は結婚式のブーケなんかにもよく使われると聞いたことがある。なるほど、ジューンブライドにはぴつたりの花というわけだ。

花といえば、一応現在の俺は『両手に花』状態と言えなくもない。誰が見たって可憐な雨音と、認めるのはなんかシヤクだが決して不細工じゃないひなたが、俺を挟んで歩いているのだ。一六年生きてきて、もしかしたら始めてのシチュエーションなんじゃないだろうか。

「ん？ なに？ みーくん。ボクの顔に何かついてる？」

不覚にもひなたの横顔に見とれていた俺の視線に、彼女は敏感に気づいていた。くそつ、またこれをネタにしてきつとからかわれるに違いない。

ところが、ひなたはいつも俺をからかう時の意地のわるい笑顔を浮かべることもなく、俺から視線を外すと、ユリの花を愛おしそうに見つめる雨音の後ろ姿を見つめていた。

「……確かに綺麗な子だね……。ボクじゃかなわないかも……」
「え？ 何か言ったか？」

ひなたの呟きは、俺の耳に届くことなく風がどこかへ運んでいっ

てしまった。俺の方を振り向いたひなたは、少し陰りはあるけれどいつもと変わらない彼女らしい笑顔を見せて俺に言った。

「内緒！ 聞こえなくていいんだよ。ボクの独り言だからね！」

「なんだよそれ。ひなたらしくないぞ？」

「いいんだよー。それよりそろそろ展望広場に行かない？ あそこからだとかかなり遠くまで見渡せるからねー」

ふと時計をみると、時間は間もなく正午になるうとしていている。展望広場にはテーブル席もあるし、昼ご飯を食べるのにも丁度いい。俺はまだ名残惜しそうにヤマユリの花を見ている雨音にそつと声をかけた。

「そろそろ移動しよう。ひなたが腹減らしてるんだ」

「ちよつと！ ボク、そんなこと一言も……」

途端にひなたのお腹がぐうつと大きな音をたてる。俺は笑いをこらえながら、雨音に目配せした。「ほらね」と。

「ううううつ……。こんな時にお腹が鳴るとは。ひなた一生の不覚！」

「まあまあ、とりあえず展望広場へ行こう。雨音がお弁当作ってくれてるし、ひなたも……」

俺は恐ろしい現実を思い出していた。そう、ひなたも弁当を作ってきているのだ。あのひなたが、弁当を、作ってきた。間違いなくそれは食べ物以外の何かに進化しているに違いない。

俺は左手に握られたバスケットの取っ手をぎゅうつと握りしめた。そうしないと手が震えてしまいそうだったのだ。

「みーくん、何かすごく失礼な想像してない？」

「ななな、何のことでしょう、ひなたさん。いやあ、楽しみだなあ、ひなたのお弁当！」

本心なんか言ったら、必殺の『ひなたストレート』で俺の寿命がみるみる縮んでしまう。なんとかかしてひなたの作った化学兵器、もとい、弁当を食べることは回避しなければならぬ。

考える、考えるんだ！

「みーくん、なんだか顔色悪いですよ？ 大丈夫ですか？」

雨音が言う通り、多分俺の顔は真っ青だろう。脂汗がじわりじわりと滲み出てくる。考えれば考えるほど、今回の回避ミッションは困難さを増していく。このままではひなたの作った大量破壊兵器を口にすることになる。

「だ、大丈夫だよ！ とにかくっ！ 展望広場へ行こう。その坂を上ったらすぐだから」

俺に残された時間は、この坂道を登り切るまでの僅か数分。その間になんとか脱出する手立てを考えなければ。

時間という物は無情に過ぎていくもので、展望広場に続く坂道はあっという間に終わり、今俺は、広場にあるテーブル席で二つの弁当を前に自分の今朝の大失敗を呪っていた。あの時、雨音が弁当をつくるなんて言わなければ、ひなたも対抗意識を燃やしたりしなかっただろう。

「さあ！ ボクの弁当は……じゃーん！ サンドウィッチでした！
！ ちよっとお母さんにも手伝ってもらったけどね」

俺は恐怖のあまり目を開けられない。どんな恐ろしいことになっているのか、想像するだけで背中に冷たい物が伝う。それと同時に翌日の新聞の社会面が頭に浮かんだ『白昼の惨劇 弁当に毒物』『痴情のもつれによる犯行か』等々……。

「うわあ！ すっごく美味しそうですよっ！ ひなたさん、お料理得意なんですか？」

……なに？ いま何と言った？ 『すっごく美味しそう』だった？ 俺はごくりと硬い唾を飲み込むと、覚悟をきめて目を開いた。

そこには、ごく普通のサンドウィッチがバスケットに詰められて置いてあった。馬鹿な！ これをひなたが作っただって？ 有り得ない！ いや、普通なのは外見だけに違いない。きつと口に入れた

が最後、胃液を出し尽くして最後は血反吐を吐くような苦しみを味わう事に……。

「じゃあ、ひなたさん、いただきますねっ！……美味しい！みーくんも食べてあげてください！ 本当に美味しいですよっ！」

驚愕の光景がそこにあつた。あのひなたの作ったサンドウィッチを、雨音が美味しそうに食べている。雨音の料理の腕は確かだ。恐らく味覚も同様だろう。だとしたら、このサンドウィッチは人の食べ物として成立していることになる。

俺は震える手でトマトとレタスのサンドウィッチをつまむと、目を瞑り、普段は信じもしない神に祈り、そして覚悟完了。がぶりと一気に半分ほどを口にねじ込んだ。

「……うぐうっ……！」

口の中に何とも言えない酸味と甘さと渋みが広がっていく……！

これは、いったい何の味だ！？ トマトの酸味は分かる。だが、このまったりとした甘みは一体……。ふと雨音が食べるサンドウィッチを見ると、それはシンプルなハムとレタスのものだった。あれは普通の味なのだろう。だが、この野菜のサンドウィッチはどうだ！ 人間の食べ物にはほど遠い味だぞ！？ 咀嚼するたびに舌に、

脳に、不味いという信号を送ってくる。胃が痙攣して毒物を吐き出すともがいている。このサンドウィッチは危険だと叫んでいる！

「それじゃあ、こっちの野菜のサンドウィッチもいただきますね！」

雨音が件のサンドウィッチに手を伸ばす！ ダメだ雨音！ それは危険物だ！

「はむ。もぐもぐ………うっ」

遅かった。みるみる雨音の顔色が変わっていく。血色のよかった桜色の頬は、今や青紫色に染まり、笑顔のまま固まった顔には、びっしりと脂汗が浮かんでいる。

「そっか、おいしいか！ ろくに味見もしてなかったけど、やつぱり作って来てよかった！ どれ、それじゃあボクも一ついただきます！ はむ……もぐもぐ……うっ」

どうやらひなたのヤツも野菜のサンドウィッチを引き当てたようだ。自分でも「うっ」と言うほどの味なのだから、俺たちがどういう状況に陥っているかはわかるだろう。」

雨音の顔色に比例するかのように、空には黒い雲が立ちこめ、稲光が走り始めた。そしてまもなく大粒の雨が降り始める。展望広場で昼食をとっていた家族連れやカップルなど客は、慌てて荷物を纏めて屋根付きの展望席へと移動していく。だが、俺たちは動けない。動いたら最後、胃の中のを全てぶちまけてしまいそうなのだ。

ふとひなたの方を見ると、彼女は白目をむいて気を失っていた。まずい！　と思う間もなくひなたは椅子ごとうしろにぶつ倒れ。びくんびくんと痙攣しはじめた。どうやら何も考えずに飲み込んでしまったようだ。口からはなにやら泡を吹いている。

「うええ……。凄い味ですう……。はっ！　ひなたさん!？」

「ううっ……。動いたら戻しそうだ……。まずい、ひなたが息をしていない!」

「吐瀉物が気道を塞いでいるんですっ！　はやく気道を確保しないと!」

そういつている間にもひなたの顔色は見る間に紫色に変わっていく。でも、気道確保っていったって、吐いたものが詰まってるんじや普通のやり方では気道は開かないだろう。だが、早くしないとひなたが死んでしまう！　死ななくても脳に酸素が行かなければ一生ものの後遺症が残りかねない。

「わたしが精霊の力……。『法術』で蘇生措置を試みます！　一時的に周囲の時を止めますよ!」

雨音はそういうと、まだ紫色の顔で言葉の旋律を紡ぎはじめた。時折言葉が途切れ、うっという声が混じる。まったくひなたの殺人兵器の威力は抜群だ。やがて、遠巻きに俺たちを見ていた客たちの動きが止まる。まるで石像のように動かなくなったのだ。

「時間が……。止まった……。?」

自分の周りで雨粒がひしゃげた球形になって静止している。その

中で、雨音はその身体に白い光を帯びながら、独特の旋律を伴った言葉を、まるで音楽のように織りなしていた。

ようやく詠唱が終わり、雨音の放つ光が俺たち三人を包み込んだと思うと、白い爆発となって一瞬で消えた。周囲を見ると、他の客の動きで時間の流れが元に戻ったのがわかった。不思議なことにあれほどむかついていた胃がすつきりとしている。ずぶ濡れだった服もすっかり乾いてしまっていた。

「ついでにわたしたちの身体も浄化しました！ 毒物……じゃなかった、ひなたさんのサンドウィッチも無害化してありますよ！」

なるほど、ひなたの蘇生のついでに俺たちも浄化してしまったのか。そうだ！ それよりひなただ！ さっきは呼吸が完全に停止していた。死の一步手前まで行っていたひなたは、果たして無事なのだろうか？

「うつつ……なんか後頭がズキズキする。あれっ？ みーくん、どうしたの？」

「ひなた……よかったなあ。お前はもう少しで自分の作ったサンドウィッチという名の殺人兵器で死ぬところだったんだぞ？」

「殺人兵器ってなにさ！ そりゃボクは料理苦手だったけど、その言い方はあんまりだよ！」

「だって、お前、今死にかけてたんだぞ？ あれが殺人兵器じゃなくて何だって言うんだ」

ひなたは頬を膨らませてそっぽを向きながら、だけど目線だけは俺の方をむけてボソボソと呟いた。

「ボクだって……特訓したんだもん。みーくんに美味しいもの食べてもらえるように……。何度も何度も失敗して、指を切ったりして……」

「ひなたさん、頑張ったんですねっ！ すごいですっ！ みーくんもちゃんと褒めてあげなきゃだめですよ！」

ひなたの拗ねた視線と、なんだか妙な迫力のある雨音の視線が俺に集中する。褒めろったって、雨音もさっき死ぬ思いをしただろう

に。一体何をどう褒めるっていうんだ？

「……まあ、なんだ。努力は認めるよ」

「えっ？」

「すっげー不味くて死にそうだったけど、それでも俺のために作ってくれたものだからな。死にそんな思いしたけど、吐き出さずに飲み込んだぞ」

ふてくされていたひなたが、ゆっくりとお日さまのような笑顔になっっていく。

目のはしに何か光る物をためながら。

「あ……ありがとう、みーくん」

一面の黒雲に覆われていた空は、いつの間にか晴れはじめていた。あれだけ土砂降りだった雨もいつの間にか止んでしまっている、
『わたし、雨の精霊ですから、ちょっとしたことでも雨を降らせちゃいますよ？』

出かける前に雨音が言っていた言葉が俺の脳裏によみがえる。

そうか、今のは雨音の涙みたいなもんなのかもしれないな。

雨が上がった後、俺たちは屋根付きのバンガロー風のテーブル席に移動していた。雨で台無しになってしまったひなたのサンドウィッチの代わりに、俺たちは雨音謹製の行楽弁当を堪能している。いや、台無しになっていたのは調理直後からかわらないんだが。

「あ、ボクちよっと売店に行ってくるね」

そう言い残すと、ひなたはボクと雨音をテーブル席に残し、少し離れたところにある売店へと歩いて行った。

「ねえ、雨音。さっき急に雨が降り出したのって……」

「あ、あれですか。わたしの感情がコントロール出来なくて、涙が出ちゃったんです。家を出る前にも言いましたよね？ ちよっとしたことでも雨を降らせちゃうって」

やっぱりそうだったか。まあ、すぐ止んだからよかったけど。

「悲しくなくても涙が出たら雨降らしちゃうのか。うーん、さすがは雨の精霊……」

「でも、今の雨がわたしの降らせたものだってひなたさんに言っても、きつと信じてはくれないでしょうね」

雨音は少し寂しげな目でひなたの持つてきたバスケットを見ている。雨に濡れたサンドウィッチは、もう食べられることもない。もつとも無事だったとしてももうご免だが。

「それはまあ、仕方ないかもしれないな。あいつ、昔っからUFOとか幽霊とか信じないやつだったから。テレビの心霊特集とか見ながらゲラゲラ笑ってるんだぜ。俺なんかその晩は怖くてトイレにも行けなかったってのに」

「そういえば、どうしてみーくんはわたしが雨の精霊だってあっさり信じてくれたんですか？」

あれだけ派手な登場をして、魔法のような力を見せつけられりや、ひなたのような石頭じゃなきゃ信じるしかないだろうに。

「ま、そんな存在がこの世にいてもいいかな、と思ったただだよ。最初は夢だと思ったけどさ」

そんな話をしていると、両手で器用に三つのソフトクリームを持つたひなたが戻ってきた。

「はい、これはボクからのおごりだよ！ 売店で子供が買ってるの見て欲しくなっちゃった。はい、天音ちゃんにはボクからのお礼。かばってくれて嬉しかったよ！」

「うわあ！ これ、『そふとくりーむ』っていいのですよね？ わたし、一度食べてみたかったんです！」

雨音に尻尾がついていたらきつと千切れんばかりに激しく振られていることだろう。雨音に続いて、俺にもコーンの上にたっぷり盛られたソフトクリームが手渡される。

「これはボクからのお詫び。その……不味いもの食べさせてごめんなさい」

すこししゅんとした様子で、ひなたが言う。俺はもつとはやくひなたの努力に気づいてやっていればよかったと少し後悔していた。そんな俺の気持ちを察したのか、ひなたは「まだまだ料理は勉強中だけだね！」と明るく言うのだった。

第一章

みーくんと兩音とひなた

2 (後書き)

いかがでしたか？ もしよろしければ感想などお寄せ下さい。

第一章

みーくんと兩音とひなた

3 (前書き)

本編第一章の3をお送りします。楽しんでいただければ幸いです。

「でね、みーくんったらその時……」

「そうなんですかつ！ それは意外な一面です！」

俺を挟んで座っている雨音とひなたが仲よさげに言葉を交わす。

数時間前、初めて出会った時の二人は、とてもじゃないけどこんな穏やかな会話をできる関係になるとは思えなかった。

「……女の子ってのは謎に満ちた生き物だ……」

「え？ なにかおっしやいましたか？」

「ボクも是非聞かせて欲しいな。誰が謎に満ちた生き物なのか」

「聞こえてるじゃないかッ!!」

「ぶっ……ぶははっ！ みーくんが何を不思議がってるか、ボクにはちゃんと分かってるよ」

「なにが不思議なんですか？」

「みーくんはね、ボクたちが仲良くしてるのが不思議なんだよ。

そりゃ、ボク自身もどうしてだろうって思うけど、どうしてだか雨音ちゃんを悪く思えないんだ」

「不思議ですね。わたしも今朝は『なんて失礼な人だろう』って思ってたんです。でも、いまはひなたさんのいい所がたくさん見える気がしてしかたがありません」

梅雨の晴れ間の心地よい風が吹き抜ける。

俺の目の前で、雨音とひなたはしっかりと握手していた。

「雨の精霊云々を信じたわけじゃないけどね。雨音ちゃんは悪い子じゃない。それだけは信じられるよ」

「信じてもらえなくても、わたしは雨の精霊です。でも、ひなたさんに無理に信じてもらわなくても、今の言葉だけでわたしには十分です！」

やっぱり女の子って生き物はよく分からない。あれだけ張り合っていたひなたが、雨音の手を取ってにこにこしている。雨音もそう

だ。『デンパ女』だのなんだのと散々なことを言われたのに、そんなこと初めからなかったかのように柔らかな微笑みを浮かべている。もしかしたら、女の友情と男の友情は全く別物なのだろうか。

「やっぱり女は分からない……」

俺は柔らかな陽の光を浴びながら、テーブルに突っ伏して、ゆっくりと微睡みへと落ちていった。

「……くん、みーくん！ そろそろ閉園時間になりますよ！」

遠くから俺を呼ぶ声が聞こえてきた。閉園時間？ 何のことだろう。もう少し寝かせて……。

「困りました……。みーくん全然起きてくれません」

「なあに、こういふときはとっておきの手があるのさ。そう、あれはまだ小学生のころ。ボクとみーくんは一緒にお風呂に……」

「やめろッ！！」

「ほらね、すぐ起きたでしょ？」

白い歯をみせてニヤニヤ笑うひなたと、何を想像したのか頬を赤らめる雨音。そうだ、俺はひなたに数々の弱みを握られている。今の話もその一つだし、他にも医者さんごっこをしたときの話とか……。まずいぞ、そんなことを雨音に知られるのはすぐくまずい気がする。

「そうだ、閉園時間だった？ じゃあ、すぐ帰らないとなっ！」

強引に話題の転換を図ってみる。ひなたは相変わらずニヤニヤと笑いながら俺をみている。雨音は頬を赤らめながらも、何かを思いだしたように顔を上げた。

「そ、そうでしたっ！ さっき、園内の放送で間もなく閉園時間です、って」

六月の日はまだ高く、まだ日没までは結構な間がある。だが、確かに太陽は西に傾いでいた。

「よし、今日はもう帰ろう。……ところで、二人に聞きたいんだけど」

「なんだい？ みーくん。寝てる間に寝言でボクに愛の告白でもしなかったか、とか？」

これも俺の弱みの一つだ。小さい頃、「ひなたちゃんをおよめさんにする！」などと口走らなければ、一〇年以上経った今になってこんな風にかかわれずに済んだものを。幼い頃の自分の愚行に、思わず近くに置いてあった大きな岩めがけて頭突きを連発したい衝動に駆られるが、とりあえず最大限の自制心をもって愚行を重ねることを回避する。

「……俺、何時間くらい寝てた？」

「そうですね、二時間くらいじゃないでしょうか？」

「うんうん。ちょうどその位だね。おかげで雨音ちゃんにみーくんのことを色々とレクチャー出来たよ」

「レクチャーってなんだよ！ 人の恥ずかしい過去の話を本人の居ないところにするなんて、ひなた、お前卑怯だぞ！」

ひなたは心外だなというような表情をみせたあと、軽く溜息をついた。

「みーくんの目の前で話してたけど、みーくん止めなかったじゃないか」

「意識がないのに止められる方がおかしいだろ！」

「あ、あのっ、ひなたさんは決してみーくんのことを悪く言ったりはしてませんかっ！」

俺の剣幕に押されていたのか、それまで俺とひなたのやりとりを呆然と見ていた雨音が割り込んできた。

「みーくんの小さい頃の話とか、今の学校のお話とか、そんなことだけでしたから！ だからひなたさんを怒らないであげてくださいっ！」

だから、小さい頃の話はそれだけで十分俺の弱みになるんだよ……。だが、雨音はそんなことには少しも気づかない様子で、「ひな

たを怒らないで」と繰り返す。

「あー、もう！ 分かった分かった！ 分かったから雨音も頭あげて！」

「本当ですか？ うっ、よかったっ……。つく……」

にわかにかが曇りだし、ぽつり、ぽつりと冷たい滴が落ちてくる。雨音の感情のコントロールがきかなくなり、その大きな瞳からはぼろぼろと透き通った涙の滴が頬に落ちていく。涙の量に比例して雨の勢いも強くなっていく。やがて空はどんよりと曇り、ばらばらと大きな音をたてて本降りの雨になってしまった。

「うわあ、さつきまで全然降る様子なんてなかったのに！ ボク、傘持ってきてないよ！」

「とにかく、屋根のあるところまで行こう！」

俺とひなたは、泣き止まない雨音を両方から抱えるようにして、雨の中を近くの売店まで走った。土砂降りの雨はあつという間に俺たち三人を濡れ鼠にしまった。売店で閉店作業をしていたおばちゃんが、店の奥から乾いたタオルを引っ張り出してきて貸してくれる。

「雨音、雨音。もう泣かないで。俺はちっとも怒ってなんかいない。ほら、この顔のどこが怒ってるのさ。ね、もう泣かないで」

俺は売店のおばちゃんに礼を言いに行ったひなたの目を盗んで、雨音の耳にささやきかける。ぼろぼろ、ぼろぼろと涙をこぼしながらも、雨音は俺の方を向いてくれた。

「本当に、ひなたさんのこと怒ってませんか？」

「もちろん。本当だよ」

「あ、ありがとうございます」

涙が鼻に抜けたのだろう。鼻声になりながら雨音は俺に頭を下げた。しばらくそうしていた雨音だったが、次に顔を上げたときには、すこし目のはしに涙が残っているものの、眩しいほどの笑顔で俺を正面から見つめてくれた。

「ぐすっ。みーくん、ちょっと嘘つきです」

「なんでさー！」

「出かける前に『悲しませるようなことはしない』って言ってました。でも、わたし泣かされちゃいました」

雨音の笑顔が輝きを取り戻すのに合わせるように、雨の勢いはおさまり、雲は晴れていった。

「いやあ、すごい雨だったね。雨音ちゃん、髪痛んじやうからちゃんと拭いておかなきゃだめだよ。それと、帰ったらすぐお風呂。夏風邪は治りにくいからね」

「雨音のことは気にしてるようだけど、俺には何もなのかな、ひなたさん？」

「男は雨に濡れてる方が格好いいんだよ。昔の紳士は傘もささなかつたっていうじゃない」

「いつの時代の話だよ！」

俺の大声もどこ吹く風。ひなたは空を眺めると、

「よし、雨は降りそうにないね。でも油断できないから……。はい、これ」

ひなたは両手に三本の傘を持っていた。コンビニで売ってるような安っぽいビニール傘だ。

「おばさんが店の奥から出してきたんだよ。帰りに降られるといけないから、って」

黙々と閉店作業を続けるおばさんの後ろ姿に、俺は声をかけた。

「あの、タオル貸していただいただけじゃなく、傘まで貸して頂いて……。本当にありがとうございます」

おばさんは振り向きもせず、ゴミの仕分けをしながら、それでも返事をしてくれた。

「どうせ誰も使わない傘なんだ。あんたたちに使ってもらった方が傘のためでもあるさね」

「必ず返しに来ます。三人で」

「ふん。あてにしないで待ってるよ」

店を出ると、辺りはすっかり金色の陽の光に包まれていた。売店のおばさんがゲートに「雨宿りしている客が三人いる」と連絡してくれていたので、俺たちはなんのお咎めもなく閉園時間をとっくに過ぎた森林公園をあとにすることが出来た。無愛想だけど優しいおばさんに感謝だ。

帰り道の長い長い下り坂。まだアスファルトの路面は乾いていない。白い日傘をさして俺の半歩前を歩く雨音の後ろ姿を見つめながら、俺は考える。雨音の言う通り、雨音が悲しんだり心がコントロール出来なくなると、雨音は雨を降らせてしまうらしい。

それも、どうやら『悲しい時』だけではなく、『嬉しい時』でもあつという間にざんざん降りの雨模様になってしまう。でも、普通に喜んでた時は大丈夫だったな。ということは、やっぱり自分の気持ちの動きを制御出来なくなったとき、雨音は雨を降らせてしまうんだ。

「みーくん、なんか視線で雨音ちゃんを犯そうとしてない？」

「な、なにをいうんだよ！ ちょっと考え事してただけだよ！」

ひなたがいかにも疑わしそうなジト目で俺を上目遣いに見上げてる。

「ま、どうせ甲斐性なしのみーくんには雨音ちゃんをどうこうすることなんて出来やしないでしょうけどねー」

「ひなた、お前は俺が平気で女の子を押し倒したり、あんなことやこんなことが出来るヤツだった方がよかったのかい？」

「えっ……。それはその……。ボクが相手なら……」

なんだか知らないが、ひなたは急に顔を赤くしたと思うと、なにやら口の中でごによごによと呟いて黙り込んでしまった。

「わからないなあ。いつもみたいにハッキリ言えればいいじゃないか」

「うるさいなあ！ ボクにだって言いたくても言えないことくらいあるんだよっ！」

いきなりキレられた。俺がなにか悪い事でもしたか？ こういうとき、昔から先に折れるのは俺だった。俺が折れて謝ると、ひなたは「仕方ないなあ、みーくんは」などと言いながらお姉さんぶった態度をとるのだ。

「ごめんごめん。そうだよな。ひなたにだって言いたくない事くらいあるよな」

「言いたくないっていうか、言いたくても言えないんだけど……」
言いたくても言えないこと？　ますます分からない。ひなたは俺が雨音にえっちな願い事をするのを心配してるんじゃないのか？
「とにかく！　みーくんは甲斐性なしで度胸もなくて優柔不断で、でもそれでいいの！　この話はこれでおしまい！」

強引に話を締めくくると、ひなたは前をいく雨音の隣に並んでなにやら楽しげに話をしていた。俺は二人のから少し後を、空を見上げながらぶらぶらと歩いていた。森林公園を出るときには金色だった空は、赤から群青色のグラデーションに染まっている。売店のおばさんが貸してくれた傘は、どうやら出番が来ることなく終わりそうだった。

やがて坂道が終わり、住宅街に続くバス道路に出る。ひなたと雨音のガールズトークはとどまるところを知らず、いまだにかしましく続いている。ちなみに帰りにもやっぱりバスに抜かれた。最終便のバスが若干遅れてたようだ。とことん凹む。

「でね、うちのガッコ、メチャクチャ変わってるのよ。文武両道か何かしらないけど、男女問わず必ず武道の授業を受けて、卒業までには全員が有段者よ？　体育専門の学校かつての」

「大変そうですね。でも、女の子で武道の有段者なんて、ちょっと格好いいかもです」

「ボクはなぎなたを選択したんだけどね、剣道と違ってスネを打つてもいいんだよね」

「へえ……。でも打たれたら痛そうですね」

「痛いよ〜。防具の上からでもじんじんするぐらい。雨音ちゃん

なんかはそうだなあ、合気道とか似合いそう。袴姿なんかもう最高に可愛いと思うわ」

「可愛い……ですか。格好良くなりたかったんですけど、無理ですよ。そういうばみーくんは何を選択したんですか？」

唐突に俺に話しが振られてきた。ボンヤリしてたから、ろくに話の内容なんて聞いてない。

「だから、みーくんは何を武道の選択科目で選んだのか、つてきてるんだよ。まあいいや。みーくんはね、中国武術を選択したんだよ」

「中国武術？ カンフーっていうアレですか？」

雨音がカンフーっぽいポーズを作りながら俺に問う。

俺が中国武術を選択した理由。それは単に『楽そう』だったからだ。太極拳のどこに激しい練習や厳しい修行のイメージがあるだろうか。普通はないよね？ 健康体操のイメージだよね？ ところがそれは大間違いだったのだ。

「楽そうだと思って選択したら、とんでもなくキツイ練習させられて、最初の頃なんか全身筋肉痛でまるでロボットみたいな歩き方だったもんね」

ひなたはきつとあの頃の俺の姿を思い出しているのだろう。笑いをこらえるのに必死といった様子だ。いいよいいよ。思う存分笑えよ。我慢は健康にわるいぞ。

「雨音ちゃん、みーくんの太腿触らせてもらったことある？」

「いえ、ありませんけど」

「みーくん！」

「はいはい。どうぞご自由に」

中国武術の基礎練習には、站椿功たんとしゅうこうというのがある。何をするのかというと、腰を落としてじつと立ち続けるだけという、我慢大会のような練習だ。コーチいわく「站椿功は我慢比べじゃない。ちゃん意識をすることで何を意識しないと何の効果もないぞ」とのことだが、まだ俺は站椿が我慢大会じゃないという確信は持てないでいる。

「本人の許可が出たから、ほら、ここ触ってみて」

「え？ こ、これ、全部筋肉ですかっ!？」

站椿功は確かに足腰を鍛えるのもの凄く役に立つ。でも脂汗流し、膝をガクガクいわせて立ち続ける姿はたぶん滑稽以外のなにものでもない。雨音はしゃがみ込むと、ジーンズの上から俺の太腿を触りまくる。なんか顔が上気してるような気がするのは気のせいか？
ぼつり。頬に冷たい滴が当たる。

「まさかっ!」

俺の脚をさする雨音の表情は恍惚として、せっかく精緻を極め尽くしたつくりの顔が、だらしなく、これ以上ないくらいだらしなく緩んでいた。もしかして……き、筋肉フェチ？

雨音は自分の感情をコントロール出来ないときに雨を降らせてしまふ。そう、いま、この時の雨音は、筋肉という俺には縁がなさそうに思えた漢の魅力にあらがえずにいる。この状態は危険だ！

「また雲行きがあやしくなってきたね。傘かりてきたの、正解だったでしょ、みーくん」

「ああ、すぐにさした方がいいぞ。特大の土砂降りがくるかもしれん」

「まさかあ。でもぼつぼつ降り始めてるから、一応さしておくかな」
俺とひなたが傘を開いた瞬間、天の底が抜けたかのような豪雨が俺たちを包んだ。傘をさしていなかった雨音は、唐突に降り出した雨でずぶ濡れになって、ようやく我に返ったようだ。

「え、え、え、え？ あ、わたし、またやつちやいました？」

無言で頷き、傘を手わたす俺。ひなたは突然の豪雨と強い風に、傘を持って行かれそうになりながら、それでもキヤーキヤーいいつつ状況を楽しんでいた。雨音は慌てて深呼吸して自分の心の暴走を抑える。だんだんと雨が弱くなり、やがて雲の向こうにさつきより濃い群青色の空が見え始めた。

「雨音がびしょびしょだ。とにかく家に帰ろう。このままじゃ風邪ひきかねないからな」

「えーと、精霊の『法術』を使えばこのくらい簡単に乾かせ……つと。そうですね。それじゃあ、あとで洗濯機と乾燥機使わせていただきますね」

ひなたが見ているのを敏感に感じ取ったのか、雨音は自分の力を使おうとはしなかった。理由は何となくだけど分かる気がする。超現実主義者であるところのひなたが見ている前で迂闊に力をつかったりしたら、きっと「ね、ね、今の手品の種を教えて！ 教えてくれなきゃ一晩中間い詰めるからね！」などと言いだして面倒な事になる。

ひなたはといえば、雨音の言葉を気にする様子もなく、多分「また変な妄想してるんだね」くらいの気持ちで聞き流しているようだった。

第一章

みーくんと兩音とひなた

3 (後書き)

いかがでしたか？
もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さ
い。

第一章

みーくんと兩音とひなた

4 (前書き)

本編第一章の4をお送りします。
それではどうぞ！

俺たちが家に到着する頃には、太陽はすっかり地平線の向こう側に隠れ、街灯の薄ボンヤリした明かりが住宅街の道路を照らしていた。

「それじゃ、今日は付き合ってくれてありがとね、みーくん」

「こちらこそ。……ホント、死なずにすんでよかった」

「なにかすつごく失礼なことを抜かしてやがりませんこと、みーくん？」

俺は雷に打たれたように直立不動の姿勢をとり、首の骨がボキボキと音を立てるほど激しく顔を横に振った。迂闊なことをいつたら今度は部屋の中から部活で使うなぎなたを取ってきて、俺に襲いかかってくるかもしれない。

「ふん。まあいいわ。ボクも今日は一日山歩きしてくっただけから、さつさとお風呂入って寝ちゃうね」

ひなたが門扉に手をかける。ふわりと香辛料の香りが風に乗って俺たちの鼻に届いた。これは、カレーだな。そう思った瞬間、三人の腹が同時に大きな音を立てて鳴った。

「くっ、年頃の乙女がカレーの香りごときでなんたる不覚ッ」

「ひなたは乙女って柄じゃないだろ。一人称がボクだし」

俺の何気ない一言に、ひなたは沈黙で答えた。何故か体感温度が少しだけ下がったような気がする。そういえば、ひなたが自分のことを『ボク』と呼ぶようになったのって、一体いつからだっただろう？。

「ふ、ふんだ。みーくんには微妙な乙女心が分からないんだよ。このとーへんぼくー！」

「なんだと!? いくら何でも唐変木はないだろ！」

「とーへんぼくで悪かったら朴念仁だよ。ホント、みーくんは昔から……」

昔からなんだって？ という問いは俺の口からは出なかった。口をつぐんだひなたの表情が、あまりに寂しげだったからだ。こんな時、俺はどういう風に声をかけていいか分からない。物心ついた頃にはすぐそばに居たひなたなのに、その時の俺には彼女がなぜかすごく遠い存在に思えた。

雨音は俺たちのやりとりを困ったような表情で見ていたが、すつと目を閉じて大きく息を吸い込むと、何かを決意したような目とひなたを見つめ、静かに切り出した。

「まず最初に、みーくんがひなたさんに悪いことを言いました。女の子に『乙女じゃない』なんて、絶対に禁句です」

うっ、た、確かにひなただって女の子だから、俺の物言いは失礼だったかもしれない。でもその後のひなたの言葉はあんまりだ。

「その次に、ひなたさんがみーくんに悪い事を言いました。自分の事を分かってくれないからって、唐変木とか朴念仁呼ばわりするのはよくないです」

そこまで言うと、雨音はふと天を仰いだ。俺たちもつられてもう夜色に染まりきっている空に目を向ける。

「わたし、思うんです。みーくんも、ひなたさんも、天に向かって唾を吐いたようなものじゃないかって。いま「べつ」て唾を吐いたら、それは自分に降りかかってきますよね？ さっき二人が言い合ったのは、自分自身に向かって唾を吐くようなものだと思うんです。だって、二人はずっと一緒に育った幼なじみで、言ってみれば自分の半身のような関係だと思うから……。だから、相手だけじゃなくて自分も傷つくような言い合いをしないで欲しいんです」

自分の半身……。意識したことはないけれど、雨音のいうことももつともだと思う。冗談とか例え話じゃなくて、ひなたは一個の人間であると同時に、俺の中にも確かに根を張った、分かちがたい関係だ。それはきつとひなたも同じように思っているだろう。

「わたしから、二人にお願いがあるんですけど、いいですか？」

「な、なに？ ボクにできること？」

「……内容による」

俺たち二人の返答を聞くと、雨音は花がほころぶような笑顔で言った。

「かんたんな事です。ちゃんと正面に向かい合って、互いに右手を差しだして、それを握る。ね？ かんたんでしょ？」

確かにかんたんな事だった。でも、もしも雨音がいなかったら、きつといつもと同じように憎まれ口を叩いて終わりだっただろう。それが俺とひなたの日常だったし、それが悪い事だなんて思ってもいなかった。

「え……つと。その……」

ひなたが俺の正面に立って上目遣いに俺を見上げてくる。先に言わせたらなんだか負けのような気がしたので、俺は先手をとることにした。

「ひなた、さつきは『乙女って柄じゃない』なんて言っでごめん！

許してくれるなら、その、握手してくれるかな」

「えっ……ええと。ボクこそつまらないことで怒ってひどい事言っちゃって……。ごめんなさいっ！」

ひなたが深々と頭を下げる。こんな風に俺にあやまるひなたなんて、初めて見た気がする。雨音はそんな俺たちを笑顔でみていた。

「それじゃあ、仲直りの握手です。みーくんの右手と、ひなたさんの右手……」

雨音が俺たち二人の右手をとると、少しずつ距離を縮めていった。俺の指先がひなたのそれに触れる。ひなたが一瞬びくつと手を引きかけた。雨音は「わたしの役目はここまでです」とでも言いたげに俺たちの右手から手を放した。ここまでしておいて、手を引くなんてそれこそ唐変木だ。俺は思いきってひなたの右手を握った。久しぶりに握ったその手は、思ったより小さくて、柔らかくて、少しだけ汗ばんでいた。

「はい！ よくできました！ みーくんもひなたさんも、大事な人にひどい事言っちゃだめですよ？」

ひなたが俺の右手をきゅっと握りしめてくる。困ったような上目遣いで、でもその瞳には少しの喜びの色を滲ませて、俺を見つめてくる。やがて、どちらからともなく握っていた手は解かれる。右の手にさつきまでの神聖な儀式　そう、雨音がいたおかげで出来た儀式だ　の感触が残っている。

ひなたはくいつと顔をあげると、俺の前でぐるりとまわれ右をして、再び門扉に手をかけた。

「じゃあ、ボクはお母さん特製のカレーでお腹一杯にしてからゆっくり寝るね！　みーくん、また明日！　雨音ちゃん……今日は本当にありがとう！」

「食い過ぎるなよ？　俺は相撲取りみたいになつたひなたは見たくない」

「あ、ひっどーい！　ボクそんなに太らないもん！」

さつきの言い合いと同じようできて、どこかが優しい、そんな言葉の応酬。雨音もこんどは何も言わずに晴れやかな表情で俺たちを見ていた。

「ただいまー。……つていつても誰も返事してくれないんだけどね」「そついえば家のかたはどうされてるんですか？　独り暮らしって仰ってましたが」

「んー、母さんは俺が小さい頃に病気で亡くなって、親父殿は仕事でスペインに住んでるよ」

俺は玄関で靴を脱ぐと、すぐ風呂場に向かい湯船に湯を張る。なにしろ、雨音がずぶ濡れなのだ。早いところ風呂で身体を温めてやらなきゃいけない。

「つて！　なんで服も髪もすっかり乾いてるんだ！　着替えに思つてスウェットも用意したのに！」

脱衣場から戻ってみれば、雨でぐしゃぐしゃだった雨音の白いワ

ンピースはすっかり元通りに乾いて、まるでお日さまの下で今まで干されていたかのようだ。おなじくびしょ濡れだった長い黒髪も、痛むこともなくさらさらと腰まで流れている。

「だって、ひなたさんが居るところで力を使ったら、多分面倒な事になるじゃないですか。だから、みーくんの家に着くまでわたし我慢したんです」

「まあ、そりゃあ賢明な策だとは思っけど。……風呂湧かしてるのつてもしかして無駄？」

「身体を清潔に保つ、と言う意味なら入浴はわたしに必要ないんです。どんなに泥まみれになっても、汗だくになっても、精霊の持つ力……『法術』を使えばあつという間に元通りですから。でもわたし、お風呂は大好きなんです。少しぬるいくらいのお湯にゆったり浸かるのがいいんですよ」

そういう雨音は何とも言えない恍惚とした表情をしていた。余程風呂が好きとみえる。俺のやったことも無駄じゃなかったか。

「そういえば、着替えとかはどうするの？ 『法術』でなんか作れるとか？」

「そうですね。このワンピースはわたしの衣服の１パターンでしかありません。まあ、基本装備がこれ、だと思って下さい。で、『法術』を使うと」

雨音が瞑目し、口の中で軽やかな言葉の旋律を紡ぐ。白いワンピースが眩しく輝きだし、その光は容赦なく俺の瞳に突き刺さる。俺は目を逸らし、片手で顔を覆って光を遮った。

「ほら、この通り。紫陽花柄のパジャマの出来上がりです！」
さっきまで上品な白いワンピース姿だった雨音は、こんどは少しばかり子供っぽいデザインのパジャマに身を包んでいた。薄いピンク地に水色の紫陽花が鮮やかにプリントされている。

「はー……、やっぱりその『法術』便利だよなあ。なんでも思うままじゃないか」

「そうでもないですよ？ 『法術』を使うには必ず『マナ』を消

費します。マナというのは、そうですね、みーくんに分かりやすいと、自動車を動かすガソリンとか、モーターを動かすための電池、つまりエネルギー源だと思ってください。『法術』を使う者が集められるマナの量は、それぞれの能力によります。そして、マナはわたしたち精霊が存在するためにも消費されています。もし自分の存在を維持するだけのマナを残さずに力を使えば、その精霊は…消滅してしまいます」

「しよ、消滅!?!」

「はい。綺麗さっぱり。霊魂が残ることもなければ、生まれ変わることもありません。だから、『法術』を使うときはきちんと自分の存在出来る分を残して、周囲の空間に漂うマナを上手に集めてやる必要があるんです。どうです？ わたしもちよつとしたものでしょ？」

ちよつとしたものどころじゃない。もし俺が「一歩間違えたら完全に消滅する危険と引き替えだが『法術』を使えるようにしてやる」と唆されたとしても、絶対に首を縦には振らないだろう。そんな度胸、俺にはない。

俺が呆然と雨音を見つめていると、彼女はおかしそづくすくすと笑いを漏らした。

「わたしたちにとって『法術』を扱うことは、そうですね、みーくんたちが自転車に乗るのと同じくらい気軽なことだと思って下さい」「自転車は転ぶこともあるじゃないか」

「補助輪付きの自転車ということにしておきます。とにかく、わたしたちにとってはごく自然なことなんです。だからそんなに心配さうな顔しないでいいんですよ」

俺は思わず自分の顔に手をやっていた。そんなに心配さうな顔をしていたのか？ いや、確かに「下手をすると消滅します」なんて言われて、はいそうですかと落ち着いていられるほど俺は図太くない。というか、自分の存在が消えるなんてことを、なんでそんなに簡単に口に出来るんだ。

「あ、お風呂入れますね。みーくんが先に入りますか？」

雨音の声に、俺はようやく我に返った。そうだ、彼女もいつてんじゃないか。精霊にとって『法术』を使う事はごく自然なことだ。ならば、その言葉を信じる以外に俺に何ができる？ そう考えると、頭の上ついていた血がすうつと下がっていくのが感じられた。なんて事だ。俺はこんなに動揺してたのか。

「みーくん、どうします？ わたしは後でもいいんですが」

「いや、先にゆっくり浸かってよ。俺はその間に夕飯の支度しておくから」

「え？ それでしたらわたしがお風呂いただいてから用意させていただきますけど？」

「いいからいいから。今日は朝食も昼の弁当も作ってもらったんだ。夕飯くらいは俺が作るよ」

俺は雨音の背中を押して脱衣場へと向かう。ついでに洗濯物を全自動の洗濯乾燥機に放り込んでスイッチオン。ドラムの中の洗濯物が踊るのを物珍しそうに見ている雨音を促して、浴室に入る。カーンやシャワーの使い方、それに入浴剤や石けんやシャンプーを一通り説明して、

「それじゃあ、ごゆっくり」

俺は風呂場を後にしてキッチンへと向かうのだった。

「さて、何を作るか……」

俺だけなら適当に野菜炒めとか、ラーメンとかで済ませてしまう夕飯だったが、今日からは雨音がいる。しかも、彼女が作ってくれた朝食と弁当はそれはもう思い出すだけでだれが出そうなほど美味かったのだ。ここは一つお返しをしなければ男が廃るというものだ。

「とりあえず冷蔵庫の確認、っと。牛挽き肉と……豆腐があるか。」

これは『アレ』を作れとの神様のお告げに違いない」

アレ、そう豆腐と挽肉とくればアレ以外のメニューは有り得ない。そして、この俺はアレを作る事に関してはちょっとした自信を持っている。

「そうと決まれば……ネギ、あるな。豆板醤、ある。鷹の爪、OK。花椒問題なし。ニンニクの芽は……っとあつたあつた。ちょうど芽が出てるニンニクがあるからこれ使っちゃえ。この前作った花椒油（山椒をサラダ油で煮た調味油）もまだあるな。ふっふっふ……これで本場四川人が泣いて喜ぶアレを作ってあげよう」

とりあえず、俺は材料や調味料の在庫を確認すると、先にキッチンの流しで米を研いだ。魚沼産のコシヒカリ。一人暮らしたと一〇キロの米を消費するのは結構大変な作業だ。丁寧に水加減を確認して、炊飯器のスイッチを入れる。最近の炊飯器の早炊きモードは馬鹿に出来ない。ちょっと昔の炊飯器で普通に炊いたご飯より余程美味しかったりする。技術の進歩はすごいものだと感じつつ、『アレ』を作る準備に入る。

まずは木綿豆腐をサイコロ切りにして、ごく弱火で塩ゆでする。その間に豆鼓、ニンニク、唐辛子粉、醤油、老酒、旨み調味料、甜麵醬、胡椒、砂糖で合わせ調味料を作っておく。別々に調味料を入れる作り方もあるけど、俺はこっちの方がスピードが上がるので、このやり方を好んで使う。豆腐をしばらく茹でたら、いよいよ中華鍋の登場だ！ 鍋を強火にかけ、油ならしをしておく。十分鍋が熱せられたら、こんどは鍋にごま油をひき、強火で加熱する。そこに牛挽肉を投入。パラパラになるまでしっかりと炒める。挽肉がぱらぱらになったら豆板醤をいれて、さらに香りが立つように炒める。中華は火力！ うちのキッチンがIHヒーターじゃなくて本当によかった！

さて、豆板醤の香りが立ってきたら、先に作ってあった合わせ調味料を投入。さらに炒める！ 焦げ付く寸前まで香りを立てるのがコツだ。このタイミングの見極めで『アレ』の出来の善し悪しがま

るで変わってしまう。そして鶏ガラスープを投入。ガラスープの素は業務用スーパーでつかいの売ってるから買っておくといい。色んな料理に使えるぞ。

さてスープを投入したら、ニンニクの芽を一センチくらいの斜め切りにして鍋に。さらにネギをみじん切りにして投入。そして、いよいよ主役の豆腐の登場だ。塩ゆでしたのは煮崩れないようにするのと、仕上げの煮込み時間の短縮のためだ。ついでに歯ごたえもよくなる。仕上げに手間取っていると焦げ付いても食べられたものじゃない『アレ』が出来てしまう。

中華は火力だ！ と言ったけど、豆腐を入れたあとは一旦弱火にして、しばらく煮込む。もう見た目は大分『アレ』らしくなっている。だが、まだ足りないものがある。それはとろみだ。『アレ』にはとろみが欠かせないのだ。水溶性片栗粉を鍋に回し入れ、再び火を強火に。ラー油と花椒油を回しかけて全体を一混ぜ。よし、完ッ壁ッ！

俺はコンロの火を消すと、脱衣場へと向かった。

脱衣場に人の気配がないのを確かめてから、扉を開く。ちょうどそのとき、タオルで身体の前半分だけを隠した雨音が、浴室の扉を開けて出てきた。

二人の間に気まずい沈黙が落ちる。

雨音の顔が見る間に赤くなっていく。

見ちゃいけない！ おい！ 見るな俺！ そう言い聞かせても視線が雨音の白い肢体から引きはがせないッ！ 湯に浸かりほのかに桜色に染まった白い肌がなまめかしい。雨音の硬直した手からタオルがこぼれ落ちる。一系まとわぬ雨音の姿が目の前に！ 扁平だ扁平だと馬鹿にしていた胸はやはり扁平だったけど、それでも少し柔らかな起伏を描いていて……。これはダメだ！ 今すぐ扉を閉めるんだ俺っ！

「ううう、ごめん!!」

俺は脱衣場の開き戸を全力で閉めた。その拍子に、右足の指を戸に思いきり挟んでしまう。廊下にもんどり打つてのたうち回る俺。だが俺は悶絶しながらも、俺は扉の向こうの雨音に本来の用件を伝えた。

「ゆ、夕食の準備が出来てるから……着替えたらダイニングへきて」「あ……分かりました……。すぐ行きますから待っていてください」

脱衣場の扉の隙間から、眩い光が漏れ出ている。どうやら雨音が『着替え』をしたらしい。扉の外で待っていると、さっきの紫陽花柄のパジャマを着込んだ雨音が頬を赤らめもじもじしながら出てきた。ううっ、やっぱり覗きに來たと思われたかも……。

「……覗きにきたわけじゃないからね」

「わかってます。あれは事故です。そういうことにはしておきます……。でも、どの辺まで見えました……?」

「いやもうタオルで隠れてたから全然!」

本当は全部見えていたんだけど、それをそのまま伝えるのはまずい気がして、俺は嘘をつくことにした。この場合、嘘をついておいた方がお互いのためだよな?

「そうですか……よかった」

「ところでうちの風呂はどうだった?」

俺は無理やり話題を逸らしにかかった。雨音も話題を変えたかったのか、すぐに応じてくる。

「とつても気に入りました! あのお湯が白く濁る粉、いい香りだし肌はつやつやになるし、身体は芯から温まるし、最高です!」

白く濁る粉というのは、百均ショップで一箱百円で何箱かまとめ買いしておいた入浴剤だ。あんな安物でそこまで満足してもらえならもう何箱か買っておこうかな。

「ところで……さっきから気になっているんですけど、何だか目が痛くありませんか?」

「ん? ああ、それは夕飯のおかずの匂いじゃないかな」

「匂いってというか、目が痛いんですけど……」

「まあまあ、ちょっとキッチンに来てごらんよ」

俺はパジャマ姿の雨音の両肩を押しながら『アレ』が鎮座しているキッチンへと向かった。雨音も絶対に感動するに違いない。何しる本場の人間が太鼓判を押ししてくれた究極の『アレ』なのだから。

「さあ、この中華鍋の中身を見てくれ。こいつをどう思う？」

「……とつても……赤いデス……」

おや？ 何だか期待した反応と違うぞ？ 雨音は中華鍋の中身の

『アレ』 〓 四川式本格麻婆豆腐を見つめて脂汗をたらしている。まるで地獄の釜でも見ているかのような形相だ。おかしいな、きつと「おいしそうですっ！」って言うってくれるものだとはかり思っていたんだが。

「ていうか、これ、唐辛子の刺激じゃないですかっ！ 目が痛いのですかこれ！ まるで赤い悪魔の煮物ですっ！ どれだけ辛いんですかこれ！」

「どれだけって言うてもなあ。親父の会社の同僚の中国人が四川省出身でさ、一度これを食わせたら泣いて喜んでくれたよ」

「辛いものばっか食べてて味覚が破壊されてる四川人と、繊細な味覚をもつ日本の由緒正しい雨の精霊と一緒にしないでください！」

ちよつとまつた雨音さん、その発言は四川人を激怒させるぞ？

だれだっけ、さっき家の外で口汚く罵りあう俺とひなたをたしなめて仲直りさせたのは。

「まあまあ。とにかく食べてみてよ。味は保証するからさ」

俺は深皿にたっぷりとその『赤い悪魔』をよそう。だがしかし、これでは麻婆豆腐は完成を見ないのだ。そう、最期の決め手の登場である！ 俺は花椒の粉をこれでもかとはかりに真っ赤に染まった皿に振りかける。まさに四川人もびっくりだ！

「さあ！ これが四川人も唸った究極の麻婆豆腐だ！ 遠慮せず食べてくれ！」

俺は皿をダイニングテーブルに運ぶと、一緒に作っておいた卵ス

「プとご飯、それにちりれんげを添えて、極上の笑顔で雨音が食卓に着くのを待った。」

「あうううっ……、目がしばしばしますう」

雨音は俺の期待の視線に耐えられなくなったのだらう、のそのそとちりれんげを右手にとると、彼女曰く『赤い悪魔』の入った皿に面と向かった。恐る恐るひとさじを掬い上げ、震える手で口に運ぶ。桜の花びらのような唇が開かれ、ちりれんげで掬われた真っ赤な料理を、彼女はその口に含んだ。

「っ！……あれっ！？……お、美味しいっ！」

やったぜ！ 四川料理をただ単に辛いだけだと思っちやいけない。味のバランスが大事なのさ。麻（山椒の痺れるような辛さ）と辣（唐辛子の辛味）のバランスが。このバランスがあつてこそその麻婆豆腐なのだ！

「わたし、もつと辛くて辛くて刺々しい料理だとばかり思ってた！ でも、この辛さはくせになりそうですっ！」

「ご飯にもよく合うでしょ？」

「とつてもー！」

さっきまで地獄の縁にいるような表情だった雨音は、辛い辛いを連発しながらもご飯二杯と四川式麻婆豆腐を完食してくれた。額に汗を浮かべながら、笑顔で食べきった雨音の瞳には、何かを成し遂げた者だけが持つ眩い光が宿っていた。

「ところで、最後の願いが決まるまではうちに寝泊まりしてもらおうとして、部屋をどうするかだなあ」

「わたし、居間のソファでいいですよ？」

「いや、そういうわけにもいかないでしょ。一応客間は有るにはあるんだけど……」

そう、部屋は余ってるのだ。余っているのだが、使えるかどうか

はまた別問題というわけで。まあいい、口で説明するより現状を見てもらった方が手っ取り早いだろう。俺は食器を洗う手を止めるとエプロンで手を拭き、雨音に「ついてきて」と目で合図して二階への階段を上った。

二階には俺の部屋ともう二部屋があり、一部屋は親父の書斎というか、書庫のようになっていた。そして問題の部屋は、廊下を挟んで俺の部屋の向かいにあった。

「いいかい？ 開けるよ？」

「は、はいっ！」

引き戸を開いて電気のスイッチを入れる。そこは六畳の和室だった。誰も使わない部屋には埃が降り積もり、天井の隅には大きな蜘蛛の巣が出来ている。ここに雨音を押し込むのはいくら何でもあんまりだろう。そう思って雨音の方を見ると、彼女はにっこりと笑みを浮かべていた。

「つまり、この部屋を使えるようにすれば、わたしの部屋として使っていていいんですね？」

忘れていた。彼女は『法術』の使い手、雨の精霊の眷属だったのだ。彼女の余裕からみて、この部屋を使えるようにするのは容易いことらしい。

「麻婆ばわーでマナも全開！ 一気に部屋の改造しちゃいますよっ！」

雨音が部屋の中央まで歩いて行く。いや、歩いているはずなのに畳の上の埃に足跡がついていない。雨音は『空中を』歩いているのだ。部屋の中央で彼女は静かに瞑目する。やがて、これまでで一番長い言葉の旋律が、雨音の花びらのような唇から漏れ聞こえてきた。雨音の身体が眩い光に包まれ、その光は部屋全体に広がっていく。

「ッ！！」

最期の一声が雨音の口から紡ぎ出されると、部屋を満たしていた眩い光は徐々にその勢いを失い、元からあった蛍光灯の光だけが室内を照らしていた。

「どうぞでしょう。わたしは結構上出来かと思うんですけど……」

畳の上には小さめの絨毯が敷かれ、その上にガラスのテーブルが鎮座している。部屋の隅には大きな鏡のついたドレッサーがあり、反対の隅にはシングルベッドが置いてあった。部屋中にもりに積もっていた埃は跡形もなく、まるで何時間もかけて掃除をして部屋の模様がえでもしたかのようなようだ。雨音はベッドの縁に腰掛けて、ちよっと自慢げに微笑んでいた。

こうして、当面の懸案事項である「雨音の部屋をどうするか」という問題は、実にあっけなく片付いてしまったのだ。やっぱりちよっと羨ましいぞ、精霊の『法術』。

まあ、ホントにくれるって言われても、俺は断るけどさ。

第一章

みーくんと兩音とひなた

4 (後書き)

いかがでしたか？ よろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

第二章 精霊は人間の常識を身につけられるか

1 (前書き)

本編第二章に突入です。今度は雨音がみーを追いかけて……。
それではどうぞ！

甲高い電子音が俺を眠りの世界から引きずり出そうと鳴り響いている。もう朝か？ 俺はもっと寝ていたいんだ。昨日は一日森林公園で歩き回って、疲れ切っている。だからあと五分でいいから寝かせて……。

「みーくん？ さっきから目覚まし時計が鳴ってますけどお、起きないんですかあ？」

すぐ隣で鈴を鳴らすような少女の声が聞こえた。眠いんだ。でも目覚まし時計は部屋の反対側の机の上に置いてある。寝坊防止のための工夫が裏目に出たな。俺は雨音の細い身体を抱きしめると、二度寝を決め込んだ。

「あんつ（はーと）」

「って！ どうして雨音が俺の布団で寝てるんだ!!」

寝ぼけていた頭が一発で覚醒していた。首の後に巻き付けられた雨音の腕を振りほどいて、俺はベッドから跳ね起き、部屋の反対側まで行くと、目覚まし時計のスイッチを押した。

「いったい今何時だ？ 昨日何時に目覚ましかけたっけ。デジタル表示は五時五〇分。普段より三〇分早い。なんでこんな時間に……？ あ、そうか。今日から学食の改装で弁当がいるんだった。

「ふあああ~~~~っ……。たかが三〇分、されど三〇分だなあ」
だが、弁当を作らないと、昼に大混雑した購買で、数の限られたパンを巡って他の飢えた生徒たちと、血で血を洗う激しいバトルを演じなければならぬ。当分は弁当を用意しなきゃいけないんだ。この時間に目をさますように身体のリズムを整えておかないといけないな。

「とりあえず雨音、また俺を起こしに来てトラップにはまったのは分かったから、まずは起きて出ていってくれないか。そんなに俺の着替えが覗きたいんなら話は別だけど」

「ええっ！ い、いいんですかっ！」

「んなわけあるか！」

俺は机の本棚から極厚の国語辞典を採り上げると、雨音の脳天めがけてそれを振り下ろした。

雨音の首根っこを引つ掴んで廊下に放り出し、制服に着替えて、顔を洗いに洗面所に向かう。

あれ？ キッチンからいい香りがする。

「あ、みーくん、朝ご飯、出来てますよ〜」

この匂いは……ベーコンだ。ていうことは、ベーコンエッグかな？

「雨音。わざわざ早起きしてまで朝食作ってくれなくてもいいのに」

「いえっ、せつかくお部屋まで貸して頂いて置いていただくんです。このくらいのことはさせていたただかないと」

ふとダイニングテーブルの上を見ると、布で包まれた四角い物体が目に入った。これってもしかして……。

「あ、お弁当も用意しておきましたよっ！ 朝ご飯を作るついでに手早くぱぱっ！」

「あ、ありがと……」

そういえば、昨日の弁当もそうだったけど、誰かに弁当を作ってもらうなんて何年ぶりだろう。幼稚園のころは親父が作ってくれてたけど、小学校中学校は給食だったしな。運動会の弁当なんかも親父が作ってくれてたけど、小学校高学年くらいからは自分で用意することが多くなった気がする。

「はい、今日はベーコンエッグですよー！ トーストにしようかとも思っただんですが、主食はご飯です。お弁当作るのにも必要でしたし」

雨音がダイニングテーブルに手早く料理を並べていく。カリカリベーコンに半熟の目玉焼きが載ったベーコンエッグ。生野菜のサラダ、それにご飯とネギと豆腐の味噌汁。トーストでも確かにいいかとも思っただけど、俺はどちらかというと朝はご飯派だ。

「さ、召し上がれー！」

雨音の料理の腕はすでに確認済みだ。俺は湯気を上げる味噌汁を一口すする。口の中に煮干しで取ったダシと、香り豊かな味噌の風味が広がっていく。うん、やっぱり雨音の作る味噌汁は美味い。

「い、いかがでしょうか？」

「うん、美味しいよ。昨日のも、今日のも」

「よかったあ」

雨音が心底安心した笑顔を浮かべる。うん、朝から超絶美少女の笑顔と、その子の手作り朝食をゲット。いやあ、俺は今もの凄い幸運に恵まれているんじゃないのか？ まあ、超絶美少女の雨音ではあるが、胸はまるでドーバー海峡の絶壁のように平べったいのだが。そんな俺の失礼極まりない考えには全く気づかない様子で、雨音はにこにこしながら朝食を平らげる俺を見ている。

「そういえば、今日は平日ですから、みーくんは学校ですよね？」

「うん。部活の練習もあるから、帰るのは七時くらいになるかな。」

ああ、そうそう。これを渡しておかなきゃ」

俺は小さな鈴のついた鍵をポケットから取り出して、雨音の手のひらに載せた。

「これ、うちの合い鍵。家にずっと居るのも退屈だろうから、暇だったら鍵かけて出かけてもいいからね」

「あ、ありがとうございますっ！ あの……それから……」

「『最期の願い事』でしょ？ 分かっているって。ちゃんと考えるから。大事なことから時間かけて考えるよ」

それを聞いた雨音は少し複雑な表情をしてみせた。ん？ 俺は何かまずいことでも言ったか？

「わかりましたっ！ 焦らないでじっくり考えて下さい。でも……ちよつとだけ急いでいただけると嬉しいかも」

「？ うん。分かった……」

俺は何か心に引っかかるものを感じながらも、それをカリカリのペーコンと一緒に飲み込むことにした。

「それじゃあ、俺は学校行ってくるけど、その間留守番お願いね」
 「はいっ！ みーくんは安心して学業に励んでください！」

曇りのない笑顔で手を振りながら、雨音は登校する俺を玄関先まで見送りにでてくれた。でも、あの笑顔、なんかいつもの。まだたった二日しか一緒にいないけど。いつもの雨音の笑顔とは違うような気がしてならない。なんというか、裏に何かを隠しているような、そんな感じだ。

いつもの通りにひなたの家のインターホンのボタンを押す。その途端、家の中からドタドタという足音と、「なんでもっと早く起こしてくれないの！」叫ぶひなたの声が聞こえてきた。

待つこと数分、身支度を調えたひなた玄関の扉を開けて出てきた。いや、整ってるかと言われたら微妙な感じなんだけど。ショートカットの髪は所々変な方向にはねてるし、口にはお約束のようにジャムを塗ったトーストくわえてるし。両手には長刀袋と防具一式、それに通学用かばんという大荷物だ。

「おまはへ！ はあ、いひまひよう！」

「とりあえず口にパンくわえたまま喋らなくていいから」

ひなたはもごもごと器用に口を動かすと、手を使うことなくトーストを食べきってしまった。

「これで問題なし！ さあ、今日も元気に学校へ行くぞ」

語尾になにやら謎の『』がついている上に、わざとらしくウインクまでしてみせる。ああ、間違いなくいつも通りのひなただ。

「朝練あるんだから、いい加減早起きにも慣れるよな」

「わかってるよ。ボクだって好きで寝坊してるわけじゃないもん」

「それじゃ、何か早起きする工夫はしてるのか？」

俺のその問いに、ひなたは腰に手を当て胸を反らせて誇らしげに答えた。

「お母さんに起こしてってたのんであるもん」

「それ、工夫でもなんでもないから」

俺の答えが気に入らなかつたのだろう。ひなたはぶんぶんという擬音がびったりな感じに頬を膨らませると、ぷいっとそっぽを向いた。

「みーくんがなんて言ったって、これはこれでボクの工夫なんだよ」「分かつた分かつた。とりあえず朝練に遅刻するぞ。師範、かほるちゃん……じゃなかつた、樟葉先生だよなあの人怒るとすげえ怖いのはお前の方が良く知ってるだろ？　というわけで、学校へGOだ！」

ボクは軽くひなたの制服の肩をおしてやる。ひなたはすこしバランスを崩したたらをふむが、すぐバランスを取り戻してボクの一步前を学校へと向かつて歩き始めた。

「別に毎朝起こしに来てなんて、ボク頼んでないからねっ！」

「はいはい。これは俺が好きでやってることだから気にしないでいいよ」

部活の朝練を終えて、俺は練習用のカンフーパンツとTシャツから制服に着替え直していた。全校生徒が何らかの部活に入らなければならぬうちの学校では、時間ギリギリになって登校してくる生徒などいるはずもない。

俺は体育館の男子更衣室を出て、新館校舎にある二年C組の教室へと向かった。そこが俺のクラスであり、ひなたも同じクラスだった。なぎなた部は女子ばかりだからか、朝練を少し早めに切り上げる。まあ、女の子の着替えは男のそれより時間がかかるものだろうから、それは仕方のないことだ。だというのに、俺が教室に着いてみればまだひなたは来ていなかった。

「いやあ、すっかり遅くなっちゃった。みーくんお待たせっ！」

「別に待ってたわけじゃない……。なんだかいい匂いがするな」

ひなたは俺の隣の席に座ると、「気づいたか」というようにニヤリと口のはしに笑みを浮かべた。

「汗かいてそのままなんて、年頃の乙女としてはアレだからね。コロンをつけてみたんだよ」

ふむ。まあ、そんなにキツイ香りでもないし、この程度なら制汗剤の匂いですって言ってもごまかせるだろうからな。

「先生にバレないようにな」

「大丈夫だよ。かほるちゃんも公認なんだ」

いいのかそれ。仮にも自分が顧問をしてる部の部員が校則違反してるのに、それを公認って。

「それにしても、きょうはかほるちゃん遅いね。何かあったのかな」予鈴はすでに鳴っている。予鈴が鳴ったらすぐに現れるのが、なぎなた部の顧問にして我がクラスの担任、かほるちゃんこと樟葉くすはかほる先生だった。他のクラスメイトたちも口々に「遅い」「何かあったんじゃない」「病欠？」などと言いつけている。やがて静かな潮騒のようだったさざめきは、教室の壁を通り抜けて他のクラスにまで届くほどの大騒ぎになっていた。

「うるさい！ 一体何の騒ぎだ！」

唐突に教室のうしろの扉が乱暴に開かれ、隣のD組の担任である寺井先生が怒鳴り込んできた。一瞬にして教室が静まりかえる。

「あ、あの、樟葉先生がまだいらっしやらないんです。みんなそれで心配して……」

クラス委員の古川香里ふるかわ かおりが、寺井先生に事情を説明する。寺井先生は「そんなことか」というような表情を浮かべた。

「樟葉先生は今校長室だ。なにやら急な転入生があったらしくてな。とにかく！ 大人しく先生が来るまで待ってる。次に騒ぎ声が聞こえたら……分かってるだろうな？」

寺井先生は体育教官も真っ青の超マツチヨである。背広の上からでもその筋肉の着き方が尋常じゃないのは一目瞭然だ。その超マツチヨ教師に睨み付けられた二年C組の生徒たちは、一様に真っ青に

なり、ガクガクと首を縦に振る。

「よろしい。おっと、噂をすれば影だな。樟葉先生、あとはよろしく」

「はい、みんな、お待たせ〜。席について下さいね〜」

二〇代半ばとは到底思えない童顔と、幼い服装センス。シヨートカットの髪も童顔にぴったり合っていて、高校生、いや、中学生だと言われても全く違和感がない。そんな女の子が、教室の前の扉を開いて、とことこ教壇に上った。もう何度も繰り返された朝の儀式だ。いいか、あれはどんなに幼く見えても担任教師なんだ。……よし、今日も何とか納得できた。

「はいよろしい！ きょうはですね〜、素敵な転校生を紹介しちゃいますよ〜？」

クラスメイトたちからどよめきが上がる。ふむ、転校生か。こんな中途半端な時期に転校するなんて、大変だよな。俺はそんな感じの軽い同情を、その転校生に感じていた。まあ、急な親の転勤とか、そんなところだろうな。

「では〜、早速、紹介しましょう〜。男の子には朗報です！
とつてもチャーミングな女の子ですよ〜？」

クラスの男どもが雄叫びを上げる。俺はといえば読みかけの文庫本を机の下に隠しながら読み進めていた。転校生と聞いたって、クラスのなかにはいつてしまえばクラスメイトの一人に過ぎない。だったらそのうちイヤでも話す機会が出来るだろう。

「では、風香さん〜、入って下さい〜」

ざわめいていた教室の空気がピンと張ったものになる。俺も文庫本から視線を上げて、入り口を見る。シンと静まりかえった教室に、その転校生が姿を見せた。白い上品なワンピースに、大きなつばのリボン付きの帽子。長い黒髪は腰までさらさらと流れるように伸び、華奢な手脚は絶妙の曲線を描いて……ええい！ もういいだろ！
なんで『彼女』がこんな所にいるんだ！

「はい！ 男子諸君〜？ いくら想像以上に可愛い女の子だから

って、そんなにがつついてたら逆に引かれちゃいますよ〜？ では風香さん、自己紹介をおねがいますね〜？」

その『彼女』、つまり雨音が、黒板にちんまりした字で『風香雨音』とチヨークで書き、くるりと振り返った。

「はじめまして。風香雨音です。雨の音、とかいてあまね、と読みます。父の仕事の関係で急に転校が決まりました。前の学校が私服登校だったので、制服が出来るまでしばらくは私服で失礼します。みなさん、よろしくお願いしますね」

すまし顔で柔らかな笑みを浮かべる雨音。そうか、朝の笑みの裏に隠されていた『何か』はこれだったのか。きつと精霊の『法術』でもって学校に潜り込むことに成功したんだらう。でも、なんで学校に来るんだ？

「はい、風香さんの自己紹介でした〜、みなさん拍手〜」

主に男子生徒から割れんばかりの拍手が惜しみなくおくられた。

雨音は微笑みながら手を振ってそれに応えている。

「はい、それじゃあ、風香さんの席はあ〜」

俺の左隣は空席である。いや、今となつては空席『だった』と言うべきであらう。右隣にはひなた、左隣に雨音。学校にまでこのフオーメーションを持ち込むことはないだろ？ いったい何の嫌がらせだ？

「よろしくおねがいますね、みーくん」

小首をかしげながら俺に微笑みかける雨音。あとで絶対に絞り上げてその魂胆を白状させてやる。極厚月刊マンガ雑誌が唸りを上げるぞ。

「雨音ちゃん、やっぱりただの転校生なんじゃないかあ。デンパな話ばっかしてるけどいい子だし、こりやみーくんの家に住まわせておくのは勿体ないね！ いっそボクのウチの子にならない？ 悪いようにはしないよ？」

ひなたの迂闊な発言は、静かな水面に一滴の滴が落ちたように、教室に波紋を広げていった。

『みーの家に住んでる……だと……？』

ゴゴゴゴゴ……という効果音と共に、クラス中の男子生徒たちからの殺意に満ちた視線が俺に突き刺さる！

「それは、魅力的なお誘いですけどね、わたしは出来るだけみーくんのそばにいたくちやいけないんです。願いがいつ決まるかわかりませんか」

「ふむう、よつぼどみーくんの願いを叶えることが大事なんだねえ」

「ええ、それがわたしが地上に居続ける理由ですから」

すっかりひなたを手なずけてしまった雨音は、俺がクラスの男子全員から明確な殺意のこもった視線を浴びているのをよそに、ガタガタと机を動かして俺の机とくっつけた。クラスの男子生徒たちからの圧力がさらに高まる！ 視線で人が殺せるとしたら、俺はこの数分で何回死んでいるだろうか。

「あ、雨音さん？ 何をしてるんです？」

「だって、急な転入でしたから、教科書がないんです。樟葉先生にいったら、みーくんに見せてもらうようにって言われました」

担任にもみーくん扱いされている俺だった。

「……何を企んでるのか、あとでじっくり聞かせてもらうからな」

「え？ みーくん何か言いましたか？」

「……なんでもないよ」

こうして、雨の精霊で俺の願いを叶えるために地上に留まってい
るはずの雨音は、俺のクラスに転入してきたのだった。

第二章

精霊は人間の常識を身につけられるか

1 (後書き)

いかがでしたか？ よろしければご意見ご感想などお寄せください。

第二章 精霊は人間の常識を身につけられるか

2 (前書き)

本編第二章の2をお送りします。
それではどうぞ！

昼休み。俺は雨音お手製の弁当を持って、ひとり中庭へと向かっていた。なぜかって？ この弁当を教室で開いてみる。雨音もおそらくは同じ中身の弁当を持ってきているに違いない。それを他のクラスメイトに見られたら？ 特に男。想像するだけでも背中に嫌な汗が伝う。さらに右隣の席にはひなたが陣取っている。この弁当を見られたら……。想像したくない。

目指す中庭は、新館と旧館に挟まれたちよつとした広場だ。花壇の縁を椅子代わりにして昼食をとる生徒も少なくない。

昨日に続いて梅雨らしからぬ晴天に恵まれた今日も、中庭には男女問わず弁当を手にした生徒が集まっていた。学食の改装工事のせいか、普段よりかなり多いようにも見える。

「さて、さつさと弁当食べて教室に戻るか」

俺は空いていた花壇の縁に腰掛けると弁当の包みを解こうとした。そのとき、ぽつり、と冷たい物が俺の頬に当たった。空を見上げると、さつきまであれほど晴れ上がっていたのが嘘のように、雲が空一面を覆っている。

「これは……まさかつ！」

雨音が泣いている姿が俺の脳裏に浮かび上がる。まさか、俺が黙っていなくなつたからか？ いや、もしかしたらクラスの男子たちから質問攻めに遭つて、泣きそうになつてるとか？ とにかく雨音に何かがあつたのは間違いない。

俺は解きかけた弁当をそのまま持つと、教室へと向かって小走りに歩き出した。そうしている間にも、雨の粒は数を増していく。急な雨に驚いた生徒たちが、屋根のある渡り廊下へ向かつて走っている。俺は生徒たちをかき分けながら教室へと急ぐ。

「……く〜ん、み〜く〜ん、どこですかあ？ ぐすつ」

階段を上り、教室のある三階にたどり着くと、廊下に雨音がベそ

をかきながら俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。やっぱりか。

「雨音！俺はここだ！」

「！みーくん……。うつつ……」

雨音の大きな瞳が涙でどんどん潤んでくる。それと同時に、窓を叩く雨粒の数が増えていく。

「どこにいつちやっただんですかつ。せつかく一緒にお弁当食べようと待ってたのに。その間、クラスの男子の皆さんに囲まれて大変だったんですよっ」

どうやら心配したことは両方ともビンゴだったようだ。俺はとりあえず黙って雨音にハンカチを渡した。

「ぐすっ、ありがとうございませふ。ずびーっ」

涙を拭けというつもりで貸したハンカチは、見事に雨音の鼻水まみれになってしまった。

「あ、みーくん！どこ行ってたのさ！雨音ちゃんが大変だったんだぞ！」

廊下の反対側からひなたがずんずん歩いてくる。どうやら俺を捜して歩き回ったようだ。額には汗が滲み、乱れた髪が頬に貼り付いている。

「いや、弁当食べようと思って中庭に……」

「だったらなんでボクと雨音ちゃんを放っていくのさ！あのあと雨音ちゃん、男子に囲まれて質問攻めにあって大変だったんだから！」

ひなたはまったく容赦がない。俺に言い訳をする隙すらみせてはくれないのだ。なんだよ、教室に残って弁当を開いたら、それはそれで大騒ぎになりかねないから俺は席を外したんだぞ？ まあ結局俺のやったことは無駄だったわけだけど。

「……ごめん」

「謝るならボクじゃなくて雨音ちゃんにでしょ！ほら！」

廊下には騒ぎを聞きつけて何事かと集まってきた他のクラスの生徒たちも大勢いる。そんな中で謝るのは、顔から火が出て校舎に延

焼しかねないほど恥ずかしい。でも、ここで俺が謝らなければ、ひなたは絶対に俺を許さないだろう。

「……悪かった」

「声が小さい！」

「黙っていなくなつて悪かった！ ごめんなさい！」

俺は半ばやけくそで、叫ぶようにして雨音に謝った。同時に思いきり頭を下げる。周りの生徒たちの視線が俺たちに集まっているのが分かる。こんな羞恥プレイを強要されるなら、最初から大人しく教室で冷やかされることを選ぶべきだった。だが、まさに後悔先に立たず。俺は雨音の許しの言葉を待つて頭を下げ続けた。

「……ゆるしてあげません」

「えっ!?!」

てつきりすぐに許してもらえればかり思っていた俺は、素っ頓狂な声を出してしまった。顔をあげると、目を真っ赤に泣きはらした雨音が、じつと上目遣いに俺の顔を見つめてくる。

「絶対に許してあげません。……でも、これからはちゃんと一緒にご飯を食べてくれるって約束してくれるなら、今回だけは特別に赦してあげます」

雨音はその花びらのような唇を一文字にきゅつと結び、涙をこらえつつ俺の瞳を覗き込んでくる。まるで、そこから俺の心の底を覗こうとしているかのように。雨音の有無をいわさない瞳に気圧されるようにして、俺は首を縦に振っていた。こんな風に迫られて、断るなんて出来っこない。

「……よかった。本当は断られたらどうしようかって思ってたんです。みーくん、やっぱり優しいですね」

目の縁に涙を浮かべながら、それでも雨音は花が開くような微笑みを俺に向けてくれた。俺はちつとも優しくなれない。からかわれるのが嫌で、雨音を残して教室から逃げ出したのに。それなのに、雨音は俺を優しいという。俺は自分が情けなかった。

「とにかくっ、教室に戻つてお昼食べましょう！ みーくん、もう

食べちゃいました？」

「いや、まだ蓋もあけてない」

「ちようどよかった。ボクたちもまだ全然食べてないんだよ。さ、教室に戻る！」

周りに集まった野次馬を視線で追い散らしながら、ひなたが先頭に立って教室へと向かう。俺と雨音はモーセの前で海が割れるかのように人退いていって出来た道を、ひなたに続いて歩いていった。

ふと、廊下の窓から空を見上げると、さっきまで大粒の雨を降らせていた雲はすっかりどこかへ消え去り、代わりに眩しい太陽が顔を見せていた。

結局雨音とひなたと俺とで机をくつつけて昼食をとったあとは、いつも通りの退屈な午後の授業だった。俺の左隣では、雨音が真剣な表情で数学の教師の退屈きわまりない講釈を有り難そうに聞き入っている。こうしてみていると美少女優等生に見えなくもない。ただし何度も言うようだが、胸は表現するのが憚られるほどに平たいのだが。

俺がじつと雨音の横顔を見ていると、その視線に気づいたのか、雨音も俺の方を見上げてきた。小首をかしげて頭の上に『？』を浮かべている。俺は慌てて雨音の顔から視線を外し、黒板に書かれている複雑怪奇な数式をノートに写すふりをはじめた。だって恥ずかしいじゃないか。雨音の顔に見とれてた、なんてことがばれたら。「ふむふむ。みーくんはそんなに雨音ちゃんのお顔が見ていたのかな？」

なんたる不覚。右隣の席にはひなたが座っているのを忘れていた。しかし、それを知ってるってことは、授業中だつてのに俺の方ばかり見てたつてことじゃないのか？俺がノートを取る手を休めて、今度はひなたの顔をじつと見ていると、ひなたが横目でチラリチラ

リと俺の方を伺ってきた。心なしか頬が赤いように思える。それでもひなたを見つめ続けていると、今度は真っ赤になって下を向いてしまった。小声でひなたに話しかけようとしたその瞬間。

スコーンといい音を立てて、俺の眉間にチヨークが命中した。

「授業そつちのけで女子とイチャイチャか。いい身分だな」

数学の大門先生だいもんが中指で眼鏡をくいつと上げながら、俺に冷たい視線を投げかける。同時に教室の空気が『当然の報いだこのラブロメ野郎』という雰囲気に支配されていく。だれが好きでこんな状態に身を置いているものか！ と叫びたいところだが、そんなことをしても『リア充爆発しろ！』といわれるだけだろう。

「すみません。以後気をつけます」

「ふん。まあいい。授業を聞いていないで困るのは、私じゃなくてお前自身だからな。おっと、そろそろ時間か」

大門先生がそう言うて開いていた教科書を閉じると同時に、教室のスピーカーからチャイムの合成音が流れてきた。クラス委員が号令をかけ、先生に礼をする。見つかったのが授業終了間際だったのはラッキーだったかもしれない。大門先生は、授業以外ではそんなに熱心に生徒を指導する先生じゃないことで、生徒の間では知られている。

案の定、先生はそれ以上俺を咎める事もせず、さつさと教材を片付けると、教室から出て行ってしまった。その代わりに待っていたのは、クラスメイトたちからの質問攻めだった。

「よう、みーくん。お前、さつきからずっと風香さんの方ばかり見てた。やっぱお前たち出来てんのか？」

「え？俺はみーがひなたの方を見てたのしかしらないぜ？おい、みー。お前二股かけてんのかよ！」

もう誰も俺の言い訳なんか聞いてくれもしない。いつの間にか俺は『二股をかけている最低男』のレッテルを貼られてしまった。俺がいったい何をしていたっていうんだ。俺は頭を抱えてへたり込みたい衝動に駆られた。その時、鈴の鳴るような、小さいけれどハッキリ

とした意志のこもった声が教室に響いた。

「みなさん、やめてください！ みーくとわたしは別になんでもない間柄ですつ。二股なんてかけられてませんっ！」

雨音は教室中が静まりかえる中、彼女に似合わないほど堂々とした態度で、騒ぎ立てていたクラスメイトたちの顔を見まわした。

「ひなたさんもそう思うでしょう？ みーくんが二股かけてるなんて、そんなことは無いって」

「え、ええ？ ぼ、ボクにそんなこと聞かれても……」

ひなたは横目で俺をちらりと見たあと小声でボソボソと呟いた。

「みーくんはボクを女の子だなんて思っただけから。ボクとみーくんは幼なじみで、親友だから……だから、二股とかそんなことは関係ない……」

ひなたが苦笑いを浮かべながらそう言うと、クラスメイトたちの視線は俺に集中した。『二人の意見は聞いた。お前はどんなんだ』と。その視線は無言の圧力を俺に加えてくる。俺は全力でその場を逃げ出したかった。と、その時、緊迫した空気の教室に気の抜けるような女性の声があった。

「は……い、みなさ……ん。お待ちかねのホームルームの時間ですよ……。席についてくださいね……。おやあ？ 何か問題でもありましたかあ？」

教室内の微妙な雰囲気を感じ取った樟葉先生が、にこやかに俺たちに問う。だが、誰も何も言わない。さっきまで俺に『二股野郎』などと罵声を浴びせていたクラスメイトも、雨音も、そしてひなたも。

「う……ん、誰も何も言ってくれないと、先生ちょっと困っちゃいますね……。どういうことかハッキリするまで……、ホームルーム続けちゃいましょうか……？」

再びクラスメイトたちの視線が俺に突き刺さる。ああ、分かったよ。俺が全て悪いことにしてやる。それでお前たちの気は済むんだろっ？

「先生、俺が風香さんとひなたの二人を二股にかけてるってみんな思ってるんすよ。俺にそのつもりが無くても、そう見えるなら多分俺が悪いんです」

「みーくんはあ、風香さんとひなたんを二股かけてるんですか〜」

俺は思わず声を荒げた。

「そんなわけ無いでしょう！」

樟葉先生は心底安心下というように微笑むと、クラスの生徒たちをゆっくり見まわしながら口を開いた。

「みーくんはとっても優しいから、転校生の風香さんを放っておけないし、幼なじみのひなたんも放っておけない。これって二股ですか〜？ 先生にはそうは思えません〜」

俺に突き刺さる視線の強さがみるみる減っていく。この争いをおつというまに収めてしまうテクニクは、『かほるちゃんマジック』という名で生徒たちの間では呼ばれている。どんなヤンキー同士の争いでもすぐに収まってしまふのだ。

「では！ 帰りのホームルームをはじめましょう〜。号令、おねがいしますね〜」

ホームルームが終わり、クラスメイトたちはそれぞれが所属する部活の活動場所へと向かって散っていく。俺もまたその一人で、体育館のサブアリーナでの中国武術研究会の練習に参加するため、体育館へ移動中だ。昇降口で一度革靴を履き、この学園で一番大きな建物である総合体育館へと向かう。

ひなたは武道館でなぎなた部の練習に参加するため、一足先に教室を出て行った。なんだか、俺の顔を見たくないようなそぶりを見せていたのは気のせいだろうか。

「わたし、中国武術って、本物は初めて見ますっ！ とっても楽し

みですつ！」

「はいはい。そんなに期待してるといざ本物を見たときにがっかりするかもしれないよ？」

「そんなことありません！ きつと格好いいに決まっています！」

「どうしてそう言い切れるのかなあ？」

俺がそう問うと、雨音は蕩けるような笑顔を浮かべた。あ、なんか嫌な予感がする。

「だって……うふふふ……、あんなに立派な筋肉がつくんですもの。それはハードな練習をするにきまっています」

俺は黙ってカバンの中から極厚の英和辞典（カバー付き）を取り出すと、雨音の後頭部を全力で強打した。

「いた　　っ！　はっ！　わたしはどこ？　ここは誰？」

「正氣に戻ったかい？」

カバンに辞書を戻しながら、俺は雨音に問いかける。ちよつと強く殴りすぎたから、心配だったっていうのもある。

「はい！　それはもうバツチリと！　でもなんか後頭部がズキズキするんですが……」

俺が殴りつけた辺りを手でさすりながら、若干涙目になっている雨音。だが、雨音の筋肉フェチが発動したら、きつとりミッターぶつちぎって大変な事になるに違いない。具体的には天変地異レベルの大雨だ。だから、俺の暴力行為も正当化される。きつとそうに違いない。

体育館の昇降口で革靴を脱ぐと、靴を下駄箱に入れて。俺たちは体育館専用のシューズに履き替える。何でも床が傷まないようにするためだそう。まあ、結構金がかかってそうな施設だから、そういう気苦労もあるんだろう、学校としては。

「そういえば、雨音も練習に参加するんでしょ？　体操服は持ってないんじゃないの？」

雨音はその残念なほど扁平な胸を反り返して、ふふんと鼻を鳴らした。

「みーくんは大事なことを忘れています。わたしは雨の精霊ですよ？ そんなの、一瞬ではつと作り出せます！」

でも、中国武術研究会は三分の二が女子部員なんだよな。女子更衣室でそんなことさせるわけにはいかない。見つかったらえらいことだ。

「それならトイレの個室で着替えてきます。ちょっと待ってて下さいね」

そう言い残すと、雨音は更衣室の隣にある女子トイレへと向かった。待つこと一分ほど。ジャージのズボンに半袖の体操服姿の雨音が姿を現した。ご丁寧に胸には『風香』と名前まで入っている。体操服の名前の所が全く盛り上がってないのがとても哀しい。

「やっぱり便利だよな、その『法術』。そういえば、学校に潜り込むのにも『法術』を使ったでしょ」

「あ、ばれちゃいました？ その通りです。必要な書類の偽造と、先生たちの洗脳、それにクラスメイトたちに疑問を持たれないようにちょっと記憶の操作をしました」

「さらつと恐ろしい事を言ってくれてるけど、そんなに『法術』を使っても大丈夫なのか？ 昨日言ってたよね、使いすぎると消滅しちゃうって」

「大丈夫ですよ。このくらいならそんな心配しないで。も少人数に対する暗示くらいなら、目を見つめるだけでもかけられるんですよ？ いざとなったらマナの多くあるところに行つて補充すればいいんですから」

マナの多くあるところ？

それはいったいどんな所なんだろうか。いわゆるパワースポットみたいなところか？

「いえいえ。自然の多くあるところ。この前の森林公園なんかがぴったりです。草木のマナを少しずつ分けてもらつて、元氣百倍ですよ！ 特に森の中にある杉の老木が」

そこまで言つと、雨音はなぜか懐かしそうな目をして微笑んだ。

でも、その微笑みは同時に寂しさを感じさせる哀しい微笑みでもあった。その時、なぜか俺の頭の中に暗い闇のなかに泰然と立つ杉の老木の姿がフラッシュバックした。なんだろう、この違和感は。

「と、とにかく、あの森林公園はマナの補給には最適なんですっ！」

そんなもんなのか。とにかくいざという時には森林公園に連れて行けばいいんだな。でも、杉の老木だつて？ なんだろう、胸の辺りが妙にざわつく。頭の片隅に大きな杉の木の映像がフラッシュバックする。なんだこれ？ なんだこれ？ ぼくはそのフラッシュバックを振り切るように足を速めると、男子更衣室の扉を開こうとした。

「って、なんで雨音まで入ろうとするんだ！」

「え？ え？ ここで練習するんじゃないんですか？」

「ここは男子更衣室だよ！ すぐ着替えるから外で待ってて！」

雨音はそう言われると、入り口の『男子更衣室』のプレートを見て、耳まで真っ赤になって走り去ってしまった。まったく、先が思いやられる。

第二章

精霊は人間の常識を身につけられるか

2 (後書き)

いかがでしたか？ よろしければご意見ご感想などお寄せ下さいませ。

第二章 精霊は人間の常識を身につけられるか

3 (前書き)

本編第二章の3をお送りします。
それではどうぞ！

体育館のサブアリーナは、バスケットコート一面分くらいの小さな空間だ。それでも、部員が一〇名に満たない中国武術研究会の活動場所としては十分すぎる広さだといえるだろう。

俺は入り口からサブアリーナに足を踏み入れる前に一礼する。別にだれにそうしろと習ったわけではないが、練習する場所に感謝する気持ちを表すための、一種の儀礼のようなものだ。雨音もそれに倣って一礼する。

サブアリーナでは、すでに何人かの部員が思い思いにストレッチをしたり、武術書を読んだりしていた。顧問の平賀先生はまだ来ていないようだ。

「よう、みー。その子は？」

早速同学年の男子部員が雨音の存在に気づいた。こいつ、手が早いで有名なんだよな……。

「今日からウチのクラスに転入してきた風香雨音さん。いつとくが手を出すなよ。変なことしようもんなら……」

「うおつ、みーくん怖ええつ！ 分かったよ！ 手は出さないよ。

お嬢さん、この俺が道明寺由隆、みーの親友だ。よろしく！」

「誰が親友だ、誰が！ 雨音、こいつのいうことは話半分に聞いておくようにね」

雨音は小首をかしげて『？』を頭の上に浮かべていたが、やがて合点がいったように手をぼんと打ち。俺に向かってこくこくと頷いてきた。本当にわかってるんだろうか。心配になる。

そうこうしているうちに、顧問の平賀先生がやってきた。平賀先生の専門は太極拳だ。太極拳といっても色々な流派があるが、先生の一番得意にしているのは『陳式太極拳』だ。激しい震脚や発勁が特徴の武術で、はじめて見た人は太極拳だとは思えないかもしれない。

もちろん、陳式太極拳にも慢練まんれんというゆっくりとした練習法もあるが、やっぱり陳式の魅力はその豪快な発勁にあると俺は思う。そういうと平賀先生には「まだまだ若いなあ」と笑われてしまうんだけど。

平賀先生に雨音を紹介し、部員が整列している中に混じる。雨音は平賀先生の横に残したままだ。

「それじゃあ、今日の練習を始めます。今日は見学者がいるから、そのつもりで。風香さん、簡単に自己紹介してください」

平賀先生に促され、雨音が一步前に出る。鈴を鳴らすような雨音の音が、サブアリーナに響いていく。

「きょうからこの学園に転入してきました、風香雨音です。話からないことだらけなので、色々と教えてください。よろしくお願いしますー！」

雨音が深々と頭を下げると、パチパチと一〇人分の拍手がサブアリーナに響き渡った。別に『法術』を使ったわけでもなさそうだが、雨音は部員たちから『仲間』として認められたようだ。

「よし。それじゃあ準備体操から始めようか。風香さんもいっしょに混じって真似してみてください」

「は、はいっ！」

準備運動はごく普通のストレッチや屈伸運動などを組み合わせたものだが、これを見つちりやると結構な汗が出る。準備運動が終わった頃には、雨音はふらふらしていた。

「風香さん、大丈夫？ 辛かったら今日は見るだけでもいいのよ？」

部長の春日野先輩かすがのが雨音に声をかける。だが、雨音は自分の頬をピシヤンとたたいて気合いをいれると、部長の目を見て言い切った。「大丈夫ですっ！ 今日には練習に参加させていただくのが目的ですから、最後まで練習します！」

部長はにやりと笑うと、腰に手を当ててうんうんと頷いてみせた。そして、俺たち部員の方を向いて大声を張り上げた。

「素人さんがこんなに頑張ってるんだから、部員としては当然サボれないわよねえ？ 部員の意地って物をみせてあげなさい！」

部長のスポ根スイッチがONになってしまった。こうなると部長は手がつけれない。練習をサボろうなんて考えただけで、まるで超能力者であるかのようにその考えを読んではしまうのだ。

「さあ！ 武術基本功からはじめるわよ！ あ、風香さんはまずどんなことをするのか、見ながら真似をしてみて。あとでちゃんと教えるから」

まずは蹴りの練習からだ。まっすぐに蹴り上げるもの、横に蹴り上げるもの。斜め前に蹴り上げるもの。外回し蹴り。内回し蹴りなどがある。他にも種類は何種類もあるが、太極拳ではだいたいこの程度と、あと二起脚という飛び二段蹴りを練習する程度だ。

サブアリーナの端から端までをひたすらに足を蹴り上げながら往復するのは、想像以上にキツイ。長いことやってる部員の俺ですらキツイのだから、雨音はどんなに辛いだろう。そう思って雨音の様子を窺ったら、これがなんと、見事に様になったフォームで蹴り技をこなしているではないか。他の部員も驚いた様子で雨音を見ている。

「ほらほら！ 風香さんに見とれてないで自分の練習をする！ しかし驚いたわ。風香さん、あなた何かの武術の経験者？」

「いえ、こういうのは全く初めてなんです」

「ふーむ。飲み込みが早いっていうか、早すぎるわ。平賀先生、どう思います？」

「何力所か注意しただけでこの出来だからね。彼女は武術に向いているのかもしれないな」

俺は基本功を終えて戻ってきた雨音に、周囲に聞こえないくらいの声で囁いた。

「『法術』、使っただろ」

「あはっ、ばれちゃいましたね。みーくんのフォームをコピーするように身体を動かしてみたんです」

そりゃばれるさ。なんの経験もない女の子が、いきなり武術基本功をやらされて、それを完璧にこなしちゃうんだから。

「まあ、他の部員にばれなきゃいいんだけど、程々にしといてよね。あんまり注目されるとやりにくくて仕方ないから」

雨音はすこししゅんとしたあと、俺を上目遣いに見上げてこういつた。

「じゃあ、もうズルはやめます。でも、いきなり下手くそになったら、その方が注目されちゃうんじゃないでしょうか？」

「分かった分かった！ 『適度に』なら『法術』をつかっていいから！」

俺の言葉を聞いた雨音は、あの森林公園で見たヤマユリの花のような笑顔を見せてくれた。参ったな、俺の完敗だ。

練習を終えて、シャワーを浴びて制服に着替えて更衣室を出たらそこにはすでに雨音が真っ白のワンピースにつばの広い帽子を被って待っていてくれた。どうやらまた『法術』を使ったようだ。女子部員たちは雨音と一緒に着替えをしたと思っ込んでいる。

「風香さんってすごいスレンダーなのよねえ。羨ましいわ」

いや、スレンダーなのは確かだが、もう少しお肉がついてもいい所もあるんですよ、部長には分からない苦労かもしれません。かくいう中国武術研究会部長、春日野陽子先輩は、見事なダイナマイトバディの持ち主である。でるところが出てて、引っ込むところが引っ込んでいる。全校の男子生徒の垂涎の的である。

「部長さんこそ、その、胸が……」

記憶操作の時にでも見てしまったのだろうか、それとも制服のブラウスを押し上げる胸のボリュームに圧倒されたのか、雨音は最後まで言葉を紡ぐことが出来なかった。

「ああ、これね……。ウチとしてはもう少し控えめな方が嬉しいん

だけどね。男子のいやらしい視線が絡みついてくるのよ」

「部長さんも大変なんですね……」

なにやら訳の分からない事で意気投合した二人はダイエット法やら豊胸体操やらの情報を交換し始めた。そうか、一応雨音も自分の胸のことは気にしていたんだな。

「みーくん！ 雨音ちゃん！ 一緒に帰ろう！」

体育館の昇降口をみると、長刀袋を持ったひなたが靴を履いているところだった。防具一式も持って帰るから、小柄なひなたとしては相当の大荷物だ。部室に置いておけばいいものをと俺が言うとうひなたは決まっつてこう言うのだ。

「部室に置いておいたつて別に怒られやしないんだけどね。なんて言うのかな、けじめだよ、けじめ」

「ひなたさん！ ひなたさんも部活終わりですかっ？」

「うん。ボクたちの部は着替えに時間がかかるから、ちょっと早めに稽古が終わるんだ。で、着替えて帰り支度をするところの時間、つてわけ」

「そうですか。今日、わたし中国武術の奥義に触れましたっ！」

「そうかそうか。みーくんもうかうかしてると、雨音ちゃんの方が強くなっちゃうかもしれないよ？」

ひなたは何だか妙に明るく振る舞っている。そう、まるでわざと明るく見せようとしているかのように……。そういえば不自然じゃないか。いくら仲良くなつたからって、そこまで雨音に気を遣うなんて、ひなたらしくない。「ボクがみーくんを一生面倒見てあげよ」なんて冗談めかして言うていたひなただぞ？ 突然俺たちの間に現れた雨音に気を遣うなんておかしい。絶対におかしい。

その時俺は電撃にでも打たれたかのように気づいてしまった。雨音はひなたにも『法术』を使っている。そうでなければ、昨日の朝あんなに雨音を激しく罵っていたひなたが、こんなに雨音と仲良くなれるはずがない。

もしかして俺本人も気づかないうちに『法术』の影響を受けてい

たりするのか？ いや、もしそうだとしたら、こんな風に疑問を持つこともないはずだ。それに、雨音は一昨日の夜にウチの屋根をぶち破って登場してから、『法術』を使う事を俺には隠していない。

考えすぎだ。雨音のあの無垢な笑顔を見ても。そんな疑いを持たれてると知ったら、きつと涙の大雨を降らせるに違いない。俺は何となく釈然としないものを感じながらも、その疑問を飲み込んだ。

「ところで、今日は雨音ちゃんがみーくんのお弁当作ってきたですよ。明日はボクがつくってきてもいいかな？」

「この前俺たちをサンドウィッチで殺しかけた上に、いつも俺が起こしに行くギリギリまで大お布団帝国の女帝の座に納まっているひなたが、何を作るって？」

ひなたはぷうつと頬を膨らましジト目で俺を睨み付ける。俺は何も嘘は言っていないぞ？ 違うというのなら証拠を提出してもらおう。ああ、休日だけは何故か早起きだよな、ひなたは。

「ひどい言われようだよ！ 日曜の朝はスーパーヒーロータイムを見るために意地でも起きなきゃいけないって前にも説明したじゃないか！ それに、ボクだってやる気になればお弁当の一つや二つちよちよいのちよいで作れちゃうんだから！お母さんも手伝ってくれるし！」

ちよちよいのちよいの中にどれだけひなたの母さんの腕が含まれるのかは、まあこの際目をつぶっておいてやろう。まあ、ひなたの母さんが手伝うなら、任せてもいいか。

「んじゃ、決まりだね。明日はボク、明後日は雨音ちゃん。交代でみーくんのお弁当作ろう！ そうとなったら早速メニユーを考えなきゃ……」

ひなたは何やらブツブツと口の中で呟きながら思案モードに突入してしまった。俺も冷蔵庫の中の食材が残り少なくなって居ること

を思い出し、買い物に行かなきゃならないなと一人思うのだった。学校帰りにもスーパーはある。だが、ひなたの大荷物を考えれば、一旦帰宅してから買い物に出るしかないだろう。それに、うちの近所のスーパーは深夜まで営業している。慌てることはないさ。

そうこうしているうちに、短い通学路は終わりを告げ、我が家が見えてきた。ひなたは一つ手前の家の門扉に手をかけ、にやりと不敵な笑いを浮かべると、実に愉しそうに俺に向かって口を開いた。「ふふふん。ボクの料理の腕の上達ぶりを、あした存分に味あわせてあげるよ。楽しみにしてるがいい！ ふはははははは！」

何だか悪の帝王が勇者に向かって言うセリフみたいだな、などと思っていると、ひなたはちらりと雨音の方をみやり、控えめにVサインを出していた。雨音も両手でVサインを返している。ほんと、この二人がなぜここまで仲良くなったのか。さっきの嫌な考えが頭をよぎる。

雨音がもし、ひなたに対して『法術』をつかっているとしたら、俺はそれを止めるべきだろうか？ それとも二人の間の潤滑油としてそれを認めるべきだろうか。

二人の仲よさげなそぶりをみていると、俺にはよけいに分からなくなっていた。

自宅に帰ってすぐ階段を上がり、自室で着替えを済ませ、リビングに降りる。雨音はいつもの通りの白いワンピースに白リボンのついたいつば広の帽子を被って俺が降りてくるのを待っていた。買い物に行こうと、俺から誘ったからだ。だが、買い物に行く前に、どうしてもハッキリさせておきたいことがあった。

それは、ひなたにも『法術』を使ったのか否か。俺はそれが悪いことかどうかわからない。でも、偽物の友情に価値があるのか、と聞かれたら、多分俺は「無い」と答えるだろう。

「雨音、雨音はひなたに『法術』を使ったのか？」

最後の方は声がかすれて、震えていた。どうか、俺の想像が外れていますように。どうか、ひなたと雨音の友情が、真正正銘の本物でありますように。しかし、その願いは簡単に打ち砕かれた。

「はい、ひなたさんは最初にわたしの正体を明かした時の反応を見て、好ましからざる人物だと判断して、記憶を少し改ざんさせていただけました」

俺は真つ暗な終わりのないトンネルに放り込まれたような気分になった。雨音のあまりに冷たい物言いが、俺の心に氷の刃のように突き刺さる。それじゃあなにか？ ひなたと仲良くして見せていたのは、嘘っぱちだったってことか？

「そんなことつてあるかよ……」

「みーくんは何か大きな勘違いをしています。わたしが『好ましからざる』人物と判断したのは、わたしがこの場に留まることの障害になる、という意味です。決してひなたさんを嫌いなわけじゃありません。ひなたさんは、多分お友達になれるひとです。でも、わたしが地上にいるのは、みーくんの願い事を叶えるまでの短い間です。それが終われば……」

「それが終われば……みんなの記憶を消して、はいさようなら、つて事がよッ！」

雨音は俯いたまま何も言わない。そんな悲しい話つてあるか？

雨音だけがおぼえていて、他のみんなは忘れちまうんだぞ？ そんな悲しいこと、俺は許さない。そんなことを言うヤツは、例え神様が相手だつて殴りかかってやる。雨音と学校の連中の関係は、雨音の『法術』を介した、言わば偽物の友情だ。でも、そんな友情でもほんの短い間の思い出として、残してくれたっていいじゃないか。

「俺は……忘れないからな。雨音がどんなに記憶を弄ろうが、絶対に思い出してやる」

「みーくんの記憶は弄りませんよ。雨の精霊を受け入れてくれた、広い心のみーくんですから」

そのとき、二人のお腹が同時にぐうつと大きな音を立てた。気ま
ずい沈黙が二人の間に落ち、それはやがてこらえきれない笑いにな
って爆発した。

「はははっ！ ……はあ。とにかく、買い物に行こう。今日は俺特
製の担々麺だ！ 四川人も涙を流して喜ぶ一品だぞ！」

「なんでみーくんは四川料理ばかり得意なんですかつ！ あんま
り辛い物ばかり食べてると馬鹿になっちゃいますよっ！」

そう。偽物の友情でもいい。でも、その記憶だけは消して欲しく
ない。雨音だけがおぼえている俺たちと過ごした日々の記憶なんて
悲しすぎる。

だから、俺は絶対に忘れないと決めたんだ。

第二章

精霊は人間の常識を身につけられるか

3 (後書き)

いかがでしたか？ よろしければご意見ご感想などお寄せくださいませ。

第二章 精霊は人間の常識を身につけられるか

4 (前書き)

第二章の4をお送りします。

それではどうぞ！

翌朝、俺が起きてみると、キッチンではすでに雨音が朝食の支度をしていた。いつもの白いワンピースではなく、学園の制服の上にエプロンをつけてである。雨音は何を着ても似合うな、と思うと同時に、やはりとっても残念な感じに平べったい胸に目がいつてしまふのは仕方のないことだろう。

「あ、おはようございます！ どうです？ 今日からは制服で通学ですよ！」

お玉を手にくるりと廻つてみせる。短いスカートの裾が翻つて、細いけれど柔らかそうな雨音の太腿がギリギリの所まで露わになる。「あー、みーくん、なんかえっちな目でみてましたね？」

「そそそ、そんなことはないぞ？ 気のせいだ気のせい」

「ホントですかあ？ 目が泳いでますよ？ まあいいです。通学力バンも靴も用意しましたから、今日からは普通の女子高生です！」

雨の精霊が普通の女子高生とか言っちゃってるよ。それにしても、なんとも嬉しそうだな。そんなに制服が着たかったのなら、初日から『法術』で作ってしまえばよかったのに。

今日はダイニングテーブルの上には俺の弁当は置いてなかった。その代わり、小さめの弁当の包みが置いてある。これは雨音の弁当だろう。テーブルの上には目玉焼き、野沢菜の巻おにぎり、味噌汁が並んでいた。

野沢菜の巻おにぎりは、見た目は和歌山のめはり寿司みたいな感じで、おにぎりを野沢菜の葉っぱでくるのである。味噌汁はしじみ汁。しじみ独特の風味が出ていて、これだけでご飯が何杯もいけそうだ。目玉焼きは綺麗な半熟。ちよつと醤油をたらしていたたく。

雨音もテーブルの反対側で同じ物を食べている。ただし、全体的に量は少なめだ。

「食物からマナを取り入れることが出来るんです。ただ、効率は

あまりよくないんですけど。この前森林公園に行った時、思いつきりマナの補給をしてきましたから、当分はマナが切れることを心配しないでも大丈夫ですっ！」

「つまり、べつに食事をとらなくてもいいってこと？」

「いえ、やはりこうして受肉して肉体を持つていると、どうしても生理現象は現れますし、当然お腹も空くんです。食べなくても死にはしないんですけど、やっぱりお腹が空いたらご飯を食べるのが一番です！」

精霊が肉体を得て地上に留まるのも、なかなか大変な様子だ。

雨音は先に朝食を食べ終え、俺が食べ終わるのを待ってくれていた。食器を流して水につけておく。帰ってから俺が食器洗いをするのだ。夕食も俺の担当。昨日の担々麺もなかなか好評だった。しかし四川料理ばかりじゃ確かに飽きがくるな。今日は和食にするか。朝食を食べ終え、朝のテレビニュースを何とはなしに見ていると、玄関のチャイムが軽快な音を立てて鳴った。

「きつとひなたさんです！ わたし出てきますね！」

「ふむ。どうやらちゃんと起きられたみたいだな。奇跡は起こる物なんだなあ」

「何を失礼な事を言ってやがりますが、みーくんは」

一人感慨にふけっていると、背後から怒りのオーラをまとったひなたの声が投げかけられた。俺の背中を冷たい物が伝う。壁に耳あり障子にメアリー。敵はいつでも俺の言葉に耳を傾けているか分からないのだ。

「はい、これ。約束のお弁当。言っとくけど、味はお母さんの保証付きだからね。食べてびっくりするがいいさ！」

悪い意味でビツクリだったら困るけど、良い意味でびっくりするのは悪くない。あの殺人料理人のひなたが、人の食べられるものを作れるようになった。俺はとっても嬉しいよ。これでいつ嫁に出しても大丈夫だ。

「あのねえ。ボクはまだ一七歳だよ？ 嫁に出すって、いつたいい

つの時代の話さ」

「結婚自体は一六歳から認められてるぞ？」

「そうじゃなくて！……みーくんはボクが他の人のお嫁さんになつちやっても構わないんだね……」

「え？ なんだって？」

ひなたは何となく寂しそうに顔をうつむけると、唇を尖らせて拗ねた表情をして見せた。時々ひなたが見せる表情だ。いつからかは忘れたが、ひなたは時折この表情をする。何が不満なのかを聞き出そうとしても、ひなたは一切口を割ろうとしなかった。

「そういえば、雨音ちゃん。制服出来たんだね。すごく似合ってるよ！」

「えへへっ。ありがとうございます！」

ひなたに褒められたのが余程嬉しかったのか、雨音はまたその場でくるりと一回転してみせた。またしてもスカートが翻り、いけない部分が視界に入りかける。と、雨音とひなたがジト目で俺をじっと見ているのに気がついた。

「みーくん、やっぱりいやらしい目でわたしをみてましたっ！」

「変態の目だったね、今は。雨音ちゃん、夜はちゃんと部屋に鍵かけて寝た方がいいよ」

ひどい言われようではあるが、確かに今は俺の落ち度だ。多分そうとういやらしい視線を送っていたに違いない。

「さ、さて、そろそろ学校に行くか！」

俺は二人の冷たい視線を背中に受けながら、鞆とスポーツバッグをもって玄関へと向かった。スポーツバッグの中には、ひなた謹製の弁当が入っている。味はおばさんの保証付きだ。ならば問題はないだろう。

「朝練に送れるから、先に行つちまうぞー！」

「ああっ！ まってよっ！ ボクもいくから！」

「わ、わたしも行きますっ！」

しかし、雨音の『法術』の影響はすごいものがあつた。誰も雨音の存在に疑問を差し挟むものはいなかつたし、極々自然に俺たちのコミュニケーションに入り込んで、ごく普通に振る舞っている。だが、どうも雨音には『人間の常識』というものが今ひとつ理解出来ずにいるように思う。

例えばだ。年頃の男と女が同じ中身の弁当を仲良くつついていれば、それは『出来ている』ということの意味していて、『リア充爆發しろ!』という怨嗟の聲がそこから聞こえてくるものである。不思議とひなたと俺が仲良くしていても、そんな噂は立たないのだが、雨音と俺の関係はクラス中の噂になってしまっていた。こういうときにこそ、雨音はその『法術』を解き放つべきだとおもふのだが、どうやら彼女にその気はなさそうだ。

今もクラスの女子生徒から質問攻めに遭っている。どうやって知り合ったのかとか、どこまで行ったのかとか。

「どこまでって言われましたも……。あ、日曜日に森林公園まで行きましたね。とっても綺麗な紫陽花やヤマユリが咲いてましたよ!」「そうじゃなくて! あーもう、風香さんつてもしかして天然系?」「だから、手を握ったとか、キスしたとか、それ以上とか……。そういうことよ」

小首をかしげていた雨音は、キスという単語を聞いたとたん、頭から湯気が出るほど赤くなつて、あたふたと周囲を見まわした。周りでは雨音の返答を楽しみにしている野次馬どもが耳を澄ませている。

「え、ええと、き、キスとかそういうのは全くないです。手もつないでません! そんなのとんでもありません!」

雨音のその答えに、ギャララーたちは一斉に肩を落とした。そして、その怒りの矛先は当然のように俺に向かつてきた。

「ちよっと、みーくん。あなた、雨音ちゃんがこんなに良くしてく

れるのに、手もにぎってないの？」

「あなたがヘタレの甲斐性なしだってことはみんな良く知ってるけど、それにしても、ねえ？」

まるで俺が雨音になにかした方がいいような言い方だな。俺が『雨音……ハアハア……そのぺたんこの胸にキスさせてくれ……ハアハア』とか言うような変態の方がいいってのか、このクラスの女子連中は！

「ね、ひなたもそう思うでしょ？ あんたは幼なじみなんだから、このヘタレ甲斐性なしになんか意見してやらなきゃダメよ」

「ボ、ボクは……、みーくんとは単なる幼なじみだし、ただの友達だし、だから……」

ひなたの声がどんどん小さくなっていく。それに反比例するように、顔が赤らんできた。何でだ？ 今の会話のどこにひなたが赤くなる要素があるっていうんだろう。

「分からないの？ みーくん、ひなたはね、あなたのことがす……」
「やめてよっ……！」

パシンと乾いた音が教室に響き渡る。ひなたが女子生徒のひとりをつっぱたいたのだ。ひなたは肩で息をしながら、真っ赤な顔でその女子生徒を睨み付けている。目には光る物がたまり、やがてそれは目尻から溢れ、頬に伝った。

しばらくその女子生徒を睨め付けていたひなただったが、涙が溢れ、床にぼつぼつと落ちるようになると、教室の後の扉から廊下へ飛び出してしまった。俺があっけにとられていると、「雨音がひなたの後を追おうとして席をたった。俺はなぜだかそれが良くない方向に働くような気がして、雨音を呼び止めてしまった。

「雨音……いまは放っておいてやったほうがいいと思う」

「なんでですかっ！？ ひなたさん、泣いてたんですよっ！」

俺には具体的な理由が説明出来なかった。ただ、ひなたは今一人になりたいのではないか、そう思ったただけだ。その時、頭の中に雨音の音が響いてきた。耳を通してじゃなく、直接頭に響いてくる。

これも雨音の『法術』なのか？

『そうですね。今わたしはみーくんの心に直接話しかけています。声を出さなくても会話が出来ます。なぜ、ひなたさんを一人にした方がいいのか、その理由を聞かせてくださいますか？』

『はつきりした理由は俺にも分からない。ただ、あんなひなたは初めてみた。ひなたも誰にもあんなところを見られたくないはずだ。だから追うなと言ったんだ』

雨音は静かな瞳でじつと俺を見つめてくる。数瞬の時間が、永遠の長さを感じる。雨音はその深い色の瞳で、俺の心の奥底を覗いてくる。しばらく沈黙が続いた後、雨音は静かに自分の席についた。『わかりました。ひなたさんのことは、わたしよりみーくんが良く知っていますはずです。そのみーくんが一人にしておいた方が良くいうのですから、おそらくそうなのでしょう』

『分かってくれて助かる。別にあいつに冷たくしてるわけじゃないんだ。人間なら、ああいうとき一人になりたいと思うこともあるってことさ』

雨音は鞆から数学の教科書とノートを取り出しながら、視線はこちらに向けずに『法術』をつかった会話を続けてきた。

『わたしは基本的に人間とはちがう、雨の精霊です。人間の常識は知識としては持つていても、良く理解できないところもあります。もし、わたしが間違いを犯しそうになったら、また止めていただけますか？』

『わかった。ただ、自分で考えることをやめないで欲しい。人間なら、だれでもまずは自分で考えるものだからね。おっと、先生が来たな』

教室の前から数学の大門先生が姿を現すのと同時に、雨音の『法術』をつかった会話も打ち切られた。ふと左隣の席に視線をやると、雨音が静かに微笑んでいた。それは多分彼女本来の優しさから出てきた笑みなのだと俺は感じた。

ひなたは授業が始まって二〇分ほど経ってから戻ってきた。先生

には「保健室に行っていた」と言っていたが、多分違うんだろう。顔を洗ってきたらしく、涙の後は頬に残っていないかった。だけど、赤い目がどれだけ泣いてきたかを物語っている。本当に俺がひなたを一人にさせてやろうと言ったのは間違いじゃなかったのだろうか？ もしかしたら、俺が追いかけていった方が良かったんじゃないか？ ひなたも、それを待っていたんじゃないのか？ 尽きることのない疑問が頭の中をぐるぐる廻る。

右隣のひなたの席を見る。じっと見ていると、視線に気づいたのかひなたも俺の方を見つめ返してきた。ほんの短い間、視線が絡まる。ひなたの視線には、何かを言いたいのが、それは言っではいけないことだというような色が滲んでいた。それはいったい何なのだろう。

俺はひなたが密かに胸の内に隠している気持ちに、この時まで全く気づいていなかった。

その日、ひなたは体調が悪いと行って部活の稽古を休んだ。風邪で熱があっても稽古に参加する、あの元気印のひなたが、である。当然、部活が終わっても、いつも昇降口で待っていてくれる彼女の姿は無い。

『みーくん！ 帰ろっ！』

いつも大荷物を持って、俺が着替えるまで待っていてくれるひなた。それが帰りの時間にいないというだけで、何故こんなにも寂しい気分になるのだろうか。帰り道なんて、ただか一五分くらいのものなのに。

「みーくん、わたし思うんですが……」

校門から伸びる緩く長い坂道を下りながら、雨音が口を開いた。

「ひなたさんは、みーくんのが好きじゃないでしょうか？」
その一言で、俺は心臓がぎゅっと締め付けられるような気がした。

ひなたはただの幼なじみ。きっとそれはひなたも同じ想いのはずで……。

『やめてよっ！！』

あの女子生徒は、きっとひなたは俺のことを好きだと言おうとしたんだろ。それをひなたは引っぱたいて止めた。ひなたは、それを認めたくなかったのだから。自分が俺を好きだという気持ちに蓋をして、誰にも見せないように隠していたのだから。

「ねえ、みーくん。わたしは雨の精霊ですけど、同時に女の子でもあります。人間の常識がどうのという前に、女の子の気持ちはわたしにも分かるつもりです。だから、いまからひなたさんの家に行きましょう」

「そう言うと思ってたよ。分かった、行こう」

坂道を降りきって。バス道路を市街地へ向かって歩き出す。あと一五分もしないうちに、ひなたの家に着してしまふ。ひなたを前にして、俺はなにを話すべきなんだろう。そして、雨音は何を言うつもりなんだろう。

やがて道は見慣れた住宅街に入っていく、何回か角を曲がったところでひなたの家の屋根が見えてきた。

「いよいよか……。何を話せばいいんだろうな」

「それはわたしに任せてください」

雨音は玄関のインターホンのボタンを押した。

「はい。どちら様ですか？」

ひなたの母親の聞き慣れた声がインターホンのスピーカーから流れてくる。雨音は物怖じすることなく、用件を伝えた。

「わたし、ひなたさんのクラスメイトの風香雨音といます。ひなたさんはいらっしゃいますか？」

「ごめんなさいね。ひなた、まだ帰ってないんですよ。もうすぐ帰ってくると思いますから上がってお待ちになる？」

「はい、ご迷惑でなければ」

「じゃ、ちょっと待っててくださいね」

待つこと一分ほど、玄関の扉が開いてひなたによく似た女性が現れた。ひなたと並んで「姉です」と言われたら、無条件で信じてしまいたいになるほど若い。それでももう三〇代の半ばを過ぎているのだが。しかも、このお母さん、近所でも評判のスーパー主婦なのである。完璧超人と言ってもいい。それについてはそのうち話す機会もあるかもしれないな。

「あら、みーくんもいつしょ？ そちらの……風香さんでしたっけ？ 彼女はもしかして」

「違います！ おばさんが考えてるような関係じゃありませんから！」

「あらあら。ムキになるあたりが怪しいわね。じゃあ、上がってちようだい。散らかってますけど」

おばさんは、俺たちを玄関に招き入れた。廊下を歩き、リビングに通される。ソファーに座ると、おばさんが麦茶の入ったボトルと氷の入ったタンブラーを持ってきてくれた。梅雨の晴れ間というこゝとで、気温も高く湿気もきつい。そんな時にはよく冷えた麦茶が一番だ。

「ありがとうございます。俺、のどカラカラだったんです」

タンブラーに注がれた香ばしい褐色の飲み物を、俺は一気に半分ほど飲んだ。雨音はちびちびと口をつけている。そのとき、玄関の聞く音とともに、ひなたが帰りを告げる声が聞こえた。

「たっただいまー。うーじめじめするし暑いし最悪〜。あれ？ だれがお客さん？」

俺は今この瞬間にもこの場から全力で逃げ出したいと思った。だいたい、何を話せばいいのかが分からない。雨音は自信ありげに任せるといったけど、その自信はいつたいどこからやって来るのかと問いたい気分だ。

「おかえりなさい、ひなたさん。わたし、あなたにお話があつて待たせてもらいました」

「……なに？ 別に雨音ちゃんとボクが話し合うようなことはなか

「つたはずだけど」

「みーくんへの気持ちのことです。わたし、どうしてもあなたがみーくんを『ただの幼なじみ』として見てるとは思えないんです。ひなたさん、あなたはみーくんのが好きなんですか？」

ひなたは両の手を白くなるほど固く握りしめて、口を一文字に結び、下を向いてしまった。顔は耳まで赤く染まり、まるで今日の教室での出来事の再現のようだ。これでひなたが雨音を引っぱれば完全再現といったところか。

「そうだよ……ボクはみーくんが好き。どうしようもないほど好きでも、好きになっちゃいけないの。だから自分のことを「私」って呼ぶのもやめて、『ボク』って言うようになって、服も男の子みたいな服ばかり着るようになって……、そしたらみーくんが前よりずっと付き合いやすいって言ってくれて……。だからボクは自分の事を女の子だと思ふのをやめたんだ。小学二年のあのときから」

俺は思い出していた。ひなたは以前は髪を長く伸ばし、女の子らしい服を好んで着ていた。一人称も『私』だった。自分をまるで男の子のように扱いだしたのは、そう、あの時だ。小学校の二年生の時、ひなたとばかり遊んでいた俺は、クラスの男子から『女とばっかあそんで』と馬鹿にされたのだ。

『みーくんはいつもひなたんとばっか遊んで、さいきん《おとこのゆうじょう》を大事にしてないよな！ みんなもそう思うだろ？

おんなどばっか遊んでるヤツは仲間なんかじゃないよな！』

幼かった俺は、ひなたを突き放すことしか出来なかった。そして数日後、ひなたは長かった髪をバツサリと切り、服もボーイッシュな物ばかりを着るようになった。単純だった俺は、これで男子ともひなたとも一緒に遊べると喜んだものだ。

ひなたの両目から熱い滴がぼたぼたと落ちて、絨毯に染みを作る。雨音は黙って立ち上がり、そっとひなたを抱きしめた。

「大丈夫ですよ、ひなたさん。あなたは男の子じゃないし、みーくんだってあなたを男の子だなんて思ってません」

「……本当？」

「本当です。ただ、ひなたさんとの距離が近すぎて、みーくんはとう接していいのか分からないだけです」

華奢な雨音の右手が、そっとひなたの髪を撫でる。何度も、何度も。

「でも、今更ボクは自分の事『私』なんて呼べないよお……」

「それも大丈夫。別に急に変わる必要はないんです。ゆっくり時間をかけて、少しずつ変わっていけばいいんです。みーくんとの関係もそうです。焦らないで、ゆっくり変えていけばいいんです」

ひなたは雨音の肩に頭を預け、静かに涙を流し続けた。俺は雨音とひなたの、その神聖な儀式を、黙って見守ることしか出来なかった。やがて、ひなたが雨音の肩から頭を離れた。それに応ずるように、雨音の両手もするりとひなたを放していた。涙の跡がくつきり残るひなたの頬。だが、何かを吹っ切ったように、その瞳は明るい光を宿していた。

「雨音ちゃん、ありがとう。それと、みーくん。ボクみたいながさつ子でも、今まで通りそばにいていいのかな」

俺の答えは決まっていた。そんなの一つしかないじゃないか。

「ひなたは俺の大事な幼なじみだ。今はそこまでしか言えないけど……。もしかしたらこの先違う関係になるかもしれないしな。だから、今まで通り一緒に下らないこととして笑ってようよ」

ひなたはその日初めて日だまりのような笑顔を俺に見せてくれた。

第二章

精霊は人間の常識を身につけられるか

4 (後書き)

いかがでしたか？
もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。
い。

幕間劇

**T
w
e
l
v
e

Y
e
a
r
s

A
g
o
:
:
:**

(前書き)

幕間劇です。十二年前のある梅雨のお話です。

わたしがみーくんのおうちにお世話になるようになって、今日で三日目。地上での生活にもすっかり慣れました。クラオカミさまに『地上研修を命ずる』って言われた時は、ホントにわたしなんかに勤まるものなのかとドキドキしちゃいましたけど。

今日もわたしはみーくんの朝ご飯を作ります。お弁当は今日はひなたさんが作る番。とつても元気な、お名前の通りのあつたかい女の子です。でも酷いんですよ？ 会うなりわたしのことを『デンパ女』なんて言うんですから。たしかに超常現象の一つや二つは起こしますけど、『電波女』はないと思います。それじゃあ、まるでわたしが電子レンジみたいじゃないですか。

学校に行くのもやっぱりドキドキします。どんな人たちが集まっているのか、空の上からは仲間に入れてもらいたくても入れませんでしたから。二階で目覚まし時計が鳴ってます。みーくんがお目覚めのようです。お、おはようのキスとか、そんなのは全然ありませんから！ 本当ですからねっ！

大体、わたしがみーくんのおうちにいるのは、そんな男女の同棲とかそういうんじゃないかって、わたしの上司のクラオカミさまの命令によるもので、れっきとした『研修』という名のお仕事なんですか
ら！

でもまあ、みーくんはわたしが初めて地上におりた十二年よりずっと遅しく、男らしくなっていました。みーくんはわたしが偶然みーくんの家に落ちてきたと思っていたるようですが、ちょっと違うんです。

わたしが最初に地上に来たのはちょうど十二年前の、やっぱり梅雨の季節でした。

その日、まだ幼かったわたしは、『法術』の使い方を誤って、地上に落ちてしまったんです。そこは、とある男の子のおうちのお庭でした。時刻はまもなく日も暮れようという黄昏時。彼とわたしはその時に初めて出会ったのです。当の男の子本人はすっかり忘れ去つてゐるみたいですけどね。いいんです。『法術』でわたしとの思い出は消えていますはずですし、そんなことしなくても、どうせわたしは存在感薄いですから。印象にも残らなかつたでしょう。

「おまえ、どこの子？」

「……お空のうえ」

「……何言つてんの？」

そのとき、男の子に頼んだことが「木の多いところに連れて行って欲しい」ということでした。そう、マナがあれば空に帰れるからです。でも男の子は「お山とかは子供だけで行ったら怒られるんだぞ」と行ってなかなか首を縦に振ってくれません。わたしはピーピー泣いて、雨をざんざん降らせながら連れて行つてと連呼しました。「分かつた！ 分かつたから！ 連れて行ってやるから、ちよつと待つてる！」

男の子は補助輪つきの自転車を引つ張り出すと、わたしに一言「後ろに乗れ」と言つて自転車にまたがりました。わたしは自転車なんて初めてだったけど、足を揃えてなんとか横座りで乗つたんです。でも、その男の子は「そんなんじゃ落つこちる。もつとしがみつけないです。わたし、男の子にしがみつくなんて初めてで、どうしていいか分からなくて、そしたら男の子は「お腹のところまで手を回して、そう、それで自分の手を持って」と教えてくれました。そしたらどうでしょう！ ぐらぐらしてた身体が男の子の身体とびつたり合わさつて、自転車が走り出しても振り落とされることなく乗れているじゃありませんか！

私はほとんど後に流れていく街の景色に見とれていました。あんまり見とれすぎていて、自分が泣いていたこともすっかり忘れてし

まっつて……。ふと空をみると夕焼けが西の空を真っ赤に染めていました。東の空は群青にまっつていて中間は綺麗なグラデーションを描いています。

森林公園までの坂は自転車じゃ上がれないということで、歩いて上ることになりました。男の子はわたしの手を握ってずんずん歩いて行きます。心細かったさっきまでの自分が嘘のように、偶然出会った不器用だけど優しい男の子に手を引かれて、わたしはいつの間にか笑顔になっている自分に気づきました。

男の子も「疲れてないか」とか「お水飲みたくないか」とかわたしを気遣ってくれました。そして、時々見せてくれる笑顔に、わたしの心臓はドキドキしっぱなしでした。

やがて、鉄の柵が周りを囲んだ、大きな森林公園が見えてきました。でも、もう閉園時間を過ぎていて、人は入れません。そしたら男の子は「こつちに抜け道があるんだ」と言いながらゲートよりさらに山の方へと歩いて行きました。そこにはフェンスが壊されて、人が一人ちようと通れるくらいの穴が空いていました。

「僕たちがやったんじゃないぞ。中学生のお兄さんたちがやったんだ」

「中学生になったら、こんな事をしてもいいの？」

「そんなことあるわけ無いだろ！ 悪いことだよ！」

わたしはそれを聞いてとって怖くなりました。わたしは悪いことをしようとしている。悪い子になっちゃう。したらクラオカミさまに怒られちゃう！ わたしは怖くて怖くてまた泣き出してしまいました。さっきまで晴れていた夕焼け空が、あっという間に雲に覆われて、ぼつり、ぼつりと雨粒が落ちてきました。

「木の多いところに行きたいんだろ？ もうこの時間じゃあ、ここからじゃないと入れないんだ。泣いてないでついて来い！」

わたしは泣きながらフェンスの穴をくぐりました。せつかくの真っ白なワンピースが、土で真っ黒です。その事実もわたしの涙に拍車をかけました。わたしが流す涙の量に比例して、空から落ちてく

る雨粒の量も増えていきます。

「くそつ、雨が……。足下滑るから気をつける！」

ぐすぐすと鼻をすすりながら涙を流すわたしを励ますように、男の子の右手がわたしの右手をしつかりと握ってくれています。その暖かさは、わたしのこころに勇気の光を灯してくれました。男の子はポケットを探ると、小さな懐中電灯を取り出して明かりをつけました。辺りはすでに夜の闇に包まれようとしています。

「大丈夫。ここは何度も歩いたことがあるから、ちゃんと戻ってこれるから」

わたしは「もどるのはあなただけでいい」と言いたかったのに、口に出して言えませんでした。

幼い脚には過酷な山道をどのくらい歩いたでしょうか。わたしには一本の木が見えてきました。立派な杉の老木で、あたりにマナを放出するその様子が、まるで空から眺めたクリスマスツリーの電飾のようでした。わたしがその木をじつと見ていると、どうやらその杉の木がわたしの求めている木だと気づいたのでしよう。男の子はまっすぐその杉の木の方向へ進路を変えてくれました。

「あの木に用があるんだろ？」

「うん……」

杉の根元まで来ると、わたしは切れていたマナを木から分けてもらう『法術』を発動させました。空中のマナも光を放ちながら、わたしの周囲で渦を巻いています。ああ、こんなところを見られたらわたしはきつとお化けだと思われてしまう。この男の子に嫌われてしまう。そう思うと、また涙が出そうになってきました。

でも『法術』の最中に心を乱すことは出来ません。もし失敗したら、場合によっては街一つくらい簡単に地上から消してしまえるほどのマナが集まっているのですから。そうなったら、この男の子も

無事では済まないはずです。だから、暴走だけはさせられない。わたしは必死に集中しようと思いました。その時です。男の子の叫び声が聞こえてきました。

「……すつ、すつげえええええ！　なんだこれ！　なんだこれ！　……これ、お前がやってるのか？　お前、魔法使いだな！　すつげえ！　僕、魔法使いと一緒に森に入って冒険してる！」

わたしの心配を余所に、男の子は舞い踊るマナの奔流を見て大興奮していました。わたしは少しの間ぼかんとしてしまいましたが、思い直して『法術』に集中しました。もうすぐ終わる。そしたらお空に帰れる。この男の子にも嫌われなかった。なんだか、わたしにとっては帰れることよりも、そっちの法が大事なような気もしていました。

やがてマナはソフトボール大の光り輝く球になりました。わたしは服の上からそれを身体に取り込みます。杉の木さんが力を貸してくれたので、暴れ回るような乱暴なマナはほとんど混じっていませんでした。

「ありがとうございます、杉の木さん」

木は無言でわたしたちを見下ろしています。でも、わたしには何となく杉の木もわたしたちにあいさつをしてくれている、そんな風に思えました。

『はやくおうちへお帰り』

そんな杉の木の声が、わたしには聞こえたような木がしました。

「終わったのか？」

わたしは黙ってこくりと頷きました。夜の闇は先ほどより濃くなっています。わたしだけならここから空に帰れる。でも、この男の子にはそんな『力』はない。わたしはまた涙が目の縁にたまってくるのを感じました。

「大丈夫だ！　この山道は何度も歩いてる。それにほら！」

男の子は懐中電灯でなにか丸いものを照らしていました。

それは小さな方位磁石でした。

「これがあるから、方向は分かる！ とにかく森を一回抜けよう！」
わたしは頷きました。この子が帰れるところまでではついていこう。
せつかくわたしをここまで案内してくれたのに、このままわたしだけがお空に帰るわけにはいかない。だから、もう少しだけ。もう少しだけ許してください、クラオカミさま。

山道から人の整備した遊歩道にでるのに、方位磁石は大活躍してくれました。

「よし！ 遊歩道に出られた！ この方向にまっすぐに行けば絶対に展望広場に出られるはずなんだ。そこからさっきのフェンスの穴のあるところまでは遊歩道沿いに歩いて行ける。もうすぐ帰れるぞ！」

男の子は眩しい笑顔でわたしを励ましてくれます。きつと、雨に濡れて寒くて、自分だって心細いはずなのに。真つ暗で怖いはずなのに。

「さあ、行こう！ でも、帰る前にちよつと寄り道しようぜ！」

「え？ え？ 寄り道って……？」

「展望広場だよ！ この森林公園、夕方には閉まっちゃうだろう？ だから、夜に一回来たかったんだ！ きつと街を見下ろしたら綺麗だぞ！」

男の子は右手を差しだしてきました。わたしは少し迷いながら、その暖かい手を握りかえました。ドキドキするのに、何故か安心する。この男の子がいてくれたら、わたしはもつと勇気が出せる。そんなことを確信させてくれる暖かさでした。

「じゃあ、行くぞ！」

わたしたちはすっかり暗くなった森林公園の遊歩道を走りまわりましたが、空には月が、地上には街の明かりがあつて、森の中よりはずつと遊歩道の上は明るかったです。男の子が手を引いてくれます。わたしもきゅつとその手を握りかえます。悪いことをしてるはずなのに、何故か笑顔になつてしまします。こういうのを『むじゅん』って言うんだぞ』とあとになつて男の子は得意げに教えてくれます。

た。どんな物にも穴を開ける矛と、絶対に穴が空かない盾を売って商人のお話だそうです。

「悪い子になってしまつのに笑顔になつちゃうなんて、おまえ『むじゅん』してるぞ?」

「うん。わたし、『むじゅん』してる!」

遊歩道の坂道が終わる頃、眼下には街の明かりが広がっていました。

「さあ! これが僕たちの街だぞ!」

「っ! すごい……!」

家々の灯や、車のヘッドライトやテールライト、街灯やネオンが渾然一体となつて、まるで一つの宝石箱のように見えました。街の向こうは港です。泊まっている船の電飾が宝石箱の縁取りのようにきらびやかでした。わたしは思わず息をするのも忘れて、その眺めに見入っていました。空の上からの眺めとそんなに変わらないはずなのに、なんでこんなに輝いてみえるのか。わたしにはその理由が分かりませんでした。

手すりが高すぎて視界を遮るので、わたしたちはベンチに靴のまま上がりました。どんどん悪い子になっていっちゃいます。それなのに、なぜこんなにも楽しくて、安心するんでしょう。その時、男の子が展望広場にある時計を気にしているのに気がつきました。時刻は七時五〇分。おうちの人もきつと心配しています。わたしはそれまでの高揚感がすうっと消えていくのを感じていました。

「そろそろ、帰ろうか」

「うん……」

「そ、そういや、まだ名前聞いてなかったな」

「え……?」

「名前だよ、名前」

「あまね……」

「あまね? ヘンな名前だなあ」

「そんなことないもん! あなたのお名前は?」

「えっ……、俺の名前は……」

男の子が何故か戸惑いの表情を浮かべます。どうしたんでしょう、人にはあれほど気軽に名前を聞いたくせに、自分の名前はわからないのでしょうか？

「……みーくん。みんなそう呼ぶ」

男の子は何故か顔を赤くしてそう呟くように教えてくれました。みーくん……。とっても可愛らしい名前。

「今お前、可愛い名前だとか思っただろ！」

「うん……ダメだった？」

「ダメに決まってる。男につけるあだ名じゃない」

みーくんはぶすつとしてベンチに座ってしまいました。わたしはどうしてみーくんが急に不機嫌になったのか、不思議でした。それと同時に、わたしが不機嫌にさせてしまったのではないかと思って胸がきゅつと苦しくなりました。わたしが下を向いて胸を押さえていると、みーくんが心配げに覗き込んで来ます。その顔にはさつきまでの不機嫌さは少しもなくて、わたしのことを純粋に心配してくれているんだと分かりました。

「どうした？ 気持ち悪いか？」

「ううん、そうじゃないの」

「じゃあ、何か怖いのか？」

怖い。そう、怖いんです。これから一人で空に帰って、もう二度とみーくんに逢うこともないと思うと、それだけで涙がにじんで来ます。でも帰らなければなりません。そのためにみーくんに頼んであの杉の木のところまで案内してもらったのですから。

「ううん。大丈夫。何も怖くないよ」

わたしは、嘘をつきました。本当はもっと一緒にいたいのに、もっと微笑みかけて欲しいのに、ずっと手を握っていてほしいのに。

「時間、遅くなっちゃった。わたしも帰らなきゃ」

「そうだな。さすがにお仕置きされるな、これは」

みーくんがおどけた調子で同意してくれず。きつとわたしを心

配させないためでしょう。

「なあ、またこの森林公園で遊ぼうぜ。今度は他の友達も一緒に連れてきて」

「それは……」

「あ、もしかしてあまねちゃん、友達いないのか？」

わたしは唇をきゅっと噛みしめると、コクリと頷きました。何故か涙が出そうになってきました。今まで空の上で独り過ごしていたときには、こんなに寂しいなんて感じたこともなかったのに……。涙が出そうになると、ぽつり、ぽつりとまた雨が降り始めました。

「それじゃあさ、僕と、僕のもとだちのひなたちゃんとあまねちゃん、で遊びに来よう！ 約束だ！」

「約束……？」

「うん、約束！ 指切りしよう！」

みーくんはわたしの右手をとるとその小指に自分の小指を絡めて来ました。

「ゆーびきーりげーんまーん、うーそつーいたーらはーりせーんぼーんのーますつ！ ゆーびきつた！」

小指と小指がするりと離れ、約束は成立しました。わたしはいつか、みーくんと、そのお友達のひなたという人と、この森林公園で遊ぶのです。それがいつになるかはわたしには分かりません。でも、約束は破ってはいけないと、クラオカミさまも仰っていました。だから、必ず守らなければいけません。それがいつになっても、です。

「約束だぞ！ いつか、必ず！」

「うん……わかった！」

「そして、その時には僕があまねちゃんの友達になってあげる！ ひなたちゃんもきつとなつてくれる！ これも約束だ！」

わたしに友達が出来る……？ みーくんの言葉で、きょうはいたい何度勇気づけられたでしょう。わたしは泣きそうになっていた顔をあげて、目の縁にたまっていた涙を指で拭きました。もういかなくは。

「じゃあ、わたし、帰るね。……みーくん、ありがとう。さようなら！」

わたしは展望広場に隣接した芝生広場の方へ歩いて行きました。天が開けていて、飛ぶのには都合がよかったからです。

「おい。そっちフェンスの穴とは反対方向だぞ！」

わたしは記憶を消す『法術』を発動しました。まだ不慣れなので詠唱に時間がかかります。

「あまねちゃ」

何とか間に合いました。みーくんはわたしの肩に触れる直前に、その場に崩れるように倒れ込みました。下は芝生です。怪我の心配はないでしょう。

「今日は本当にありがとう。さよなら、みーくん。……またね」

わたしはみーくんの左頬に軽くちよんと唇をつけました。さあ、空に帰りましょう。約束の果たせるその日まで

「おはよう、雨音」

「あ、おはようございます！ どうです？ 今日からは制服で通学ですよ！」

仁正学園の女子夏服は、短いチェックのスカートとブラウスにリボントイ。ふふっ、ちよつとみーくんをからかってみようかなあ。

よし、くるりと一回転！ スカートの生地が軽いものなので、一回転すると遠心力でふわりと広がります。あ、見てる見てる。彼の視線をふとももの辺りに感じますよ？

「あー、みーくん、なんかえっちな目でみてましたね？」

「そそそ、そんなことはないぞ？ 気のせいだ気のせい」

ほんと、みーくんは分かりやすい男の子です。絶対わたしの生脚に目が行ってたのに、苦し紛れに言い訳するあたりが可愛いです。

「ホントですかあ？ 目が泳いでますよ？ まあいいです。通学力

バンも靴も用意しましたから、今日からは普通の女子高生です！」
そう、みーくんが願い事を決めるまでの短い間だけ、わたしは『普通の女子高生』を演じるんです。彼が最後に何を願うのか、わたしには分かりません。でも、何を願おうとも、みーくんはみーくんです。きっと、優しさに満ちた願い事をしてくれるに違いありません。

わたしはみーくんの朝食をダイニングテーブルに運びながら、その願い事がわたしにとっても叶え甲斐のあるものでありますようにと、心の中で呟くのでした。

幕間劇

Twelve Years Ago . . .

(後書き)

いかがでしたか？ もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さいませ。

第三章

それぞれの矛盾

1 (前書き)

第三章の1をお送りします

人間は誰でも矛盾を抱えて生きてます。それは精霊も同じのようです。

それではどうぞ！

雨音がひなたの本当の気持ちを俺に聞かせてくれてから、もう二日経った。今日は金曜日、土曜は休みなので今日一日を乗り切れば楽しい休日だ。

あとで聞いた話なのだが、あの時雨音は『法術』を使っていたんだそう。ひなたの心が頑なで、このままでは心が壊れてしまいかねないから。雨音はそう言っていた。きっとそれは本当の事なのだろう。

「わたしたち精霊には、人の心が形になって見えるんです。ひなたさんの心は、傷つき、ひび割れていました。あのまま放置していたら、きつとそう遠くない将来、ひなたさんは壊れてしまったでしょう。そうなってからでは遅いから、わたしは『法術』を使いました。……これは間違っていたでしょうか？」

雨音の問いに俺はどう答えたものか迷っていた。確かに雨音のやったことは、『法術』でひなたの本心を聞き出す、という点では反則なのかもしれない。でも、反則だとしてもそれが許される場合もあるのではないかと俺は思うようになっていた。

たとえどんなに正しい事だとしても、それが大事な人を傷つけることになるなら、俺は反則を犯してでもそれを防ぎたい。雨音もきつと同じなのだ。だって、雨音にとってもひなたは特別な存在になりつつあるのだから。

午後の教室には、先生の単調な英語の構文の説明と、板書をノートに書き写すカリカリという鉛筆の走る音だけが響いていた。今日は久々にまとまった雨が降っている。雨音曰く「ずっと晴れだと、植物が弱ってしまいます」とのことだ。平静な状態でも雨を降らせることが出来たのかと、俺は考えてみればごく当たり前のことに感心してしまった。

雨音は雨の精霊だ。雨を司り、地上に潤いをもたらす。ちよっぴ

りドジで、常識に欠けるところがあつて、でも誰よりも優しい。そんな雨の精霊が、俺の元にやってきてもう六日だ。その間、俺は大それたことを忘れていた。そう、最後の願い事だ。

あまりに普通の日常が続いたため、すっかり何故雨音がここに留まっているのかを忘れていたのだ。

『もう、本当にわすれてたんですか？　しかたないですね。でも、これからはちゃんと考えてくださいね』

今朝の朝食のとき、雨音が「願い事は決まりましたか？」と聞いてきたので、ついつうっかり本当の事を口走ってしまったのだ。適当に誤魔化しておけばよかつたものを。

右隣の席では、いつも通りのひなたがノートを取っていた。いや、いつも通りというのはちょっと違う気がする。言われなければ気づかないほどだが、うっすらと化粧をしているのだ、あのひなたが。化粧と言つてもリップグロス程度だが、正直最初見たときはそりゃビックリした。なんだか、ひなたが別人のように見えて、まともに目を合わせることも出来なかつた。

口調はいつもの通りだったが、少しだけ言葉の端々に女の子ぽさが滲むようになったのは、きつと雨音のおかげなだろう。クラスの子連中も「ひなたんカワイー！　どうしちゃつたの？」だの「男だな、男ができたんだな？」だのとはやし立てていた。でも、そんな騒ぎを困つた顔をしながらも素直に受け止めてしまっているあたり、ひなたの内面の変化は相当大きいようだ。

やがて退屈だつた授業も終わり、待ちに待つた部活の時間がやってきた。毎日退屈な授業を受けているのも、この時間の為だと言つてもいい。最初に中国武術研究会に入ったときは、楽をしたくて入つたのに、なんて退屈でキツイ練習をする部活なんだと後悔したものだ、いまとなつてはそれもいい思い出だ。

ちなみに、雨音は正式に入部の手続きをして、中国武術研究会の部員として練習に参加している。相変わらず『法術』を使ったチートをやつてるようだが、まあ害はないからいいか。入念にストレッ

手をして、練習に備える。怪我の防止にもなるし、身体にもいい。この辺で手を抜かないのが俺の流儀だ。

壁についているストレッチ用のバーに足を引っかけ、片足ずつ正面と側面を伸ばしていく。少しずつ身体感覚が研ぎ澄まされていくのが分かる。自分の身体との対話が、中国武術のもっとも大切な秘訣の一つだと、顧問の平賀先生も言っていた。今ならその意味がよく分かるような気がする。

雨音はもともと身体が柔らかい。というより、女の子にありがちな筋力不足による関節の可動範囲の広さなただけで、前後開脚とかを苦もなくやってるのを見ると、俺も女の子に生まれてたら良かったかもしれないなど思ってしまう。もっとも、筋力と柔軟性を両立するのは男女問わず至難の業なのだが。それほど、中国武術では柔軟性が大切なのだ。

ストレッチを終える頃に顧問の平賀先生が姿を見せた。

「今日はちよつと遅くなつたけど、みんなストレッチは終わってるかな？ よし。それじゃあ一回套路（うたい）を通そう」

套路とはいわゆる型のことだ。様々な技を組み合わせて作られていて、それを繰り返し練習することで、太極拳の基本原則を身体に叩き込むという目的がある。套路を通すというのは、型を最初から最後まで通して練習する、ということだ。ちなみに、俺たちのやってる陳式太極拳には、いわゆる太極拳の『一路』と、激しい発勁が連続する『二路』の二種類がある。『二路』は別名『炮捶（ほうすい）』とも呼ばれている。

全員が一定の間隔をとって整列する。起式（最初の動作）、金剛（こんごう）搗碓（とすたい）……。もう動作を身体が覚えていて。全身の関節が、筋肉が、頭のとっぺんから足の爪先、手の指先に至るまで、連動して動いている。意識通りに身体が動く。これも太極拳で大切な事の一つだ。最初から最後まで通すのに約一二分。収式を終える。汗は噴き出しただけ、呼吸の乱れはない。うん。いまのは自分でいうのもなんだけど、いい太極拳だったと思う。

全員で一路を通した後は、部員がそれぞれ自主的に練習する。俺はさつきも言った『二路』を重点的に練習している。最近になってようやく二路の面白さが分かってきた気がするのだ。力任せにバンバン打つのではなく、緩んだ状態から瞬間的に力を出すことの難しさが、逆に楽しさに繋がっている。

それが分かってきたのと同じ時期に、平賀先生に初めて自分の太極拳を褒められたのだ。自分のやっтерることが間違いないことが認められた気がして、その日はニヤニヤ笑いが止まらなかった。ひなたにも「みーくんキモイ」などと言われてしまったけど問題ない。

両音はといえば、部長の春日野先輩がつきつきりで指導している。陳式太極拳の看板技である『金剛搗碓』を何度も何度も繰り返して練習しているのだ。俺もはじめたときはそうだったな、などとちょっと懐かしい想いに浸ってみたりもする。とにかく太極拳の練習と静止し続ける練習『站椿功』たんとくこうなどもあるが、これは套路をしつかりと練ることで代用が利く。

最初は平賀先生に「一日に二〇回金剛搗碓を練習しなさい」と言われてたけど、俺は一日百回やっていた。他の技も同じで、言われた回数の最低三倍はこなしていた。そのおかげか、普通は一年くらいかかる一路の習得が僅か半年で終わって、二路も一年生の終わりまでには覚えてしまって、独りでも練習できるようになっていた。

もちろん、ただ覚えればそれでいいというわけじゃない。覚えたところがスタートラインで、一生かけて練り上げていくのが太極拳だ。俺の太極拳なんて、昔の名人に比べたらそれこそガチヨウの踊りみたいに見えるに違いない。

俺は二路の技を一つ一つ取り出して、何度も繰り返す単式練習たんしきれんしゅうに没頭していった。

「……くん、みーくん。練習終わりですよ？」

繰り返し単式練習をしていた俺の耳に、鈴の音のような少女の声が届く。もうそんな時間か。一時間半ほどぶっ通して単式練習をしたことになる。練習用のカンフーパーツと長袖のＴシャツは、汗に濡れてぐしょぐしょだ。絞ればきつと汗がじゃーっと出てくるに違いない。

「雨音はどこまで覚えた？」

気を落ち着かせるために大きく深呼吸しながら收式の動作をする。九回ほど繰り返し返したところで、俺は軽く整理体操をはじめた。

「まだ最初の予備式と金剛搗碓だけです。でも難しいです。……」
『法術』をなるべく使わないようにしてるので

「ん？ なんでまた」

「だって、あれは人間にとっては一種のずるじゃないですか。だから、なるべく使わずに練習してみてるんです。その方が楽しいです」

壁際に置いてあったスポーツタオルで汗まみれだった顔を拭く。窓の外はまだ雨が降っていた。とりあえず、シャワーを浴びて、着替えてこよう。

「んじゃ、雨音も着替えておいでよ。着替えが終わったら昇降口の所で待ち合わせ。ひなたも来るだろうからね」

「わかりましたっ！ 着替えもちやんと手作業ですよ？」

「分かった分かった。人間はそれが当たり前なんだから、自慢しないの」

雨音はちょっとふくれた顔をして見せたが、次の瞬間にはぱつと花が開くような笑顔を見せて更衣室の方へと向かっていった。サブアリーナの入り口では、女子部員たちが雨音を待っている。

「それじゃみーくん、またあとで！」

大げさにてをぶんぶん振って、雨音は女子部員たちと一緒に更衣室へと歩み去った。さて、今日もいい汗かいた。俺はタオルと陳式

太極拳のテキスト本を持つと、男子更衣室へと向かった。更衣室にはコインロッカーとシャワー室が併設されている。コインロッカーとはいつても、鍵を開けると百円玉が戻ってくるので実際は無料だ。この更衣室はサブアリーナ専用なので、他の部の部員はいない。

うちの学園は中高一貫の進学校なのだが、スポーツ、特に武道系のクラブ活動に力を入れている。学校の校訓にも「文武両道」の文字があるほどだ。クラブだけではなく、授業でも何かの武道を選択して、中等部から高等部までの六年間みっちりとしごかれる。全員が初段以上を取れるほどの実力をつけてしまうのだ。ちなみに俺は授業でも太極拳を選択している。

汗だくになつたTシャツとカンフーパンツ、それに下着を脱ぎ、ビニールの袋に放り込む。これは帰ったら即洗濯だ。放っておくとこの季節、カビが生えてえらいことになる。

シャワーは有り難いことにちゃんとお湯が出る。この辺は私立の学校だからだろうか。公立の高校に行った友達に聞いたら「シャワーなんて水しか出ないよ」という返事が返ってきた。まあ、普通はそんなもんなのだろうな。この学園が恵まれすぎてるってことだ。

本当は使うのを禁止されてるボディソープを身体に塗りたくり、さつと洗い流す。シャンプーもしたいところだけど、お湯を頭からかぶって洗い流して我慢する。あとは持ってきていたバスタオルで身体を拭いて、着替えるだけだ。

「あれ？ 換えの下着……忘れてきた？」

着替えようとして、スポーツバッグを漁るが、肝心のパンツが見あたらない。さっきまで穿いていたパンツは残念ながら汗でぐしょぐしょで、とてもじゃないが着用に耐えない。

「しかたない。ここはノーパンで行くしかあるまいな」

下着なしで制服のスラックスを穿く。なんだか股間が妙に頼りなく感じるのは気のせいではないだろう。普段意識しないパンツ様の偉大さを心の底から感じる俺であった。ほんと、パンツって大事なんだな。

万が一にもフアスナーが開いていたりしないように、念入りに身支度を確認する。よし、これならまあ家に帰り着くまでは凌げるだろう。俺は通学靴とスポーツバッグをロッカーから取り出すと、更衣室を後にした。

体育館の昇降口では、すでに着替えを終えた雨音と、長刀袋に防具一式という大荷物を持ったひなたが数人の女子生徒と談笑していた。まずひなたが、続いて雨音が俺に気づき、手を振ってくる。

「おっそーい！ みーくんがこんなに遅いのはなにか怪しい。きつとボクらには言えない秘密があるにちがいないね！」

ギクウツ。ひなた、お前はエスパーか。エスパーなのか！ なぜ俺の心を読めた！ などとは口が裂けても言えない。言っただが最後に卒業した後も『ノーパンマン』だのなんだの不名誉な渾名で呼ばれることになるに決まってる。俺は何となくすーすーする股間を気にしつつも、下駄箱から自分の革靴を取り出して足を突っ込んだ。

「さ、帰ろう！ 今日はかなり汗かいたから、帰ったら即風呂だな」「ふーむ、なんか怪しいんだよねえ。もしかして、換えのパンツ忘れてノーパンとか！」

嫌な汗が噴き出てくる。なんでそうクリティカルな所で正解を連発するんだ、ひなた！

「あっはっは！ まっさかそんな訳ないだろう！ どこの間抜けだよ、パンツ忘れるなんて」

すいません、ここの間抜けです。もうそれ以上突っ込まないでください、ひなたさん。

「そうよねえ！ そんな間抜けいるわけないよねえ！ あっはっは」「あっはっは！」

「ところで、みーくんパンツ穿いてないでしょ」

「何故分かった！ ハッ！」

しまった

！！ なぜこんな単

純な誘導尋問に引っかけたんだ、俺は！ これで俺は『ノーパンマン』確定だあああっ！ 女子部員たちが俺をみてヒソヒソと何

か囁きあっている。雨音は……苦笑いを浮かべながらこつちを見ている。

（くそっ！ この窮地を乗り切るには……雨音の『法術』に頼るしかないッ）

俺は必死に雨音に目配せした。だが、雨音は小首をかしげて頭の上に『？』を浮かべている。ええい！ ひなたの気持ちには気づいてるのに、俺のこの救いを求めるサインには気付きもしないのかあッ！ だが、神は、いや精霊は俺を見放さなかった。

『みーくん、もしかしてわたしに助けを求めています？』

『ようやく気づいてくれたか！ 頼む、ノーパンマン扱いは嫌だあああッ！』

『でも、これが最後の願いでいいんですか？』

『うっ！ そ、それは困るかもしれない。うっうっ……』

『冗談です。ここはわたしの判断でおたすけすることにします。ほかでもない、みーくんのピンチですから。その代わり、あとで一つだけお願いを聞いてもらいますね』

雨音の音が頭の中で響いた瞬間、周囲の音が消え去った。見まわせば、ひなたを初めとした女子生徒たちが固まったように動きを止めている。

「わたしの『法術』で時間を止めています。これから暗示をかけて、その……パンツのことはみなさんの記憶から消してしまいます。今保有してるマナの量だと、時間を止めていられるのは主観時間で三分というところです。その間に家に戻って、パンツを持ってきて下さい」

「わかった！ 恩に着るよ！ じゃあ、行ってくる！」

俺は不安定な股間をすこしかばいながら、それでも全速力で家に向かった。歩いて一五分の道だ。走れば半分で済む。静まりかえった街のなかを、俺の足音だけが響いていく。バスが、車が、電車が、人が、時を止められて微動だにしない。やがて道は住宅街へと入っていく、見慣れた交差点をいくつか曲がると、俺の家が見えてきた。

時間には余裕があるはずだ。玄関の鍵を開け、靴を乱暴に脱ぎ捨てると、俺は二階の自分の部屋に飛び込んだ。タンスを開くと目的の偉大なる下着、トランクスを取り出した。スラックスを脱ぎ捨て、トランクスを装着！ 不安定だった股間のモノがびたりと安定する。すぐにスラックスをはき直し、階段を駆け下りる。革靴に乱暴に足をつまみ込むと、玄関の扉を全力で開く。念のために鍵はしっかりとかけて、開きっぱなしになっていた門扉をダッシュで駆け抜ける。帰りの道も、ダッシュダッシュ！ 時間を止めるのにどのくらいのマナとやらが必要なのかしらないけれど、遅れたらもしかすると雨音が消滅してしまうかもしれない。そう思うだけで脚に加わる力が増していく。陳式太極拳で鍛えた脚力が、遺憾なく発揮されている。

最後は校門まで続く長くて緩い上り坂だ。これを登り切れば体育館の昇降口まではほんのちよつとだ！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！

雨音！ もういいぞっ！」

「っ！」

昇降口に飛び込むと同時に、雨音が言葉の旋律を紡ぎ出す。雨音の言葉が終わると、雨音の身体が白い光を纏い、光はどんどん大きくふくれあがっていった。俺は手で目を覆い、顔を逸らせて事が終わるのを待った。

「みーくん、終わりましたよ」

雨音の声が目元で聞こえた。恐る恐る目を開けると、そこにはいつも通りの時間の流れが戻っていた。ひなたは中国武術研究会の女子部員となにやら談笑していて、さっきまで人をノーパンマンに貶めようとしていた様子は微塵も感じられない。

雨音はというと、額に汗の粒を浮かばせながらも、柔らかな笑みを浮かべて俺を見上げていた。やはり時間を止めるなどという大技は、相当の負担だったのだろう。

「ありがとう、雨音。おかげでノーパンマン扱いされずに済んだよ」

「いえいえ。いいんです。これはわたしがよかれと思ってやったことですから。それに、今回の件はちゃんと交換条件がありますしね」
そうだった。何か一つ、雨音の願いを聞かなければいけないんだ。それが俺に出来ることなのか、それともとんでもない無理難題なのか。これは大問題だぞ？

「じゃあ、お願いを言いますね」

雨音はごく短い願いを俺に伝えた。

「というわけです。よろしくお願いしますね、みーくん」

「みーくん、まだですかあ？」

「もう少しだよ。今大事な作業中なんだ、もう少し待ってて！」

無事家に帰り着いた俺は、雨音のたつての願いで現在キッチンに立っている。よし、豆板醤の香りが立つてきた。ここでスープを投入だ！

「待ちきれませんっ！ はやくっ！ はやくっ！」

雨音の願い事、それは四川式本格麻婆豆腐を作ってくれとのことだった。どうも前に食べたときに癖になっただけ。あれほど「赤い悪魔」だのなんだのと文句を言ってくれたくせに、今は早く作れと催促してくる。なんか釈然としないものを感じながらも、俺は麻婆豆腐作りに没頭する。あらかじめ茹でておいたサイコロ切りの豆腐を投入、しばらく煮たら水溶き片栗粉でとろみをつけ、ひと混ぜして完成！

「出来たぞー！　すぐテーブルに持っていくから、大人しく座ってて！」

「麻婆　麻婆　辛くて痺れて天国の気分」

何だか調子っぱずれな歌を歌いながらダイニングテーブルにつく雨音。俺は皿に真っ赤な麻婆豆腐を盛ると、最後の仕上げの花椒を振りかけた。豆板醤の香りと花椒の香りが鼻腔をくすぐり、思わず

口の中につばが湧いてくる。

「しかし、あんなに『辛いモノばかり食べると馬鹿になる』とか言ってたのに、いったいどういう風の吹き回し？」

「唐辛子の摂りすぎはあまり健康にいいとは言えませんが、今日は特別です。大量にマナを消費する『法術』の使い方をしましたから」

「マナと麻婆豆腐とどう関係があるの？」

「唐辛子は、体内のマナを活性化させる作用があるんです。マナを感じられない人でも、唐辛子を食べると汗が出てくるでしょう？」

それにより、みーくんの麻婆は特別ですから」

「特別ねえ……。四川料理以外にもレパートリーがあることはこの前の鯖の味噌煮で証明したと思うんだけど」

雨音はちりれんげで麻婆豆腐を掬うと、ふーふーと少し冷ましてから口に入れた。

「ん〜辛くて痺れてたまりません！！三日に一度は麻婆にしましょう！」

なんだか雨音がとんでもないことを言いだした。豆板醤とか花椒とか、普通のスーパーじゃなかなかいい物がない食材は、ちよつと離れた街の中華街の食料品店で買っている。電車で三〇分くらいだから大したことは無いんだけど……。

「そうなんですかつ？ 中華街、行ってみたいです！」

とりあえず、今日の借りは麻婆豆腐でチャラになった。願い事にもカウントされていないし、まだゆっくり考えることが出来る。それにしても、時間まで操れるというのは考えてみればとんでもない『法術』なんじゃないか？ うーん、やっぱり最後の願いはあの『法術』をもらうつてのは……いや、それはないな。俺にそんな大それた力があつたとしても、きつとろくな事にならない。それに使い損なったら消滅してしまう。そんな『法術』を操れる雨音は、さすが雨の精霊だ。

最後の願い、何にしよう。そろそろ本気で考えないといけない時

期に来てるような気がして、俺は一人決意を固めるのだった。

第三章

それぞれの矛盾

1 (後書き)

いかがでしたか？　もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さいませ。

第三章

それぞれの矛盾

2 (前書き)

第三章の2をお送りします。
それではどうぞ！

最後の願い事。

口に出しても三秒もかからない言葉。でも、俺にとつての「最後の願い事」というのは、凄まじく決めるのが難しい懸案事項なのだ。まるで難解な数学の文章題のようで、「最後の願い」と書いてあるのは分かるけれど、その解法がまるで想像出来ないのだ。

俺はなんとというか、大それた夢はない。大金持ちになりたいとか、大きな権力を持ちたいとか、そんな欲望は強くない。今のそこそこの生活にも満足しているし、母がいないことも、父が仕事で海外暮らしなこと、大して負担に感じていない。

そんな俺が「なんでも願い事を三つだけ叶えてあげる」という雨の精霊に出会ってしまったのだ。最初の二つの願いはあっさりと決まった。雨音が登場するときにはぶち破った屋根の修理が一つ。もう一つは雨音の名前を聞くこと。そんなことでいいのか？ と雨音に訝しまれたが、その時の俺は何故か雨音の名前を知っておきたかったのだ。そして残ったのが最後の一つ。これを決めない限り、雨音は地上に留まり続けることになる。

今日は土曜日。学校は休みだ。現在午前七時。なんで学校もないのにこんな時間に起きてるかって？ 雨音がいつも通りの時間に起きて、朝食の支度をして、俺を起こしに来たからだ。昨夜はちよつと遅くまでネット動画を見てたから、本当はもう少し寝ていたかったんだけど。あ、ネット動画っていったってエロいやつじゃないぞ？ 古い太極拳の動画を探してたんだ。昔の名人の動画とか、ちよつと前なら秘蔵の資料映像だったようなのが、今ではネットで気軽に見られる。いい時代になったもんだ。

「はい、今日はお弁当もないですし、トーストとスクランブルエッグとサラダにしてみました。お口に合うといいんですが」

雨音の料理の腕はもう確認済みだ。毎朝の朝食と、二日に一回の

弁当。どれも口に合わなかったためしがない。試しにスクランブルエッグを一口食べてみる。ほら、塩胡椒が絶妙にきいていて、それでいて卵の甘さを引き立てている。濃厚な卵を味わったあとは、生野菜のサラダだ。綺麗に切られたトマトとレタス、キュウリ、それに缶詰のツナ。ドレッシングはどうも雨音の手作りらしい。卵のまったりとした後味をさっぱりとした酸味のドレッシングが洗い流してくれる。

「いかがですか？」

「うん、美味しいよ。たまにはトーストもいいよね」

コーヒーがインスタントなのはまあ仕方ないだろう。コーヒーマーカーはあるんだけど、豆を切らしてインスタントしか無かったのだ。これは俺の落ち度といえなくもない。

「コーヒーもレギュラーならもつと美味しかったと思うんですけど……ごめんなさい。わたし、気がつかなくて買うの忘れてました」

「いや、それは俺が悪いんだよ。豆切らしてるのは知ってたのに買わなかったんだから」

そう言いながら雨音の顔を見る。何だか少し顔色が良くない気がする。風邪か？ いや、精霊でも風邪って引くのか？

「雨音、もしかして体調わるい？」

「えっ？ そんなことありませんけど」

「そうかなあ。いつもより顔色が良くないんだけど」

気のせいならそれでいい。でももし本当に具合が悪いんだとしたら、雨の精霊である雨音を人間の病院に連れて行くことに意味はあるんだろうか？ そんなことを考えていると、雨音がすこし考えるそぶりを見せながら口を開いた。

「もしかしたら、昨日の『法術』の使いすぎが原因かもしれません。時間的にはまだ余裕があったんですが、なにしろ止めていた時間が全地球規模でしたから、マナの消費も大変なものでした」

やっぱり昨日のアレか。マナの補給には自然が多いところがいいと雨音は言っていた。森林公園にでも連れて行こうか。歩いて三

○分程度だし、それでマナが補給出来るとしたらそう遠い距離じゃない。

「ねえ、雨音。調子がわるいなら森林公園にいかないか？ あそこならマナの補給も出来るんだろう？」

「そうですね。それじゃああとで行きましょう。ひなたさんも誘いますか？」

「そうだな。でも雨が降ってるしなあ。ひなたは傘さしてまで森林公園に行きたがるとは思えないけど」

雨音はきよとんとした様子で俺の顔を見ていたが、次の瞬間ぷつと吹き出した。

「ふふふつ。みーくん、わたしが誰か忘れていませんか？」

「え？ ああ、そうか。雨音がいるんなら雨の心配はしなくてもいいんだっけ」

「そうだ、雨音は雨の精霊。雨を降らせるのも止ませるのも、自由自在なのだった。こんなことを忘れてるなんて、ほんとどうかしてる。

「でも、もう少し山の木々に雨をあげたいので、出かけるのは午後で構いませんか？」

「うん。それでいいよ。ひなたには俺が電話しておくね」

二人揃って朝食を食べ終えたのはそれから数分後だった。

「ごちそうさまでした」

「お粗末様でした」

さて、食器洗いは俺の役目だ。ひなたへの電話は皿洗いが済んでからでいいだろう。

俺は腕まくりをすると、テーブルの上の食器とキッチンのフライパンやボウルなどを片付けはじめた。

「ってわけ。んで、午後から雨音をつれて森林公園に行こうと

思っただけど、ひなたも一緒にどうかな」

『んー、ごめん。ボク、午後から先約があるんだ。部活の後輩に稽古つけてくれっていわれてて……。悪いけど、雨音ちゃんと二人で行ってきて』

ひなたに電話をしたのは午前九時をすこし廻ったところだった。俺はてつきり二つ返事ですべてくるとばかり思っていたので、すこしばかり拍子抜けしてしまった。

「そっか。先約があるんなら仕方ないな。そっちも楽しんで来て」

『うん、ありがとう。ごめんね、せっかく誘ってくれたのに』

「気にすんな。ひなたとはいつでも遊びにいけるんだし」

『そうだね。じゃあ、また今度』

「ああ、また今度な」

通話終了ボタンを押す。回線が切れ、短い会話は終わった。俺はそのままりビングに降り、テレビを見ていた雨音にひなたが来られないことを告げた。

「そうですか。残念ですけど、先約があるんじゃないや仕方ありませんね」

「うん。あいつ、あれでもなぎなた部でも指折りの選手なんだよ。」

後輩の面倒見もいいし、次期部長になって話もあるらしい」

「そうなんですかつ！　すごいじゃないですか！」

確かにすごい話なのだ。うちの学園の武道系クラブの中でも、全国レベルでの実績を一番上げているのがなぎなた部なのだ。次が剣道部で、その次が柔道部、中国武術研究会は、全日本大会に出場した回数はまだ僅か二回だ。ちなみに俺も地区予選で上位に入ったので、全日本への切符を手に入れている。

話がちよつと脱線したけれど、そんな実力校の部長に推されるということは、実力もさることながら、人格も当然優れているということだ。ひなたは俺にとって自慢の幼なじみ、といったところなのである。

「ひなたさんが来ると思って、お弁当のご飯多めに炊いちゃいました。どうしましょう……」

雨音が湯気を上げる炊飯器を横目に溜息をつく。

「それなら、余ったご飯は茶碗一杯分に分けてラップに包んで、冷凍しておけばいいよ。ちよつと食べたい時なんか電子レンジでチンすればいいんだ」

それを聞いた雨音は大げさに感嘆の溜息をつき、すごいすごいと俺を誉めそやした。いや、現代日本人ならだれでもやってるようなことなんで、そんなに褒められても困るんだけど……。

「じゃあ、余ったご飯は冷凍しておきますね」

炊飯器がご飯が炊けたことを知らせる電子音を鳴らす。俺の隣に腰掛けていた雨音は、いつもの白いワンピースの上に野暮ったいエプロンを着け、昼食の弁当を作りはじめた。

「ふう。せつかくみーくんが誘ってくれたつてのに、市立体育館で後輩に稽古つけなきゃいけないなんて、ボクなんか悪いことした？」

おまけに雨音ちゃんと二人でどうぞつて、いくら仲がいいからつて敵に塩を送つてどうするんだよ。ボクのバカバカバカ！ ベッドの上で切れた電話を持った手をブンブン振り回して自分の不幸と愚行を呪う。

「大体、雨音ちゃんつてデンパ系じゃない……あれ？ ボクいま何を……？ あれ？」

何かおかしい。何かが引つかかる。ちよつど魚の小骨がのどに引つかかつて、取れた後もいつまでも引つかかった感触がのこつているような、そんな不快感。雨音ちゃんとは前の日曜日に初めて会つた。初めて会つた時に何か言つていたような気がする。

……そうだみーくんの願ひ事を叶えるとか……そんな話だつたはず。でも肝心なところがぼやけて思い出せない。天音ちゃんは自分が何者だと名乗つたんだっけ？

なんだこれ、なんだこれ、なんだこれ。こんな大事なことを思い

出せないなんて、ボクはどうかしている。すごく気分がわるい。
「とにかく、思い出せないなら思い出す必要がないことなんだよ。
うん、きつとそうだ」

ボクは開いたままになっていたケータイを畳むと、それを机の上
に置いて一階のダイニングに向かった。濃いコーヒーでも飲んで目
を覚まそう。きつとまだ脳みそが睡眠を欲してるんだ。だからつま
らないことが思い出せないくらいでこんなにイライラするんだ。

きつとそうに決まっている。

午前中降り続いていた雨は、午後になってからつと晴れ上がった。
俺は雨音と一緒に家を出ると、前の日曜日に俺と雨音とひなたの三
人で訪れた森林公園へと向かった。雨音の体調があまり良くない様
子なので、三〇分に一本ある森林公園行きの市バスに乗ることにす
る。バスは案の定がらで、乗客はお年寄りが数人だけだった。
「このバスって、空気を運ぶために運行されてるなんて揶揄されて
るんだよね」

「そうなんですか？ でも、お年寄りの大事な足になってるみたい
ですけど」

「そうなんだけどね。ラッシュ時以外の乗客はほとんど居ないんだ。
まあ、空いてて助かるけどね」

俺は車窓から外の景色を楽しげに見ている雨音の横顔を見つめて
いた。やはり明るく振る舞ってはいるけれど、なんとというか顔色が
すぐれないというか、初めて雨音に会った人なら見落としてしまう
程度に調子が悪そうなのである。

雨音の体調不良は、まず間違いなくマナとやらの不足が原因だ。
俺が昨日『時間を止める』なんて無茶なことをさせてしまったから、
恐らく大量のマナを消費してしまったのだろう。夕食にリクエスト

した激辛麻婆豆腐も、唐辛子の成分が体内のマナの働きを活性化させるとかそんな理由だった。

「みーくん、どうかしましたか？」

俺が雨音の横顔をじっと見つめていたからだろう、雨音が車窓の景色から目を離して俺の瞳を覗き込んできた。深い色の瞳が、俺の心の内側まで覗き込んでくるようで、俺は正直この目をするときの雨音が少し怖かった。知られたくない自分の醜い姿や、自分の反吐のするような思いまで見られてしまうのではないかという、一種の被害妄想だ。それは思い込みだろうとは分かっている。でも、どうしてもこの澄んだ深い色の瞳から目を逸らす事が出来ないのだ。

「い、いや、やっぱり少し顔色が良くないなと思って」

「そうですか？ わたし自身はそんなに体調は悪く感じないんですけど……」

「うーん、なんて言うのかな、普段より肌につやがないっていうか、徹夜でもしたって感じ？ それに近いかも」

「そうですか……なんか肌が荒れてるっていわれるのってショックです」

「いや、雨音は綺麗なんだ。いつもはすごく綺麗なんだよ？ それこそお人形さんかどこかのお姫様かっていうくらい。そのくらい雨音は綺麗なんだ。調子悪そうにしてたって、そこのモデルなんかよりずっと綺麗だ！」

あ、勢いでついもの凄く恥ずかしい事を口走ってしまった。やはり、耳が熱い。多分いま俺はゆでだこみたいに真っ赤になってる。汗まで出てきた。くそっ、いくら本当に思ってることだからって、やっぱり口に出していいことと悪いことがある。

「あ、あの……綺麗って言うて下さるのはすごく嬉しいんです。でも……」

「でも？」

「周りを見て下さい……」

雨音はそれだけ言うと、真っ赤になって下を向いてしまった。

周囲を見ると、いつの間にか乗ってきていた乗客たちの生暖かい視線が、俺たちに集中していた。お年寄りだけじゃない。なぎなた袋を持った中学生くらいの子の集団もいる。全部聞かれてた！？ いまの恥ずかしい言葉を全部！？ 俺は今すぐ窓を開けて走行中のバスから飛び降りたい気分には駆られた。いつそ死んだ方がこの生暖かい視線の攻撃を受けるよりは楽だろう。

「すっごいよねー、確かに綺麗な人だけど、自分の彼女を人前でキレキレイって連発できるあたり尊敬するわ」

女子中学生たちの囁き声が聞こえてくる。いや、誤解だから！この綺麗な人は決して俺の彼女なんかじゃなくて、それどころか人間でもなくて、雨の精霊さんだから！ だからそうやって生暖かく見守るのはやめて……。

結局、女子中学生たちは途中の市立体育館前の停留所で降りたが、ほとんどの乗客はバスが終点、つまり森林公園に着くまで降りなかった。俺はこの羞恥プレイに終点まで耐えなければならなかった。なんだか新しくて危ない快感に目覚めそうになったのは、きつと気のせいだと思いたい。

ボクは約束の一〇分前に市立体育館前のバス停に着いていた。うちから歩いてもせいぜい一五分。バス代に使うくらいならどうせ奢らなきゃならなくなるお茶代にでも取っておくほうが、資産の有効活用っていうものだろう。しかし遅い。一本前のバスはもうとっくに出ている。このバス停には三路線のバスが走ってるから、そんなに待つことはないだろうけど。

ようやく待ち人が来たのはそれから数分後、森林公園前行きのバスに乗って現れた。人数は五人。全員がうちの学園の中等部の生徒だ。

「ひなたん先輩！ 今日にはよろしくお願いします！」

中坊に「ひなたん」呼ばわりされる次期部長候補って、ちょっと情けなくない？ でもまあボクは心が広いからね。ちょっとやそつとじゃ怒ったりはしないのだ。にこやかに五人の中坊……じゃなかった、後輩たちに声をかける。

「こちらこそ、よろしくね。中等部の部長からは聞いてるわよ、期待の成長株だって」

「そんなこと無いです！ 全然大したことないです！」

「まあ、手を合わせてみれば分かるからね。ボクも手加減はしないよ？ それじゃ、いこうか」

中等部のなぎなた部員五名はキヤイキヤイはしゃぎながらボクの後をついてきた。どうもバスの中でなにか事件があったらしい。

「さっきの人、やっぱすごかったよね。女の子もすごく綺麗だったし」

「男の人の方も結構イケてたと思うよ、私」

「何々？ なにがあつたの？ ボクにも聞かせてよ」

ボクだってオンナノコなのである。中学生ほど幼いはしゃぎ方はしないけれど、こうまであからさまに目の前ではしゃがれると、その理由を聞きたくならない訳がない。

「いやあ、それが、ねえ……」

「来るときのバスに乗り合わせたカップルがいて、その男の人の方が突然女の子に向かって『綺麗だ』を連発したんですよ。それも大声で」

ボクはそれを聞いて嫌な予感がした。あのバスは森林公園行きだ。そして、時間的にも『あの二人』が乗っけていてもおかしくない。でもまさか、そんな偶然あるわけがない。

「でもすごい綺麗な人だったんですよ。白のワンピースにつばの広い帽子がぶつて。どこかの清楚なお嬢様みたいな雰囲気でした」

それを聞いた瞬間、ボクの足下の地面が崩れ落ちたような気がした。そんな特徴のある人、雨音ちゃん以外に思い浮かばない。そして、その雨音ちゃんに『綺麗だ』を連呼していた男の子っていうの

は……。

「ひなたん先輩？ 大丈夫ですか？ 何だか顔色が悪いですよ？」
「ええ？ あ、あつはつは。いや、そんな恥ずかしい男がいるんだ
なつて思つたら、なんか気分悪くなつちゃつて。でも平気だよ。ボ
クは結構丈夫にできてるから！」

声が裏返りそうになる。声が震えそうになる。でも二人で行けと
いったのはボク。だから、二人に何があつてもボクは二人を責めら
れない。悪いのは、あの時後輩の指導を取つて、二人についていく
という選択肢を取らなかつたボク。でも、ついていつても、もしか
したら邪魔なだけだつたかもしれない。

ボクは後輩たちを引き連れて、個人利用券の発券機の方へと歩き
出した。稽古して、嫌な想いを吹っ切ろう。へとへとになるまで稽
古したら、きつと今朝のあの嫌な想いも綺麗にぬぐい去れる。そう
に決まっている。

第三章

それぞれの矛盾

2 (後書き)

いかがでしたか？ よろしければご意見ご感想などお寄せ下さいませ。

第三章

それぞれの矛盾

3 (前書き)

第三章の3をお送りします。
それではどつぞ！

地獄のような20分は永遠の長さに感じた。ようやくバスは終点の森林公園前に到着したのだ。やっとこの地獄の責め苦から解放される。ある意味、口汚くなじられたり責め続けられたりするより、生暖かく見守られるほうがよほど苦しいということ、俺は痛感していた。

いや、恥ずかしい想いをしたのは俺だけじゃない。むしろ雨音の方が余程注目されていた。ただでさえ人目を惹く外見をしているところにあの『綺麗』攻撃である。どんなに無関心な乗客でも、いったい何事かと様子をみたことだろう。

「うつつ、わたし、あんなに恥ずかしい想いしたの、生まれて初めてですっ……………」

「う、ごめんなさい」

「え？ い、いえ。わたし怒ってるわけじゃないんです。綺麗って言ってくれたのはすごく嬉しかったし、それに言ってくれたのが、みーくんだし……………」

「え？ ごめん、最後の方聞き取れなかった」

俺が聞き返すと、雨音は顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「いいんです、聞こえなくて」

「でも、気になる」

「気にしないでいいんですっ!!」

下を向いたまま声の限りに叫ぶ雨音。これじゃあまるで俺が彼女をいじめているように見えなくもない。こうまで言うんだからまあ聞かない方がいいんだらうけど、やっぱり気になるよなあ。どうして教えてくれないんだらう。

「とにかく、入場券買ってくるからちょっと待っててね」

「は、はい。待ってますっ!!」

そんなことで一々きっちり返事しなくていいのに、などと思いな

がら、俺はゲート横にある券売所に歩いて行つた。

「高校生二枚」

「おや？ きみ、この前は三人で来てたわよね？ もう一人の彼女は？」

「彼女じゃありませんから！ もう一人は今日は先約があるそうです」

俺の答えを聞いた券売所のおばさんは面白そうにくすくすと笑うと、「ハイハイみんな分かってますよ」とでも言いたげに、にんまりと満面の笑顔を浮かべながらチケットを二枚手渡してくれた。

「はいチケット。そっちの彼女にも振られないように気をつけなさいよ！」

「だから、彼女じゃないですってば！」

俺はひつたくるようになしておばさんから二枚のチケットを受け取つた。おばさんはアクリルの板の向こうで、生暖かい笑顔を浮かべながら俺と雨音を見比べている。

「どうせ『女の子に比べて男の子の方は貧相ね』とか思ってるんだろ。まったく、これだからおばさんって人種は……」

「どうしたんですか？ なにか怒鳴ってましたけど……」

「いや、券売所のおばさんがこの前三人で来た事を覚えててさ。もう一人の彼女はどうしたの？ だって。だから彼女じゃないっていうのに……」

俺はチケットの一枚を雨音に手渡すと、まだブツブツと怨嗟の呟きを漏らしながら入場ゲートへと向かつた。雨音は半歩うしろを日傘をさしてついてくる。そりゃ、こんな超絶美少女が彼女だったらどんなにいいかとは思ふ。胸はかなり残念な状態だけど。でも相手は人間じゃない。雨の精霊ときたもんだ。

「雨音がただの人間の女の子だったらな……」

「え？ わたしがどうかしましたか？」

「なんでもない。独り言だよ」

ゲートでチケットを初老の男性係員に渡す。手慣れた様子で半券

を返してくれる。こちらの係員はさっきの券売所のおばさんと違って実に紳士的な態度だった。ロマンスグレーの髪に彫りの深い顔立ち、そして接客態度。どれを取ってもパーフェクトだ。俺も歳を重ねたらあんな風になりたいと、半ば本気で見とれてしまった。

その思いは雨音も同じだったようで、チケットの半券を受け取るときに、ほんのちよつと指先が触れただけで頬を赤らめていた。む、これは何となく面白くないな。前言撤回。若い女の子に色目を使うような年寄りにはなりたくない！

「素敵な係員さんでしたね」

「まあ、ダンディなのは認めるけどさ……」

そんな会話を交わしながら、遊歩道を歩く。紫陽花の花がこここで咲き誇っている。午前中の雨に濡れて、滴が陽の光を反射して煌めいている。まるで花の周りに小さなダイヤモンドが鑲められているかのように。雨音が紫陽花に駆け寄る。それだけのことなのに、紫陽花の花がより美しく、輝いて見えるのが不思議でならない。

「確かに綺麗なんだよな……雨音がいるだけで、周囲が華やい見えるくらいに」

もう認めるしかないだろう。バスの中で叫んだことは本心だ。雨音は、綺麗だ。綺麗なんて言葉が陳腐に思えるくらいに綺麗なんだ。ひなたも時々はつとするくらい可愛いと思う瞬間はあった。けど、相手はあのひなただ。俺は彼女を女の子扱いしないことで一緒にいることを選んでしまった。それが間違いだったと気づいた時には、お互いに成長し、その分頑なになってもいた。でも、やっぱりひなたは俺にとっては特別な存在なのだ。

認めよう。俺は、雨音に惹かれている。

それと同時に、ひなたにも惹かれてる。

矛盾だらけだけど、これが俺の本心なんだ。

ボクは後輩五人を立て続けに何度も相手にして、息が上がってきた。だけど、まだダメだ。この程度じゃ、あの嫌な思いは洗い流せない。もっと汗をかけ。もっと強く相手を打ち据える。もっと稽古に没頭しろ！

「ひなたん先輩、ちよつと休憩しましょう。先輩さつきからずっと動きっぱなしじゃないですか！」

「ボクは大丈夫。それより次はだれ？」

「大丈夫じゃないですよ！　せめて水分だけでも摂って下さい！　このままじゃ。ひなたん先輩が熱中症になっちゃう！」

全く大げさなんだから。この程度の稽古で音を上げるようなヤワな鍛え方はしていない。それよりボクの五分の一しか動いてないはずの後輩たちの方が息を切らせて苦しそうじゃないか。この程度でボクに稽古をつけて欲しいなんて言ってきたの？　なにそれ、ボクを馬鹿にしてるの

「稽古、続けるよ。次、来なさい」

「は、はい！　お願いしますっ！」

「どこでも好きに打ち込んで。ボクがどう受けてどう反撃するかを、しっかり観察して」

ボクはまだまだ動ける。この程度で動けなくなったりしない。ああ、でもこの一巡で少しだけ休憩を取らせよう。ボクにじゃない。後輩たちにだ。後輩の打ち込んでくる動作が、まるでスローモーションのように見える。そんな緩慢な打ち込みでボクから一本取るうだなんて。

ボクはすつと足を引いて脛打ちを躲すと、後輩の面を渾身の力で打った。たぶん防具の上からでも相当痛いはずだ。いまの一本は会心の一撃に近かった。でももつとだ。もつと打たないと、もつと稽古に没頭しないと、あの嫌な考えがボクをおかしくしてしまう。

「　　っ！　　まだまだ！　　もう一本お願いしますっ！」

この子はなかなか根性がある。ボクの面打ちをまともに食らって

ちゃんと立っていられるんだから。なるほど、これは成長株なのかもしれない。なら、上には上がいることを教えてあげなくちゃね。

今度は面打ちか、下段に構えていたからガラ空きにみえたんだろうけど、それはちょっと甘いんじゃないかな。ボクは下段に構えたなぎなたで後輩のなぎなたをこすり上げるようにして躲し、もう一撃面打ちを見舞った。今度も手応えはばっちりだ。下手したら脳震盪起こしかねない強打だったはず。

案の定、その後輩はその場に膝と両手について動けなくなってしまう。うーん、根性はまあまあ。でもまだこれからだね。ボクより強い人なんて、全国にいたら掃いて捨てるほどいるよ。

「防具外して休んでなさい。次、だれ？」

「は、はい！ 私です！ お願いしますッ！」

もう何巡しただろう。ボクの嫌な考えはいつの間にか頭の中から消えていた。ほら、やっぱり稽古に没頭したらおかしな考えなんて洗い流せるじゃないか。そろそろボクも水分を摂ろうかな。いつの間にか、汗は止まっていた。身体は燃えるように熱いのに、汗が出ない。その時、足下の床が大きくせり上がってきて、ボクに殴りかかってきた。

「先輩！ ひなたん先輩！ しっかりして！」

あれ、なんでボク天井を見てるんだろう。おかしいな、さっきまで後輩に稽古をつけていたのに。あれ？ 身体が動かないや。手脚が痺れる。目が霞む。ああ、しまった。これって熱中症の症状だ。あれほどこの程度の稽古じゃ音を上げないとか、そんなヤワな鍛え方はしてないとか言ってたのに、ボクがこの様じゃ後輩に示しがつかない。立たなきゃ。せめて立ってから休憩をすると一言いわないと

つい一週間ほど前に俺と雨音とひなたで訪れた森林公園は、花の

見頃もまだ変わっておらず、ハナシヨウブやヤマユリが可憐に、華麗に咲き誇っていた。だが、俺の目にはもう花は映っていない。いや、正確に言えば花は雨音の引き立て役だった。

俺は今回カメラを持ってきていた。花を愛おしそうに見つめる雨音の横顔、嬉しそうにポーズを取ってみせる雨音、こんなに表情豊富だったのかと驚きを感じながら、俺は雨音の姿をデジタルカメラで記録していく。雨音の笑顔のコーマコーマが、俺にとってかけがえのない大切な記憶になる。やがて、遊歩道が終わり、頂上部に設けられた展望広場に俺たちは出た。眼下には俺たちの住む街が一望出来る。

「あ、みーくん、あれ、学校ですよね！」

急に雨音が顔を寄せてきたものだから、俺の心臓は悲鳴を上げそうになった。辛うじて止まるといふ最悪の事態を避けた俺の心臓だが、すこし間合いを取った今でも口から飛び出しそうなほどドキドキと鼓動を打っている。

雨音の指さしていた方向には、確かにうちの学園が広がっていた。中にいるときも広い広いとは思っていたが、上から見るとさらに広く感じる。まあ、寄付金だ何だかんだで学費以外にも相当のお金がかかる学校だ。あのくらいの施設はあっても当然なのかもしれない。「学校の向こう側、西側に少し行ったところがうちのがある住宅街だな。雨音は空の上から俺の家を見つけたんだよね？　なら、今ここから家がわかる？」

「ええ。わかります。ちょうどあの赤い屋根が目印になります。その隣のかわらぶきの屋根のおうちです。あの赤い屋根のおうち、ひなたさんのおうちだったんですね」

「ああ、そうだよ」

流石に雨の精霊だけある。目はとてもいいようだ。普段空からどんな景色をみているんだろう。景色だけじゃない、他に仲間はあるのか？　家族とか、親戚とか。もしかして、うちに一週間近くも留まっただけで、心配をかけているんじゃないだろうか？

「それなら大丈夫です。わたし、家族はいませんから」

雨音の一言は、俺の心臓を鷲掴みにした。

寂しげに俯く雨音を、俺は思わず抱きしめていた。

「あ、あの、みーくん？ どうしちゃったんですかっ？」

「雨音、最後の願いなんてどうでもいい。ずっと、うちにいなよ」

俺は自分の思っていることをそのまま言葉にして雨音にぶつけた。

不器用で、不作法で、とても褒められた口説き文句じゃないけれど、これは俺の覚悟の言葉でもある。願いが叶っても雨音がいなくなるのでは意味がない。なら、願いなんて放って置いて、二人仲良く暮らしていけたらそれでいいじゃないか。

雨音は身を固くしていたが、やがて俺の腕に身体を任せてきた。

そして、そっと両の手を俺の胸に押し当てると、すっと俺から離れていった。

「みーくん、わたしに家族がないから心配してるんでしょう？ でも大丈夫。精霊はいつでもどこにでも遍在する存在なんです。いま、わたしは受肉してこの『人の身体』を持っています。でも本来の姿は、人の目では捉えられないものなんです」

「何を言ってるのかわからないよ」

「わたしには家族はいません。でも眷属はいます。今この時にも世界中で雨を司っている、雨の精霊の眷属が。そして、その眷属を統べる雨の神、クラオカミさまもいらっしやいます。だから、わたしには人間の家族のようなものはいないけれど、仲間はあるんです。わたしは自分の仕事としてみーくんの願い事を叶えて、自分の本来の仕事をしに空へ帰らなければなりません。それはもちろん今すぐというわけじゃないですけど」

雨音が展望広場の手すりに身体を預ける。ちくしょう！ 太陽の光が逆光になって、雨音がいまだどんな表情をしているかが見えないじゃないか！

「近い将来、わたしとみーくんはお別れしなくてはなりません。これはどうしようもないことなんです。わたしたちを統べる神、ク

ラオカミさまのご意志ですから」

目を細め、手で陽の光を遮って垣間見た雨音の表情は、とても哀しい笑顔だった。きつと彼女はぼくにその顔を見られたくないから太陽を背にしたんだと、その時気づいた。

「願いたい事、まだ決まりませんか？」

「俺には一つしか願いはない。でも、それは不可能だと雨音は言った。じゃあ、それを願う事なんて出来ないじゃないか」

不意に、雨音は腕に下げていたトートバッグをひよいと揚げてみせた。中には雨音が作った弁当がとお茶のポットが入っている。こんな話をしている最中にいったい何のつもりだろう。

「ここは一つ、お昼ご飯をたべて落ち着きましよう。昔の人は言いました。ご飯を食べないとお腹が空くじゃないか。お腹が空くと機嫌が悪くなるじゃないか。機嫌が悪くなると胃に悪いじゃないか。胃が悪くなるとご飯が食べられないじゃないか。ご飯が食べられないとなると」

「それ、いつまでループするの？」

「ご飯を食べない限り永遠にです」

参った。頭に上っていた血がだんだんと下がってくるのがわかる。不覚にもその使い古されたギャグで、俺の心は柔らかさを取り戻していた。

「そうだね、せつかく雨音が作ってくれた弁当なんだ。食べなきゃ罰が当たる」

「そうですね？ 精霊が心を込めて作ったものを粗末に扱つと、我々を統べる神の罰が」

「さ、あそこのテーブルが空いてる。あそこで食べよう」

「って、もう！ 最後までセリフを言わせてくださいっ！」

俺は悟っていた。雨の精霊である雨音に恋をして、そして、その恋は報われることなく散つたと。だが、雨音のあの表情、哀しげで今にも消えてしまいそうな笑顔をみてしまった俺には、これ以上雨音を悲しませることは出来なかった。

だから、俺は道化役にでもなんにでもなつてやる。
俺の願い事が決まって、それが叶い、雨音がふるさとの大空へ帰
って行くその日まで、俺は雨音を悲しませない。

頭がズキズキする。それに何だか空気が消毒液臭い。ボクは
どこにいるんだろう。目を開けたら、白い石膏ボードの天井が見え
た。周囲を見ると、カーテンが引かれていて、どうやらボクは病院
にいるらしいと分かった。左の腕には点滴のチューブが射し込まれ
ている。

いったい何であんな無茶な稽古をしたんだろう。今日の気温は予
報では真夏並みの三〇度以上になると言っていた。稽古をつける立
場のボクが、我を忘れて何をやっているんだ。そんなの指導者失格
だ。

唐突にシャツと音を立ててカーテンが引き開けられた。白衣を着
た女医さんと看護師さんが点滴の輸液のパックを交換してくれて
いる。ああ、そうだ、後輩たちはどうしただろう。ボクがこんな事
になって、さぞかし幻滅しただろうな。

「目は覚めてるようね。後輩さんたちがお待ちかねよ？」

そのグラマラスな女医さんが言うと同時に、五人の中等部の生徒
がベッドサイドに小走りに歩いてきた。みな様に硬い表情をして
いる。それはそうだろう。きっとボクを推薦した中等部の部長は、
この子たちにすごい先輩がいるんだよ、なんて自慢げに言っただに
違いない。

「ひなたん先輩！ 大丈夫ですか！？ 頭痛いとか、身体が動かな
いとか、倒れたときにどこか打ったとかありませんか！？」

「先輩ごめんなさい。こんな事になるなら、無理にでも先輩に水分
を摂ってもらうべきだったのに、私、私……」

「先輩、わたしたちはダメな後輩ですけど、これで見切ったりしないでください。お願いしますっ！　　今後もし指導お願いしますっ！」

「先輩は普段とっても優しいって部長から聞いてました。わたしたちに厳しくすることで高校のなぎなた部は甘くないって教えてくれたんですよ」

「ひなた先輩が倒れたときは、もうどうしていいか分からなくてわたしたち応急処置すらできなくて、本当にごめんなさいっ！」

五人が口々に謝罪の言葉をまくし立てる。もう、ボクは聖徳太子じゃないんだゾ。いっぺんに言われても何を言ってるのか分からないよ。

「ほらほら、『ひなた先輩』が困ってるわよ。一度に何人も口を開いたら、そりゃ聞き取れないわよ、ね？　ひなた先輩？」

女医さんがニヤニヤしながらボクの方を見ている。むっ、なんかむかついたぞ？　ボクはベッドの上で身体を起こそうとしてみた。うん、手も足も動く。大丈夫だ。

「お？　もう起きられる？　さっすが体育会系ね。運ばれてきたときは意識がなかったんだけど」

「大丈夫です。このくらいで音を上げるようなヤワな鍛え方はしてませんか」

「言っわねえ。その元気なら今日は入院の必要はないわね。バイトも問題ないし、この点滴が終わったら帰っていいわ」

あ、でもボク、いま保険証がない……。どうしよう。保険証がないと自費診療になっちゃうって言うし、もの凄く高額になるらしいし、そんなの困る！

「心配しないでいいわよ。家には連絡済み。ちゃんとお母さんが保険証もってこっちに向かっているわ」

「ここ、どこの病院ですか？」

「市立中央病院の救急病棟。あなたたちが稽古してた体育館の道路挟んで斜向かいよ」

「えっ、それじゃあ……」

「そう。その五人があなたを担いで運んできたってわけ。もうビツクリよ。防具つけた異様な集団が現れたんだもの」

ケタケタと笑う女医さん。そりゃまあ防具は物々しいけどさ、異様な集団はちよつと失礼じゃない？

「ホント、いい後輩を持って幸せね、あなた」

「……はい。そうですね。ボクは幸せな先輩です」

しばらく女医さんと雑談しながら時間を潰していると、点滴の輸液が空になった。看護師さんが手慣れた様子で針を抜いてくれる。

「ちよつとの間この脱脂綿を押さえてね。はい、外していいわ。

はい絆創膏をぺたりっと」

小さな真四角の絆創膏が、針の通っていたところにぺたりと貼られる。

「さあ、これであなたは自由の身よ。……なんか違うかな？」

「大違いだと思います。でも、お世話になりましたっていうのは合ってますよね？」

女医さんはタバコを箱からだしてくわえた。火をつける様子はかつたのに、何故か白い煙が先端からたゆたっている。

「あのー、病院って禁煙なんじゃ？」

「ああ、これね、電子タバコ。煙は水蒸気よ。気分よ、気分」

その時、女医さんの白衣の胸ポケットに入っていたPHSが着信音を奏でた。

「はい。……そうですね。分かりました。では。……お母さんが車で迎えに来てくれたわよ。受付で待ってるって。案内するわ。付いてきて」

ふとベッドの反対側の壁をみると壁掛け時計があった。時間は午後三時三〇分を差している。点滴に一時半かかったとしてボクが運び込まれたのは二時前後ってことか。気を失っていたのは二時間弱というところだろう。

「分かりました。でもその前に……着替えていいですか？」

そう。ボクは道着のまま寝かされていたのだった。

第三章

それぞれの矛盾

3 (後書き)

いかがでしたか？　もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さいませ。

第三章

それぞれの矛盾

4 (前書き)

第三章の4をお送りします。R - 15 指定をするか迷いましたが、指定せず掲載することにします。

それではどうぞ！

「それで、マナは補給出来たの？」

「はい、おかげさまで。満タンですっ！」

そう言う雨音の顔色は、確かに今朝より随分よく見える。肌のつやもいつも通りだ。やっぱり綺麗だよな。うん。

俺たちは昼食を終えたあと、遊歩道を外れた森の奥の方へと分け入っていた。そこには一本の杉の老木が立っていた。とても立派な木だ。だが何故だろう。俺はこの木を知っている気がする。いつだったか思い出せないが、俺はこの木を見たことがある。そんな気がして仕方がない。既視感というやつだろうか？

雨音は木々のあいだを歩きながら、木々の幹にてを触れていた。木々からマナを分けてもらうには、やはり木の多いところが都合がいいらしい。気功なんかでもそうだな。ってことはマナってのは気功でいうところの『気』なんだろうか？

「んー、そうですね。わたしは気功というのどういうものかは知りませんが、生命の根幹を成すエネルギーだということでは共通していると思います。でも、ある意味ではわたし自身がマナそのものだとも言えるんです。さっきもお話しましたよね？ わたしたちはあらゆるところに遍在すると。今は人間の姿をかりていますけれど、本当の姿になったらわたしは誰の目にも見えない、純粋なマナと変わらない存在になっってしまうんです」

雨音は杉の老木に手を伸ばす。

「肉体を持たないわたしたちは、純粋にエネルギーとして存在します。それはマナとかわりません。人間の姿を維持するのにも実は大量のマナを消費しています。食事で補っても、定期的にこういうところにマナを補給しに来なければならぬほどです。力の使い方もよりますけど、今のペースだと一〜二週間に一度は来ないと身体を維持出来ません」

そんなに負担になっっているのか。俺が願い事を決めずに雨音を地上にとどめている限り、雨音はまるで腎臓病の人が人工透析を受けるかのように、定期的にここに来てマナを補給しなければならぬ。それは本当に俺が望んでいることなのか？

「さて！ マナの補給も終わりましたし、またそろそろ雨を降らせてあげたいんですが」

「あ、ああ。それじゃあ帰ろうか。ちょうど帰りのバスが来るくらいの時間だし」

時計を見ると午後三時半を廻ろうとしている。バスに乗るなら今のうちだ。俺は杉の老木の根もとに置いてあった雨音のトートバッグと日傘を取ると、雨音に手渡した。

「それじゃあ、バス停まで歩こうか。今日はちよつと贅沢して帰ってもバスだ」

雨音は自分の荷物を受け取りながら、少し頬を赤らめると口の中で「よこよこ」と呟いた。

「はい！ あ、でも帰りのバスの中では……その……」

「あー、はいはい！ 大丈夫！ もうあんな恥ずかしい真似はしないから！」

当たり前だ。いくら雨音が綺麗だからって、あんな恥ずかしい想いまでして自分の気持ちを開陳することはない。それに、俺の気持ちはもう雨音には伝わっているはずだ。その上でバツサリと振られたようなものなんだ。

「……でも、本当に嬉しかったんですよ？ みーくんが綺麗って言ってくれて」

半歩後を付いてくる雨音がなにか愛おしいものを胸に抱くように澄んだ優しい声で呟いた。俺は気づかない振りをすると、まだ晴れている午後の空に目を向けた。雨音のふるさと。いつか彼女が帰ってしまう場所。手を伸ばしてもとても届かない遙かな高み。俺は彼女を帰したくない。でも、それは俺のわがままで。

ゲートを抜けると、帰りのバスが停留所で時間調整のため止まっ

ていた。まだ乗客は乗っていないが、ドアは開いている。俺は後のドアから乗り込むと、ドアのすぐ後の席に陣取った。窓側には雨音を座らせる。どうやら彼女はバスの車窓からの眺めがいたく気に入った様子で、まだ動いてないにもかかわらず、窓の外の景色に見入っている。

『駅前方面、循環バス、発車します』

エンジンがどるんと唸りを上げて息を吹き返す。ブザーがなってドアが閉まり、バスがするすると動き出した。

「本当にもう、心配したのよ？ 稽古中に倒れたなんて連絡が来たときは」

「ごめんなさい。ボクがムキになってたんだ。この子たちはむしろボクを助けてくれた恩人だから」

「そんなことは分かってます。みなさん、本当にありがとうございました。お礼にどこかでお茶でもいかが？」

「え？ いいんですか？」

一番背の低い後輩が嬉しそうに頬を緩ませる。きつと尻尾が生えていたら千切れんばかりに振っているだろう。

「お母さん、それはボクの役目だから取らないですよ。というわけで、ちよつとそこらの喫茶店にでも寄っていかない？ お茶代くらいは出すから」

「はい！ 私いきまーす！」

「私も！」

「私もお邪魔していいでしょうか？」

「あの私も……」

「私もお供します！」

五人全員が異口同音に臨時のお茶会への参加を表明する。むう。全員に奢ったら結構な出費だぞ？ でも、みんなボクの恩人だから

なあ。仕方ない、ここは一つ太っ腹なところをみせようじゃないか。「というわけで、お母さん、娘はこれから後輩五人とお茶をしてから帰ります。もう歩けるし、歩いてそんなに時間かからないから先に帰ってて」

「まったくもう……。みなさん、うちのバカ娘が暴走しないようにしっかりと手綱を握っててくださいね」

『は いー』

お母さんは苦笑いを浮かべると、最後に「あまり遅くならないようにね」と釘を刺して帰って行った。さて、みんなにお茶をこちそうするのはいいとして、どこの店にしたものか。ちよつと歩くけど、駅前まででしょうか。

「わたし、紅茶がとっても美味しいお店しってるんです!」

さつき真つ先に参加表明した一番小柄な後輩が手を上げながら言う。美味しいけどとっても高いお店じゃないだろうね? ボクの財布の中身も考えておくれよ?

「駅前にある『エトワール』っていうお店なんですけど、知ってますか」

「ああ、そこかあ。ボクもそこに行こうかって思ったところだよ」

「じゃあ決まりですね」

「みんなもそれでいいかな? 異論があるなら今のうちだゾ」

『異義なーし!』

「よし、それじゃあ駅前に向けてレッツゴー!」

ボクは防具一式となぎなた袋を担ぐと、五人の先に立って歩き始めた。うん。ちよつと辛いけど、歩けないわけじゃない。車で帰るなんて贅沢しなくても、これだけ歩けるなら歩いて帰った方が地球環境にも優しい。なんとなくエコな気分になるボクだった。

数分歩いた所で、大きな交差点を渡らなければならぬところに出た。バス道路が二本交差しているところで、交通量もとても多い。しかもその流れがかなり速い。交通事故も頻繁に起きている交差点だ。中央分離帯のところには、だれがしているのか、花が必ず供え

である。

そんな交差点に、小さな子供がサッカーボールを抱えて立っていた。幼い足では渡りきることが出来なかったんだろう。ボクも小さい頃はこの交差点が怖くて怖くて仕方なかった。

（信号が青になるまでちゃんと待つんだよ）

ボクは心の中で呟いた。その刹那、その小さな子供がサッカーボールを取り落としてしまった。ボールは子供の足にあたり、車道へと転がっていく。ダメだ。そのまま動かないで。ボクの心の中の声はその子供には届かなかった。ボールを追いかけて車道へ足を踏み出す。周りは全く見えていない。そこに一台の路線バスが勢いよく走ってきた。当然だ。信号は青なのだ。

「くっ！ 間に合え！」

バスがけたたましいクラクションの音を響かせる。その時になつてやっと自分がどういうところに立っているのか気づいた子供は、しかし何もすることが出来なかった。ただ迫り来るバスの前面を凝視している。ボクは無意識に走り出していた。だが、あと少しで子供に手が届くという所で脚がもつれ、倒れ込んでしまう。やはり熱中症の影響はあったのだ。ボクは前に転びながら精一杯手を伸ばして、子供を中央分離帯の方へと突き飛ばした。転んで怪我するかもしれないけど、バスに轢かれるよりはマシなはずだ。

次の瞬間、ボクは全身をなにか巨大なハンマーで殴られたような衝撃を感じて、続いて太腿の上を何かが蹂躪するのを感じ、それから何も感じなくなった。

森林公園行きの循環バスは、循環バスといいながら実際はループを描いて運行されているわけじゃない。むしろ往復バスとでも言った方が正解にちかいのだが、まあそんなことを市の交通局に陳情しても仕方がないので、循環バスは循環バスと呼ばれ続けている。

森林公園から細く伸びた山道を下りきると、今度は幅の広い幹線道路に出る。雨音はさつきから窓の外をガン見している。そんなに動く景色が珍しいのだろうか？

「はい！ 空にいるときは、こういう風に『移動する』っていう概念が希薄だったの。なにしろそこに遍在する存在でしたから！」

「それじゃあ、電車なんかに乗ったらもつとすごい事になりそうだな。そのうち乗ってみる？」

「はい！ ぜひ！」

バスは幹線道路が交差する大きな交差点にさしかかっていた。俺はなんとはなしにフロントガラスの前の景色を見ていた。すると、突然右手の方向からまだ小学校にも通っていないだろう子供が、交差点に飛び出してきた。

この交差点、バスは直進するはずだ。運転手がクラクションを何度も何度も鳴らす。それと同時に急ブレーキをかけたらしい。俺は椅子から放り出されてバスの床を転がっていた。身体をあちこちぶつけたが、どうやら大きな怪我はしなかったようだ。俺は自分の手脚がきちんと動くことを確認してそう判断した。

バスは斜め横を向いて停止している。雨音は顔を青くして窓の外を見ていた。そうだ。あの飛び出した子供は？ 俺は立ち上がってフロントガラスの向こう側、中央分離帯の待合スペースを見る。いた！ 子供は転んで膝小僧を擦り剥いたらしく、膝を抱えて泣いていたが、どうやら怪我は大したことがないようだ。でも、どうして？ バスに撥ねられたとしたらあんな怪我じゃ済まないはずだ。

「み、みーくん……、みーくん！！！」

顔面蒼白の雨音が俺を呼んで叫ぶ。何があったんだ？ 俺は雨音の指さす方向を見た。

そこには、見覚えのあるなぎなた袋と防具入れが

「みーくん、ひなたさんが、ひなたさんが……！」

恐らく雨音は見てしまったのだ。誰が飛び出した子供の代わりにバスに轢かれたかを。

運転手は扉を開けて外に飛び出していく。俺たちも一緒にバスから降り、バスの前方半ば、車体の下を覗き込む。そこには変わり果てた姿のひなたが、力なく横たわっていた。

足があらぬ方向へ曲がっている。頭からも出血して、血だまりを作っていた。これは助からない。俺は直感的にそう感じた。

交差点では車が止まりクラクションを鳴らしあっている。歩道では野次馬が集まってきて、中にはケータイのカメラで写真を撮っているヤツまでいる。運転手が携帯電話で救急車を呼んでいる。ダメだ、間に合わない。今すぐに手当をしても、恐らく間に合わない。それこそ奇跡でも起きない限り。

ひなたが、俺のかけがえのない幼なじみが、いなくなってしまう。俺はガクガクと震える膝を手で押さえつける。その押さええている手もぶるぶると震えている。俺の全身が、ひなたを失うことへの恐怖で震えていた。

「……………」

ふと横を見ると、雨音が天を仰いで何か呟いていた。俺には分からない言葉で。音楽のような旋律を伴う言葉で。雨音の身体が白く光る。雨音はいったい何をする気だ？ まさか、時間を！？

「ッ！」

雨音の詠唱が終わる。思った通り、雨音は時間を止めていた。そして白いワンピースが血で汚れるのも気にせず、車体の下からひなたの身体を引っ張り出す。俺も慌てて雨音に手を貸す。足は複雑骨折しているようだ。時間が止められているので、心臓がうごいていくかどうかはわからない。出血も時間を止めているからだろう、全く無い。

とりあえず、雨音と二人でひなたの身体を中央分離帯の待合スペースに持っていく。

「雨音、ひなたは助かるのか？」

「今状態を診ています。大腿部の開放性骨折、動脈を傷つけているようです。大腿部からかなりの出血。腹部にも内出血があります。肝臓に傷があります。頭の出血は単なる切り傷です。脳の損傷はありません。気を失っているのは失血によるショック症状でしょう。」

「……いずれにせよ、このままでは救急車が来たとしても、助かりません……」

「そんな……」

「でも、わたしがそんなことはさせません。今はマナをフルに蓄えた状態です。難しいですけど、ひなたさんの身体の再生を試みます」「そんなことが出来るのか？」

「わたしも人体の再構成なんて初めてです。ですが、わたしの『法術』を使えばそれが可能なはずです。みーくん、わたしを信じてください」

雨音はその花びらのような唇をきゅっと結び、歯を食いしばって集中力を高めようとしている。澄んだ深い色の瞳は固く閉じられ、両の手のひらは雨音の身体に向けて開かれる。

「雨音……」

「話しかけないでっ！ 気が散りますっ！」

雨音の手のひらが、うつすらと輝いてみえる。俺はそこから暖かい波動のようなものを感じていた。なんだろう、この感觸。初めて感じるはずなのに、なぜか懐かしい。そう、まるでこれは母親が子供を愛撫する手のひらのような……。

折れて骨が皮膚を突き破っていた両脚が、まっすぐに戻っている。すごい……！ 骨が突き破っていた皮膚もまるで何事もなかったかのように元通りだ。雨音は怪我を治すというより、ひなたの身体の再構成をしているのだ。だから、傷跡すら残らない。雨音の額に玉のような汗が滲む。滲んだ汗が滴となって、頬を伝い地面に落ちる。いや、地面におちる寸前で止まっている。少しひしゃげた透明な球体が雨音の周囲に留まっている。

(頼む、雨音、ひなたを助けてくれ！)

俺は心の中で叫んでいた。もしこの心の声が雨音に聞こえて、それが最後の願いかと聞かれたら、俺は「それでいい、だからひなたを助けてくれ」と言ってしまっただろう。ああ、矛盾している。俺は雨音がたぶんこの世で誰よりも好きだったはずなのに、その雨音との別れを覚悟の上でひなたを助けてくれと願っている。なんて矛盾だ。

「ッ！ はあっ、はあっ、はあっ……とりあえず、損傷した部位の再構成が完了しました。でも、大量に失血していますから血を増やさないと。もう少しだけ集中しないとっ！ ふんっ！」

雨音は気合いを入れ直すと、再び両の手をひなたにかざし固く目を閉じ、歯を食いしばった。美しく整った顔を、くしゃくしゃに歪ませ、必死の形相でひなたの血液の再構成を行っている。見えない『法術』がひなたの身体から失われた血液を再生させていく。蒼白だったひなたの頬に少しずつ血の気が戻りはじめる。服に付いていた血の跡も消えていく。

「ッ！ はあ、はあ、も、もう大丈夫……っですっ！ 彼女は助かりますっ！」

「ホントにっ！？ 本当にもう大丈夫なんだなっ！？」「大丈夫です。でもそのためにマナを大量に消費しました。時間を止めるのももうすぐ限界です。わたしとみーくんとひなたさんの服の血の跡は消しましたが、周囲の人間の記憶を消すことが出来ませんっ！」

仕方ない。本当ならこの場であったことを見た全ての人間の記憶を消してしまいたいのだが、雨音が限界だというのなら、それはもう無理なのだろう。俺は今どうすべきかを考えた。ひなたをこの場に残していくのは仕方ない。記憶を操作できないのはちよつと痛いけど、これだけ混乱してるんならそう問題ないだろう。とりあえず、俺たちはこの場に『居なかつた』事にした方がいい。

「雨音、とりあえず俺たちはここを離れよう。離れていても止めた時間をもとの流れに戻すことは出来る？」

「はい。問題ありません」

「よし、なら話は早い。一刻も早くここを離れた方がいい。とりあえず移動しよう。あとのくらい時間止めていられる？」

「わたしたちの主観時間であと数分が限度です」

「よし、少しだけ離れて、そこで時間の流れを戻そう。いこう！」

俺たちは石像のように固まったまま動かない野次馬の間をすり抜け、百メートルほど離れた他の交差点まで走った。雨音が苦しそうにしていたが、今はとにかく時間を短縮しなくては。

「よし、ここなら俺たちを見てた人は居ないだろう。雨音、時間の流れを戻して！」

「はいっ！」

昨日のような光の爆発はなく、まるで一時停止していたビデオが再び再生されるかのように時の流れが戻った。雨音はせえせえと肩で息をしている。せっかくマナをフルチャージしてきたっていうのに、これじゃあ何のために森林公園まで出かけたのか……いや、ましてもし俺たちが森林公園にいつて、雨音がマナを補給して、さらに帰りにあのバスに乗り合わせていなかったら……。ひなたはバスに轆かれたまま息絶えていただろう。

「今日、マナを補給しにいつておいて、よかったですねっ、みーくん」

額に玉のような汗を滲ませ、息も荒くして、それでも雨音は今日森林公園にいったことは無駄ではないと微笑みながら言ってくれた。俺はひなたを失わずに済んだという実感がようやく湧いてきて、泣き声が腹の底からのどまでせり上がってきた。でも、雨音に涙を見せたくない。そんな強がりを見せ無視して、涙が勝手に頬を伝った。

周りの人はさぞかしビックリしただろう。高校生の男が、突然路上で涙を流し大声で泣き始めたのだから。俺は立っていられなくなり、歩道の端っこに膝をついた。涙が止めどもなく流れてくる。ま

るで獣の咆哮のような声で泣き叫びながら、俺はようやくひなたの特別さに気づいていた。

なんてことだ、俺は、雨音と同時にひなたも同じくらい、いや、もしかするとそれ以上に愛しているのだ。

こんなの矛盾してる。矛盾しているが、それは俺自身の偽らざる本心だった。

第三章

それぞれの矛盾

4 (後書き)

いかがでしたか？　もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さいませ。

第四章

The Long Good Bye .

1 (前書き)

第四章の1をお送りします。
それではさようぞ！

ボクは確かにバスに轢かれたはずだった。バンパーで激しく身体を打ち、太腿の上をタイヤが乗り越えていき、何も感じなくなった。それなのに、なぜボクは今こうしてこの名前も知らない小さな男の子をあやしているんだろう。後輩たちが信じられないといった顔で中央分離帯のボクたちの方へとかけてくる。バスの運転手さんらしき男性が、まるで怪物でも見たかのように呆然と立ちすくんでボクをみている。

男の子の母親らしき女性が、ボクにしきりに礼を言っている。

「本当に、お怪我はないんですか？」

男の子の母親が怪訝そうに聞いてくる。ボクもわけが分からない。ああ、ボク、ここで死ぬんだと思ったあの瞬間、確かにボクは致命傷を負っていたはずなのだ。

「とにかく、救急車を呼びましたから、それにしても、その……。あの血だまりは誰のなんでしょう？」

運転手さんがもつともな疑問を誰にもなく問いかける。確かにバスの車体の下に結構な量の血だまりが出来ている。あれは、賭けてもいい、絶対にボクのものだ。DNA検査したら、たぶん一発で一致する。そうだ。ボクはあの場所で死に瀕していたはずなんだ。

男の子の方はボクの手がギリギリで間に合ったようで、転んだ時のかすり傷ですんだらしい。ピーピーないていたけど、あやしていたらだんだん鳴き声は小さくなっていった。まだしゃくり上げてるけど、もう泣き止むだろう。あ、そうだ、防具となぎなた。慌ててたから持ったまま走り出しちゃったけど、無事だろうか。

「防具となぎなたは大丈夫です。はね飛ばされただけみたいです。

……でも、先輩。先輩は確かに轢かれて……」

あの一番小柄で元気いっぱいの後輩が、顔を真っ青にしたまま咳く。どうやら、みんなもボクが轢かれたのは見てるらしい。後輩た

ち全員が、頷いていた。ああ、これはボク一人が幻覚を見たというわけじゃないんだ。ってことは、集団幻覚ってやつだろつか？

やがて、遠くから救急車のサイレンが聞こえてきた。赤色灯を回し、反対車線も突っ走り、信号が赤なのに「救急車右折します」とマイクでがなり立てながら『事故現場』に突っ込んでくる。さらに、救急車とは別のサイレンの音がし始めた。これはパトカーだろう。救急車の後部ドアが開かれ、ストレッチャーが引き出される。ボクは必要ないと断ったが、救急隊員が「もしかしたら頭を打ったりしてるかもしれませんが」と言っつて、半ばむりやりストレッチャーに横にならされた。

パトカーが三台ほど到着したときに、ボクと後輩のなかの一番背の低い子　しまったちゃんと名前聞いておくんだつた　と、転んで擦り剥いた男の子の三人を乗せた救急車が事故現場を離れた。救急隊員が携帯電話で受け入れ態勢のある病院を問い合わせている。結局、市立中央病院にまた送り戻される事になってしまった。

病院に着いたボクは、とりあえず、ということとで脳のX線CTを撮ってもらった。担当医は中年のおじさんで、さっきの女医さんじゃなかった。もしそうだったらどうしようとして少し心配していたのだ。もしあの女医さんが担当だったら、「また戻ってきたの？　よつぽど病院が好きなのね」くらいの嫌みは言われそうだ。

一足先に家に帰っていたお母さんは、とんぼ返りで病院に戻ってきた。しかも今度は泣きながらの登場だった。どうやら警察から連絡が行って、ボクがバスに轢かれた、という事だけが伝わっていたらしい。CTの現像を待っていたボクは、いきなり泣きながら処置室に入ってきたお母さんに、猛烈なハグをくらったわけだ。キスマでされそうになったけど、それはまだ大事な人のために取っておきたかったから超絶拒否つた。当たり前だよな？

今は母親が医師から説明をつけていて、ボクと後輩のちびっ子ちゃん（ボク命名）は外の待合室にいる。長いすが幾つも並んだ廊下は、清潔だけど寒々しい雰囲気、なんというか、現実主義者のボ

クをしてもなんとなく不気味さを感じるほどだ。

「先輩、先輩になら信じてもらえると思うので、お話したいことがあるんです」

「ん？ なーに、ちびっ子ちゃん？ ボクでよかつたら相談に乗るよ？」

ちびっ子ちゃんは何度も口ごもりながら、本当に言ってもいいのだろうかと思巡してようだ。ボクが肩をポンポンと軽く叩いて微笑みかけてあげると、ようやく覚悟が決まったのか、ちびっ子ちゃんは真剣な目つきで話を切り出した。

「今日、体育館に行くときのバスの話、覚えてますか？ あの『綺麗だ』を連発してたカップルの話」

ボクは思わず身体に力が入ってしまった。ちびっ子ちゃんはなにをボクに言いたいんだろう。そのカップルがみーくと雨音ちゃんつだということはもちろん確信しているし、それはもう仕方がないと心の片隅に追いやっていたのに。

「あの時、先輩を轢いたはずのバスの中から、運転手さんだけじゃなくて、あのカップルも降りてきたんです。間違いありません、真っ白なお嬢様風のワンピースにつばの広いリボン付きの帽子でしたから。でも、その二人、一瞬で居なくなっちゃったんです……。間違いなくあのバスから降りてきたはずなのに、轢かれた先輩を探すように車体の下を覗いていたのに！」

「ちょ、ちよつと落ち着いて！ それはちびっ子ちゃんが目を話した際にどこかに行っちゃったとか、そういうことじゃ……」

「違います！ 私以外の四人も確かに見てるんです。あの二人が現れて、そして一瞬でどこかに消えちゃったところを！」

背筋に冷たいものが伝う。そんな馬鹿なと笑い飛ばしたい。デンプア系の話なら余所でやれと突き放したい。でも、それでもボクの心のどこかで『それは現実だ』と囁く誰かがいる。あの一瞬の体験が、ボクを冷たいリアリストから、迷信だつて信じてしまう普通の女子高生に無理やり変身させてしまった。

「その話、他の人にはしないほうがいい。もしお巡りさんに聞かれたりしても、知らないって言いなさい。でないと面倒な事になるかもしれない」

「面倒な事……ですか？」

「うん。有り得ない事が幾つもおこってるんだ。ボクだって本当は自分が轢かれたという自覚がある。でもこの通り、ボクはぴんぴんしてる。服にも血の跡一つない。轢かれたのがもしもボクたちの思い込みだったとしても、バスの前の横断歩道上で転んだボクの生足に傷一つないのは不自然すぎる」

そして、ボクが忘れていたけれど思い出しかけていたあの妙に引つかかる雨音ちゃんの言葉。

「わたし、なんですっ！」

だめだ、なんて言ったのが思い出せない。のど元まで答えが出かかっているのに、それがなぜか出てこない不快感。ああ、またこの不快感だ。デンパ女と罵ったのは覚えているのに、彼女が、雨音ちゃんがみーくんの願い事を叶えるためにここにいると宣言したことも覚えてるのに、ボクとみーくんの間に割って入るうなんて絶対無理だと啖呵を切ったことも覚えてるのに。

雨音ちゃんが何者なのか、それだけがボクには思い出せなかった。

俺は歩道で涙を流すだけ流し、力尽きてへたり込んでいた。ひなたを乗せているであろう救急車が目の前を走り去った時は、一瞬追いかけてたい衝動に駆られたが、足は動いてくれなかった。

座り込む俺の正面に、雨音のスカートの裾が見える。どうするつもりだ？ 情けない男だとなじるつもりか？ それならそうしてくれただ方がずっと気が楽だ。思う存分罵倒してくれ。

だが、雨音は俺をなじらなかつた。それどころか、ワンピースの

裾が汚れるのも気にせずその場で膝をつき、俺の頭を胸にかき抱いてくれた。一度は止まっていた涙が再びこみ上げてくる。なんだよ、せつかく美少女なんだから、少しは胸にも栄養を送れよ。ほんと、平坦な、けどとても暖かく優しい胸だった。許されるなら、このまま眠ってしまいたいけれど、それはダメだ。あの交差点からは僅か百メートルほどしか離れていない。俺たちを見ていた野次馬がこっちに来ないとも限らない。

「つく……。雨音、ありがとう。もう平気だから……」

「そうですね。よかったです……」

「それよりここから移動しよう。裏道を通ってうちに帰るよ。目撃者がいると面倒だ」

雨音も同意見のようで、一切異論をとねえなかった。時間を止めていたのはこの前よりずっと短い間だった。主観時間で一〇分程度だろう。だが、俺には人間の身体を再構築するために必要なマナの量など分からない。今にも雨音が消えてしまうのではないか？ ひなたは助かったが、こんどは雨音がいなくなってしまうかもしれない。

「みーくん、大丈夫ですよ」

俺の半歩後をついてくる雨音が俺の心を見透かしたように声をかけてくる。俺は立ち止まって振り向きたい衝動に駆られた。だが、まだこんな所においては目撃者に見つかるかもしれない。まるで犯罪者の心理だな、と自嘲する。

「今すぐ肉体が維持出来なくなるほどのマナは消費していません。また明日、森林公園にいきましょう。今度はひなたさんも誘って、三人で一緒に」

「誘えるかな。病院から帰ってないかもしれないし……」

「わたしの肉体修復は完全でした。信じられないんですか？」

「いや、そうじゃなくて……。医者が念のためとか言って検査入院させたりするかもしれないじゃないか。だから、もしかしたら家には帰ってこないかもしれない」

幹線道路から一本離れた路地を、自宅のある方向へ向かいながら、俺は雨音に「人間の医者つてのはそういう人種なんだ」と説明した。だが、雨音には今ひとつ理解出来ないようだ。仕方ないか、雨の精霊だしな。雨の精霊にも医者が必要な時はあるんだろうか？

「お医者さまとは違いますけど、ヒーラーなら存在しますよ。傷ついた精霊を弥してくれる、とても大切な存在です」

「それじゃあ、そのヒーラーが『たぶん大丈夫だろうけど、念のため一日様子をみよう』って言うてるんだと思ってくれたら分かりやすいか？」

今度は雨音にも合点がいったようで、「もしひなたが帰ってきていたら、明日ひなたも誘って森林公園にいこう」と誘うということになった。

裏通りを通って遠回りをしたため、家に着くまでには普段よりかなり時間がかかった。日はかなり西に傾いている。いつも曲がる交差点を左折すると、赤い屋根のひなたの家が見えてきた。車庫には車がない。たぶんおばさんが病院に行っているのだろう。開いたままの門扉が、いかに慌ただしく出かけたかを物語っている。

俺はひなたの家の前を通り過ぎると、自宅の門扉に手をかけた。ちよつと錆びてきた蝶番からきいと軋む音がする。門扉を開け放つて雨音を招き入れる。雨音が玄関への階段を上がるのを確かめてから、門扉を閉じる。雨音には合い鍵を渡してあるが、彼女はそれを使わず俺が玄関まで上がってくるのを待っていた。

「合い鍵で開けて先に上がってればいいのに」

「一応、居候ですから。家主さまと一緒にの時はお待ちした方がいいかと思ひまして」

俺はズボンのポケットからキーホルダーを取り出し、家の鍵を開けた。外の空気に半日慣れた鼻に、家の中からうち独特の生活臭が流れてくる。その匂いは決して不快なものではなく、言ってみれば自分の巢に帰ってきたことを実感させられる香り。家が無言で俺たちに「おかえりなさい」と言っているかのようでもある。

「居候か……俺が願い事決めちゃったら、雨音はここに居続ける意味を失うんだよね」

「そうですね。でも、わたし少しこの地上が好きになってきてるんです。人の姿を借りて雨を愛する人のところへ遣わされて、色々な人に出会って、話をして……。本当はちよつと怖かつたんですよ、地上に降りてくるの。相手が信じてくれなかったら、受け入れてくれなかったらどうしようって。でも、みーくんはわたしを受け入れてくれました。それどころか、願い事が叶うまでのあいだ、部屋も自由に使わせて下さってます。だから、わたしはきつと今まで地上に降りてきた雨の精霊のなかで一番の幸せ者ですっ！」

雨音は玄関の上がりかまちにその小さな足をかけながら、心底嬉しいのだと言わんばかりに微笑んでいた。俺だって最初から受け入れたわけじゃない。最初は悪い夢かと思ってた。でも目の前で見せられた奇跡によって、信じるしかなかったのだ。

「雨音は大げさだな。俺はそんな大したことはしてない。買いかぶりすぎだよ」

そうだ。俺は同時に二人の女の子に想いを寄せるといふ、やっつてはならない事をしている卑怯者だ。雨音はきつとそれを赦してしまっただろう。でも、俺の中にも良心はある。その良心の回路に雨音とひなたというデータを送ったら、回路自体が焼き付いてしまったよなものだ。

玄関からリビングへ続く廊下を歩きながら、俺は一つの決意をしていた。俺に許される願い事はきつとこれくらいしかない。ひなたが帰ってきていたら、「一緒に森林公園に行こう」と誘おう。何故かと聞かれたら、とても大事な用件だとも言うっておこう。実際本当の事だ。

リビングのテレビをつけると、ニュースでバスが事故を起こしたことを伝えていた。そして、目撃者の信じられない体験も紹介されている。記憶を操作していないのだから、当然と言えば当然の結果だ。俺と雨音はソファに並んで座りながら、そのニュースを見た。

「やっぱりこうなったか。でも、あの場にいた全員の記憶を操作する余裕なんてなかったんだろう？ 仕方がないさ」

食い入るようにテレビの画面を見つめていた雨音が、小さな呟きを漏らした。

「わたし。もしかしたら余計なことをしてしまったのかもしれない……。人の生死にかかわる運命を弄つたに等しい行為です。でも、あのままひなたさんを死なせるなんてわたしには出来なかった。これって矛盾してますよね？」

「矛盾してて当然さ。俺たちは矛盾だらけの存在で、精霊だって決して無謬の存在じゃないってことだよ。それに、あの時雨音がひなたを救ってくれなければ、俺は一生ものの心の傷を背負う事になってたはずだ」

「みーくん……。みーくんはやっぱり優しい人です。みーくんの言うことが矛盾していたとしても、それはきっと優しさがそうさせてるんだと思います」

優しいというのなら、雨音の方が余程優しいじゃないか。雨音の役目は俺の願いを叶えることであって、それ以外は余計なことだったはずだ。時間を止めてまでひなたを救うのも、本来の雨音の仕事ではなかったはずだ。

その時、隣の家の車庫に車を入れる音が聞こえてきた。何回も何回も切り返して、苦勞して車庫入れをしているのは、きっとひなたの母さんだ。あの人が唯一苦手としているのは、車の車庫入れだ。

隣の車庫の扉がガラガラと音を立てて閉まった。俺と雨音は互いに見つめ合い、頷いた。

俺はポケットに入れてあったケータイで、ひなたの番号を呼び出し、通話ボタンを押した。

ボクが玄関の鍵を開けてる間に、お母さんは車を車庫に入れてい

た。車庫入れが苦手なお母さんは、何度も何度もハンドルを切り直してようやくいつもの位置に車を止めることが出来たようだ。わたしは防具一式となぎなた袋を持ったまま、二階への階段を上りはじめた。生まれて一七年間を過ごしてきた我が家。ほんの数メートルの空間を隔てて、みーくんの家がある。

みーくんは雨音ちゃんと今二人で家にいるだろうか？ 胸がざわめくような感じがして、何故か涙が出そうになる。ボクは口をぎゅっと結んで奥歯を噛みしめる。涙なんか流さない。泣いてしまったら、負けを認めたことになってしまう。わたしは雨音ちゃんが嫌いにはなれない。でも負けるのも嫌なのだ。矛盾する心が自分を痛めつける。

自分の部屋に入って防具となぎなたをいつも置いてある位置にしまう。バスにはね飛ばされたのだ、あとでしっかり点検しておかなければ。もしかしたら使えなくなってるかもしれない。中等部のころから愛用してきた防具には、それなりの愛着がある。

「……今のうちに手入れしておくかな」

ボクはいったん机の前の椅子に腰を落ち着けていたが、立ち上がって防具の袋に手を伸ばそうとした。

『~~~~~』

その途端、机の上に置いていたケータイから着信音が流れはじめる。発信者は『みーくん』。どうしよう、今出たらなにを話しているかわからない。でも、出ないわけにもいかない。出なければ雨音ちゃんに負けたことになる。そんなのは絶対イヤだ！

震える手でケータイを開き、通話ボタンを押す。一瞬遅れてみーくんの声が聞こえてきた。

『もしもし？ ひなたか？ もう家に帰ってるか？』

「う、うん。どうしたのさ、電話なんかかけてきて」

『ひなた、お前、明日用事あるか？』

「別がないけど、どうしたの？」

『なら空けておいてくれ。明日一緒に森林公園に行こう。先週に続

いてハイキングだ』

一瞬びくつと身体が硬直してしまった。一緒に森林公園に行こう
一緒に。それは二人で？ それとも

「……………雨音ちゃんも一緒にいくの？」

『そうだ。俺は雨音にもひなたにも大事な話がある。その話をする
のに一番いい場所が、あの森林公園だと俺は思っただ。俺とひなた
と雨音。三人が初めて仲良くなれた、あの場所が』

ボクの胸のざわめきが次第に大きくなる。みーくんは何をボクと
雨音ちゃんに話すのだろう。聞くのが怖い。怖いけど聞きたい。矛
盾してる。でもどちらもボクの本心だ。どうする？ こんな気持ち
のままみーくんの大事な話を聞いてもいいのかな。

『どうかな。出来たら、というか、絶対に一緒に行ってほしいんだ。
本当に大事な話だから』

そんなこと言われたら、YESと応えるしかないじゃないか。み
ーくんはすごい。ボクがどう応えるか知っててこんな言い方をする
んだから。でも、もしそういつて貰えなかったら、きっとボクは自
分の気持ちに素直になれない。

「わかった。一緒に行くよ。時間は何時がいい？」

『開場と同時に入ろう。出る時間はこの前と同じ。ひなたにはサン
ドウィッチを作って来てほしい。この前と同じヤツ』

「分かった。ちゃんと作って持っていくよ。雨音ちゃんもお弁当作
ってくるんでしょ？」

そう、これはあの日の再現なのだろう。あの日を再現することで、
みーくんが何をしたいのかは分からないけれど。

『それから、あ、ちょっと、待ってよ……………だから……………分かったよ、
ほら……………ひなたさん？ わたしです。雨音です。』

心臓が思いきり掴まれたような気がした。みーくんは雨音ちゃん
からの伝言を伝えようとして、雨音ちゃんにケータイを奪い取られ
たのだろう。

『わたしからも明日、大切なお話があります。でも、そのお話は明

日のハイキングの最後にしようと思います。だから、明日はこの前と同じように思いつき楽しんでほしいんです』

雨音ちゃんの声は静かで、優しさに満ちていて、それでいて真剣な響きをもってボクの耳朵を打った。雨音ちゃんもずるい。みーくんの説得だけでももう行く気になっていたのに、さらに雨音ちゃんにそんなことを言われたら、ボクはもう絶対断れない。

「うん。ボクもね、雨音ちゃんとみーくんに大事な話があるんだ。でも、それも明日のハイキングの後にしようと思う。いいかな？」

『もちろんです。明日は楽しい一日にしましょうね。みーくんに代わりますか？』

「いや、いいよ。ボクからは特に言うことはない。今はね」

『では、また明日』

「うん、明日ね」

親指で通話終了のボタンを押す。

明日は三人でハイキングだ。雨音ちゃんの言うとおり、大事な話までは思いつきり楽しもう。

第四章

The Long Good Bye .

1 (後書き)

いかがでしたか？ もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さいませ。

第四章

The Long Good Bye .

2 (前書き)

第四章の2をお送りします。
それではさようぞ！

俺は雨音からケータイを受け取ると、回線が切れていることを確認してからそれをズボンのポケットに押し込んだ。ひなたのことだ。俺だけじゃなく雨音にまで「大事な話がある」と言われて、それを断るなんてこと出来るわけがない。

ちよつとずるいやり方だったかなとも思う。でも断られて大事なことを伝えられないよりはずっといい。だから、俺はそれ以上うじうじと気にするのをやめにした。明日は三人でハイキングだ。成長著しいひなたの弁当作りの腕も楽しみだし、雨音の見事な行楽弁当も楽しみだ。え？ 『花より団子』かって？ とんでもない。弁当だって明日のハイキングの楽しみの一つにすぎない。本当の楽しみもしかしたらそれは三人にとって凄く辛いことになるかもしれないが　　は、ハイキングの最後にとっておくのだ。

「ひなたさん、ちゃんと来てくれるって言ってました。それに、ひなたさんからもわたしたちに大事な話があるって」

「うん。明日は思う存分楽しもう」

「はいっ！」

俺はソファから立ち上がると、キッチンへ向かってエプロンを纏った。雨音は今すぐ急に消えるわけじゃないといっていただけで、少しでもマナを活性化させておいた方がいいに決まっている。そして、俺にはその効能をもつ料理が作れる。材料はちょうどあと一回分くらい残っていた。

「みーくん、もしかして、アレを作ってくれますか？」

「うん。俺にはそのくらいしか雨音にしてあげられる事がないからね」

「わたし、手伝いますっ！　いえっ、手伝わせて下さい！」

「別にいいのに……いや、せっかくだから一緒に作るうか。作り方を覚えたらいつでも好きなときに作れるようになるしね」

雨音がその大きくて済んだ深い色の瞳を煌めかせながら、キッチンへと飛んで来た。そういえば、今まではどちらかがキッチンに立って料理していても、共同作業はしたことがなかった。何だか心の奥の方がくすぐったいような、不思議な感覚。

材料を切り、中華鍋を熱し、油を引き、材料を炒める。熱による化学反応を巧みに応用した先人の知恵の結晶が、料理のレシピや調理法だ。そこに自分の工夫をちよっぴり加え、新たなレシピが誕生する。俺の作る麻婆豆腐も、四川式の作り方を応用して、日本でも手に入る材料でいかに本場の味を再現出来るかを追及したものだ。

炊飯器が湯気を上げる。中華鍋に鶏ガラスープを足し、茹でておいた角切り豆腐を投入する。俺が支持するとおりに雨音が調理を進めていく。いいぞ、炒める過程でも焦がしすぎずに上手く香りを立てられたし、この麻婆豆腐は俺が一人で作ったのと寸分変わりない出来になるだろう。雨音が水溶性片栗粉を回し入れ、一混ぜしてとろみをつける。ふうっと雨音が安堵の溜息を漏らした。彼女は何かを伺うような視線で俺の方を見上げてくる。

「うん、完璧だよ。初めてでよくこれだけ出来たね」

心配げだった雨音の瞳に、喜びの色が滲む。雨上がりの紫陽花のようにきらきらと輝く笑顔を浮かべ、彼女は言った。

「みーくんの指導がよかったです！ わたしひとりじゃ、まだ多分ちゃんと作れないと思います……だから……」

雨音の言いたいことが何となく感じられる。地上に雨音を引き止めて置きたいのは俺だけじゃない。きつと雨音もまだここに居たいんだ。でも、三つの願い事を叶えたら天に帰るのが雨音に課せられたルールなのだ。本音を胸の内に隠して、俺たちはきつと最初で最後になる共同作業を続けた。

「じゃあ、深皿持つてくるからちよつと待ってて。花椒の粉は棚のそこにあるから」

「はい。あ、これですね。これが痺れるみたいに辛くて、たまらな
いんです！」

「辛いものばっか食べてるとバカになるとか言ってたくせに……。
はい、お皿」

「いいんです！ みーくんの麻婆は特別ですから！ さて、おさら
によそつて……と。じゃーん！ 最後の決め手が来ましたよ！」

「おう！ これでもか！ っていうくらい振りかけて丁度いいから
ね。けちらずどばつといつちやえ！」

「えーい！ これでもか！ これでもか！」

「思い切つていったなあ。うん、よしよし、そんなもんだらう。雨
音特製の四川式麻婆豆腐の出来上がりだ！」

エプロンを着けたままぐるぐる回って喜ぶ雨音。身体が廻るのに
あわせて、髪がさらさらと舞う。野暮つたいエプロンを着けている
というのに、その姿はいつにも増して綺麗に見えた。

「じゃあ、早速ただこうか。テーブルに運ぶのは俺がやるよ。雨
音は席に着いてて」

「いいえ。これも共同作業ですっ！ 一緒に運びますっ！」

「雨音つて結構頑固だよな」

「今に始まったことじゃありませんから」

軽口をたたき合いながら、一緒に作っておいた溶き卵のスープや、
ちぎったレタスを皿に盛って缶詰のツナを載せただけの簡単サラダ、
炊きたてのご飯の入った炊飯器などをダイニングのテーブルへと運
ぶ。二人で配膳を終えると、同時に席に着いた。

「それじゃ、雨音の麻婆を審査させてもらおうかな」

ちりれんげで一口分の麻婆豆腐を掬い取る。香り、よし。見た目、
よし。さて、問題は味だ。俺はちりれんげの上の麻婆豆腐を口の中
に滑り込ませた。唐辛子のピリリとした辛さに、花椒の舌を痺れさ
せるような辛味が渾然一体となって、絶妙のハーモニーを奏でてい
る。豆腐の歯ごたえもしっかりしていて、煮崩れもない。

テーブルの反対側から、雨音の心配げな視線が俺に投げかけられ
る。俺は真剣な顔で味を確かめていたが、雨音の瞳を見返すと、右
手の親指をぐつと立ててサムアップ。笑顔で「文句なしに合格！」

と告げた。不安げに俺の講評を待っていた雨音は、破顔一笑。眩しすぎるぐらいの笑顔で自分もちりれんげを取った。

「じゃあ、わたしもいただきますっ！……ホントだ！ みーくんと同じ味ですっ！」

俺たちは他愛のない会話をしながら、食事を続けた。もしかしたら、いや、きつとこれが二人で食べる最後の夕食になる。その事実を脳みその隅っこへ追いやるように、俺たちは尽きることのない会話を続けた。食べ終わったら、これも最後の共同作業になるだろう皿洗い。二人で役割を分担して、食事の後片付けをしていく。俺は一人で食事の用意をしたり後片付けをすることに慣れすぎていたとふと思った。誰かと一緒に食事をする楽しさも、もう長いこと忘れていた。それを雨音は俺に思い出させてくれた。

皿洗いが終わり、二人でエプロンを脱いで、リビングでゆったりとした時間を過ごす。そろそろ風呂が沸くころだ。いつもと同じく、雨音が先で俺が後。これも何となく決まった習慣だった。覗きに行こうかななんて不埒な考えがちらっとだけ脳裏に浮かんだが、実行はしなかった。怒った雨音の顔も綺麗だけど、嫌がる雨音の顔は見たくない。

俺が風呂から上がると、雨音はテレビのニュース番組に見入っていた。俺もバスタオルで髪を拭きながら雨音の隣に腰掛け、その二ユー番組を見る。不可解な事故のニュースは視聴率も取れるのだろう。他局の二ユー番組でも同じように採り上げられていた。どの局も一様になり立てていた。バスが轢いたはずの少女は全くの無傷だったと。心理学の専門家と称する男性が、これは集団幻覚だろうというようなことを、もっともらしく語っている。

ふと心配になったことがある。ひなたのところ取材なんかは来ていないだろうな？俺はカーテンの隙間から外の様子を確かめる。怪しい車が止まっているわけでも、報道陣がべったり貼り付いているわけでもない。テレビで流れた病院の会見でも「患者の個人情報 は公開できません」と言っていた。つまり、ひなたは全くの自由の

身というわけだ。これなら明日のハイキングにも問題なく行けるだろう。

時計をみるとそろそろ十一時半をまわるところだった。俺はテレビのリモコンを操作して電源を切った。

「そろそろ寝ようか。明日はたくさん歩くからね」

「そうですね。そうしましょう」

俺は照明のリモコンでリビングの明かりを落とすと、二階の自分の部屋へと向かった。雨音は俺のすぐ後をついてくる。それぞれの部屋の前についたあと、どちらからともなく視線を絡ませる。瞳と瞳で何でも通じ合うことが出来るほど、俺たちはまだ深い関係じゃない。でも、雨音がその視線に乗せているメッセージはなんとなく分かった。でも、それは言葉にしない。いや、したくない。

「それじゃあ、おやすみなさい、みーくん」

「ああ、おやすみ、雨音」

それぞれが自分の部屋に入り、寢床につく。リモコンで部屋の電気を豆球のみにする。明日で全てが変わってしまうかもしれないというのに、俺は不思議と落ち着いていた。ゆっくりと睡魔が近づいてくる。薄手の掛け布団をお腹の部分だけにかけて、俺は睡魔に意識を委ねた。

「……くん、みーくん。朝ご飯出来ましたよっ！」

遠くから雨音の呼ぶ声が聞こえる。俺は寝ぼけ眼で、寝坊対策のために部屋の反対側の机の上に置いてある目覚まし時計を見た。午前五時五〇分。うん、まだ起きなくていいよね。俺は二度寝を決め込んだ。トントントンと階段を誰かが駆け上がったって来る足音が響く。んー、大お布団帝国は偉大なり。

「みーくん！ 朝ご飯出来てますよっ！ 起きて下さい！」

「雨音さん？ 今日は部活の朝練もないんだし、もう少し寝かせて

おくんなまし……ぐう」

「ダメです！ こうなったら実力行使です！ 覚悟して下さいっ！」
「実力行使だつて？ まさか『法術』で俺をたたき起こすつもりか！？ 俺の意識は一気に覚醒していた。だが、大お布団帝国から出るつもりはまだない。俺は狸寝入りを続行した。突然、布団の中になにか暖かくて柔らかいものが侵入してきた。俺の手に触れているのは、これは、雨音の腕？ なんてことだ！ 敵は大お布団帝国の領内に侵犯してきたのだ！ 布団の中でゴソゴソと動き回る雨音。彼女は俺に馬乗りになると、適度に温もっていた掛け布団をはね飛ばしながら身体を起こした。いわゆるマウントポジション。絶対的に俺が不利な体勢だ。

「素直に起きない悪い子にはお仕置が必要ですよ。先週のハイキングのとき、ひなたさんから受けたレクチャーの成果、とくとご覧あれ！」

雨音はものすごくいい笑顔で、両手をわきわきさせながら大きく腕を広げた。

「ちょっと待て！ まさか、アレをする気じゃあ！？」

「弱点は、そこだあっ！」

雨音は俺のパジャマの裾から手を入れて、直に脇腹をくすぐってきた。おのれ、ひなため。よりによってこんな事を雨音に教え込むとは！ っくっ！ ちくしょう、もう耐えられない！

「ひはははははははっ！ らめえっ！ それ以上されたら俺おかしくなっっちゃうっ！」

「ダメです。お仕置きですから、もう少し続けます。何だか楽しくなってきましたし」

「うひひひひひい！ そ、それ、お仕置きとちがうから！ 単に雨音の趣味だから！」

身をくねらせて逃れようとするが、あまねのふとももががっちり俺の胴体を挟み込んでいて、逃げられない！ なんてことだ。雨音は料理だけじゃなく総合格闘技でもトップクラスか！ まるで「

打撃技など花拳繡腿。サブミッションこそ王者の技よ！」と叫びながら敵を倒しまくる魔法の国の某プリンセス並みじゃないか！

「ひひひひひい！ 分かった！ 起きた！ もう起きました！ だから勘弁してえ！」

俺が必死に懇願すると、あまねは俺に馬乗りになったまま、量の腕を胸の前で組んだ。しっかし相変わらず平坦だな……。

「平坦な胸で悪かったですね！」

「心を読まれたツ!？」

「そんなに残念そうに胸を凝視されたら、誰にだってわかります！ せっかくオムレッツが綺麗に焼けたから、はやくみーくんに見てもらおうと思つて起こしに来たのに……」

「ごめんごめん。てか、泣かないでっ！ ああっ、空が急に暗くなつてきた！ 頼む、雨音、機嫌を直して！」

さつきまで陽の光が当たっていた東側のカーテンが、暗い色に染まる。ぽつぽつと雨が窓ガラスを叩く音が耳に響きはじめる。

「ああ！ 雨音のオムレッツが早くみたいなあっ！ でも馬乗りになられてちゃ、動きようがないよな！」

雨音が目尻に涙の玉を浮かべながら、桜の花びらのような唇を尖らせて睨み付けてくる。ああ、そんな拗ねた表情がまた綺麗なのだよ、そんなこと言ってる場合じゃない。ともかくにもこのマウントポジションから脱出しなければ。てか、考えて見りゃ、マウントポジションってエロい体勢だよな。うっ、スカートがめくれ上がつて、雨音の白い生足が！ 見えてはいけない辺りまで見えそうで見えないっ！ これは生殺しだ……。

「本当に、はやく見たいですか……?？」

「えっ?？」

「わたしのオムレッツ……早く見たいですか?？」

「そりゃもう！ 今すぐ！ 全力で！ 力一杯見たい！」

ふくれて唇を尖らせていた雨音の表情が、笑いをこらえているそれに少しずつ変わっていく。やがて我慢しきれなくなったのだろう。

雨音はぷつと吹き出した。同時に、俺の腰の上から降りてくれる。ようやく自由の身だ。

「仕方がないから赦してあげますっ！　すぐに着替えて顔を洗ってダイニングに来て下さい！　速くしないとせつかくのオムレツが冷めちゃいます」

「アイアイ、ママ！」

「どこの水兵さんですか……まったく。とにかくすぐに着替えを実行！」

「……………えーと」

「どうしました？」

「……………雨音のえっち。俺の肉体を生で見たいもんだからそんなところにずつと陣取ってるんだろ。筋肉フェチだからな、雨音は」

あ、一瞬でゆでだこみたいになった。頭から湯気でそっだな。

「とにかく！　着替えて顔あらってすぐダイニングへ！　わたしは下で待ってます！」

ボタンと乱暴に扉を閉めて、どこかかと階段を下りていく雨音の足音が響くなか、俺はとりあえず大お布団帝国から出国することにした。

東側の窓のカーテンには、明るい陽の光が戻っていた。

日曜の朝独特ののんびりした雰囲気を、俺は雨音と堪能していた。テレビでは子供向けのアニメが流れている。この次はスーパー戦隊シリーズの最新作だ。ひなたが日曜に早起きをする理由の番組である。雨音は俺の隣で、子供向けのアニメを、手に汗握りながら凝視していた。

ひなたとの約束の時間まではあと二時間ほどはある。

なら、まあこんな風にまったりと過ごすのも悪くはないだろう。

『ピンポン』

来るんじゃないかとは思っていたが、本当に来たよ。こんな時間にうちを尋ねてくるのなんてひなたに決まっている。玄関から鍵を開ける音が聞こえてくる。合鍵で玄関のドアを開けたひなたは、のほほんとしてテレビに見入っている俺たち（雨音は真剣そのものだが）の前に立ちふさがると、耳をつんざく大声でこう宣った。

「雨音ちゃん！ ボク、キミが何者か、思い出したよっ！」

あまねはぼかーんとした表情で、仁王立ちするひなたを見つめている。雨音が何者か思い出したって？ そりゃ一体どういうことだ？ 雨音が少し慌てた様子でひなたをじっと見つめる。そして信じられないといった表情で口を開いた。

「まさか……そんな。確かに『法術』の影響が弱まっています。一体どうして？」

「あまねちゃんは『雨の精霊』で、みーくんの願いを三つ叶えに来た。そうだよな？ ボク、先週の日曜日のこと、全部思い出した。

お昼を食べる前あたりからの記憶が曖昧だったんだけど、今朝みた夢で全てを思い出したんだよ！」

そして、ひなたは雨音の肩に両手を置いて言葉を続けた。

「最初は単なるデンパ系の頭の可哀想な女の子かと思ってたんだ。でも何故デンパ系扱いしたのか、どうしてみーくんの願いを叶えなきゃいけないのか、その辺がずっと思い出せなくて、魚の小骨みたいにのどに引っかかっている感じだったんだ。でも、今朝見た夢の中で雨音ちゃんが『わたしは雨の精霊です』って宣言したの！ それでボクの中で欠けてたパズルのピースがピタッとはまった感じがしたんだ！」

雨音は心底意外だったようで、大きな瞳をさらに丸くしてひなたを見つめている。自分の『法術』による暗示がそんなに簡単に破れるはずがない、そう思っているのだろう。俺だってビックリだ。何しろ雨音の使う『法術』ときたら、ありとあらゆる超常現象を可能にしてしまうスーパーパワーなんだから。

「ボクね、昨日ある一件があって、奇跡とかそういうものもあるの

かも知れないって、考えを改めたんだ。だから、雨音ちゃんのことを否定することもやめる。でも、まだ半分しか信じられないけどね。ボクの前で何か奇跡を起こしてくれたら、その時は全面降伏するよ。デンプア呼ばわりしたことも謝る」

「ひなたさん……。ありがとうございます。今はそれだけで十分です。奇跡かどうかはわかりませんが、わたしの『法術』は、今日のハイキングの最後にお見せすることになりますから」

雨音の言葉にコクリと頷くひなた。だが、ひなたの言葉はそれだけで終わらなかった。

「でもね、みーくんだけはボク絶対に譲る気は無いから！ 絶対の絶対、渡さないからね！」

何でいきなり俺の話になるんだ！ それも「絶対渡さない」って、思いつきり喧嘩売ってるじゃないか！ これじゃあ、本当に初日の再現になってしまふ。俺はハラハラする心を胸の内に隠しながら、二人の掛け合いを見守るしかなかった。

「上等ですっ！ でもそれはみーくんが決めることです。わたしにもひなたさんにも決定権はないんですよ？」

俺に雨音からのノールックパスが飛んできた！ 辛うじてトラップに成功。

さあどう展開すればいい？

「え、えーと……。それはとりあえずハイキングの後でということですね……。もう少し時間が必要かな、なんて……。てへっ」

『……甲斐性なし』

雨音とひなたが同時に全く同じセリフを、全く同じ目をして、俺に向かって投げつけてきた。

第四章

The Long Good Bye .

2 (後書き)

いかがでしたか？ よろしければご意見ご感想などお寄せ下さいませ。

第四章

The Long Good Bye .

3 (前書き)

第四章の3をお送りします。
それではさようぞ！

今年の梅雨は降水量が少ないのではないかと心配になるほど、綺麗な青空の下、俺たちは森林公園にやってきていた。ひなたは白のショートパンツにノースリーブのシャツ。手にはサンドウィッチの入ったバスケットと、透明なビニール傘。雨音はいつもの清楚な感じのワンピースに、つばの広い帽子。左手で白い日傘をさしている姿はやはりお嬢様っぽい。右手に持っている安っぽいビニール傘さえなければ、だけど。

俺はというと、スニーカーにカーゴパンツ、無地の黒いTシャツという至ってシンプルな服装だ。そして、左手には雨音の作った行楽弁当の包みを、右手にはやはり安っぽいビニール傘が握られている。

そう、これは約束の傘だ。あの日、無愛想な売店のおばちゃんが貸してくれた三本の傘。俺たちはそれを必ず返しに来るとおばちゃんに約束した。それも三人揃ってと。だから、こんな雨など絶対降らないだろう晴天の下、全く必要のないビニール傘を三人ともが持っているのだ。

というわけで、今俺たちは件の売店の前に立っている。店はなかなか繁盛していて、ソフトクリームを買い求める客が列を作っていた。そりゃそうだな、この日差しだもの。一〇分ほど待たせようか。客足が途絶え、おばちゃんが首をこきこき言わせながら店のまへの掃除をはじめた。返すなら今だ。

「あの、先週傘をお借りした者です。とても助かりました。ありがとうございました。」

俺がおばちゃんに声をかけると、おばちゃんはじろりと横目で俺たちを見て、ふんと鼻を鳴らした。

「こんなとこじゃなんだ。入っておいで。」

おばちゃんは店の中へと入っていく。ついていってよいものかと

迷っていると、店の入り口でおばちゃんが大声で怒鳴った。

「ついておいでって言うてるのが聞こえないのかい！」

俺たちは慌てておばちゃんに続いて店の中に入った。

そう広くない売店だが、バックヤードは休憩室になっており、畳敷きの部屋になっていた。真ん中にちゃぶ台が置いてあるだけの簡素な部屋だ。俺たちは勧められるままに靴を脱いで上がらせてもらう。おばちゃんが店の冷蔵庫から三本のサイダーを取り出すと、ちゃぶ台を囲んで座る俺たちの前に一本ずつ置いた。

「お代はいらないよ。そんなぼろ傘のために律儀に約束を守るような馬鹿が、まだこの街にはいるんだって教えてもらったんだ。そのサイダーは言ってみりゃ授業料だよ。だから、お代はいらない」

休憩室の前に置いてあったふるい傘立てには、俺たちの持つてきた三本の傘の他にも、古い傘が何本か立ててあった。きつと、駅にある善意の傘のような役目を果たしてるんだろう。

「ところで、その若さで二股をかけるとは言い読経してるね。坊主、いいかい？ 女の子は大切に扱うもんだ。二股なんてかけてないで、さつさとどっちか一人に決めるのが男の甲斐性の見せ所つてもものさね。世の中には浮気は男の甲斐性なんて言う輩がいるけどね、あんな風な大人になる前に、女の子の真つ当な扱い方を覚えな」

唐突におばちゃんが俺に説教をはじめた。いや、確かにこの状況を事情を知らない人が見れば、二股かけてるチャライ男が両手に花状態で歩いてる、と思われても仕方がないだらうけど。

「いや、二人ともまだ彼女とか付き合ってるとかそんなんじゃないんですよ……その、なんて説明したらいいか」

「ぐちゃぐちゃと五月蠅いねえ！ 男ならシャンとしな！ 大体二人ともあんたにや勿体ないべっぴんさんだ。なにかこの二人に不満でもあるのかい？」

うーん、埒があかないな。俺はキンキンに冷えたサイダーのキャップを外すと、一口飲み込んだ。のどを駆け抜ける爽快感が、暑さを忘れさせてくれる。しゅわしゅわと音を立てて小さな泡がボトル

の中で踊るのを、雨音は物珍しそうに眺めていた。

「なんだい、お嬢ちゃんはサイダーを見たことがないのかい？」

「はい……。話には聞いていましたが、実物を見るのは初めてですっ！」

「そうかいそうかい。遠慮せずに飲んでごらん。きつとビックリする味だよ？」

「はい、いただきます。……？　　っ！　く、口が、のどがしゅわしゅわしますっ！」

「そうだろそうだろ。それが炭酸水の味さ。美味しいかい？」

「口の中がちくちく痛いですけど、これはわたしにとって新しい味覚の世界ですっ！」

「大げさだねえ。ほら、そっちのお嬢ちゃんも遠慮してないで飲みな」

雨音の大げさなりアクションをみてにやけていたひなたに、おばちゃんが声をかける。

「え？　ボクですか？　それじゃあその、いただきます。サイダーなんて何年ぶりだろ」

ひなたは以前「サイダーって、田舎のおばあちゃんの家年味なんだよね」と言っていた。その意見には俺も多いに賛同する。サイダーはもう少し後の時期、夏休みで田舎のおじいちゃんやおばあちゃんの家遊びに行った時に出してもらった飲み物というイメージなのだ。

「んくっ、んくっ……ぶはっ！　やっぱサイダーは懐かしい味だよね！」

「そんな若さで何が『懐かしい』だい」

「いやいや、この味が若者にもある小さい頃の思い出を呼び覚ませるんですよ。ノスタルジーですよノスタルジー。ね、みーくん」

「確かにそうかもしれないな。普段はコーラとかばかり飲んでるから、サイダーが妙に新鮮で、それでいて懐かしい味な気がする」

「そんなもんかねえ。確かに店に置いてても、コーラやウーロン茶

に比べたら売れ行きはよくないけどねえ」

俺たちはおばちゃんの奢りのサイダーを飲み終えると、いとまを告げることにした。お客さんからは見えない位置だけど、商売の邪魔になるのも悪い。

俺は店の前まで見送りに出てくれたおばちゃんに、改めて先週の礼をした。

「本当に助かったんです。ありがとうございました」

「ふん、そんな傘なんてどこかに放っておけばよかったものを」

「おばさま、照れてらっしゃるんですね」

雨音が柔らかく微笑みながら指摘する。凶星だったのだろうか。おばちゃんは急に怒り出した。

「うるさい！ とつと店の前からでておいき！」

掃除用のほうきを振り上げて俺たちを睨み付けるおばちゃん。俺たちは這々の体で逃げ出した。店から少し離れたところで、後から声がした。

「今度来るときは、また三人一緒においで！ 飲み物ぐらいは出してあげるよ！」

さつき鬼のような形相で俺たちを追い散らしたおばちゃんが、不器用な笑顔を浮かべながら大きく手を振っていた。俺は、また三人でこの店を訪れることが出来るだろうか。出来るとしたら、それはいったいいつの事になるだろうかと思いを巡らせていた。

遊歩道を歩き、ヤマユリやハナシヨウブ、紫陽花などの花をバツクにひなたと雨音の写真を撮る。先週は出来なかったことだ。え？ ケータイにカメラくらいいついてるだろうって？ 俺は写真にはちよつとこだわりがあるんだ。ケータイについてるレベルのカメラじゃ、俺の要求に応えることは出来ない。デジタル一眼レフの威力を知ったら、手放せなくなるぞ？

昨日来たときに、雨音の姿は何枚も何枚も撮っていたから、無意識のうちにはひなたが中心になるように構図をとる。雨音とは違った健康的な美しさがひなたにはある。ああ、こんなことを思ってるよーじゃ、売店のおばちゃんに『二股かけるなんていい度胸だ』なんて言われても仕方がないのかもしれないな。でも、俺はもう覚悟を決めている。最後の願いはあれしかない。俺たちが永遠に繋がっていられるための願い事だ。

「みーくん！ そろそろお昼にしようよ！ 今日はレジャーシート持ってきてるから、こんどは、あの芝生広場で！ 雨音ちゃんもお弁当作って来てくれたんでしょ？」

俺は無言で自分が持っている風呂敷包みをひょいと掲げて見せた。たっぷり三人前。前回と同じ量だ。

遊歩道を進んでいくと、開けた平らな土地に一面の芝生が目眩しい広場が見えてきた。この前は雨音が大雨を降らせてしまい、とてもじゃないけど横になれる状態じゃなかったけど、今日は朝からいい天気で、こんな日に芝生で横になったらきつととても気持ちいいに違いない。「んじゃ、この辺でレジャーシート広げるよー！ みーくん、そっち持って！」

「よし。いいぞ」

「そっちももう少し引つ張って。オーケー、オーケー。良い感じで敷けたね。風が強いから荷物を重しにしよう」

さっそく靴を脱いでレジャーシートの上に陣取るひなた。雨音もそれに倣って靴を脱いでいる。俺はハイカットのバスケットシューズなので、脱ぐと後で履くときが大変だから、レジャーシートの端に腰掛け、足を芝生の上に投げ出した。

「さて、それではボクのサンドウィッチから！ ちゃんと味見もしたし、こんどは大丈夫だと思うよ！」

得意げに言いながら、ひなたはバスケットの蓋を開いた。中には綺麗に詰め込まれたサンドウィッチが並んでいる。自信を持って「今度は大丈夫」と言うだけあって、見た目も先週のサンドウィッチ

とは比べものにならないほど美しい。

「うわあ！　すごく美味しそうですっ！」

「遠慮しないでどんどん食べて！　みーくんもどうぞ。大量破壊兵器ですけど」

「もうそんなことは言わないってば。じゃあいただきます」

シンプルなサンドウィッチだけど、丁寧に作ってある。パンがレタスや野菜の水分でふにやふにやになる事もなく、野菜の新鮮さも保たれている。ふとひなたの指を見ると、何力所かに絆創膏が貼ってあった。痛い思いが経験値になる。どんなことでもそうなんだろうけど、何も代償を支払わずに代価だけを受け取ることなどできないのだ。

「わたしのお弁当も食べてくださいね。紙皿と割り箸も持ってきてます。お茶と紙コップもありますよ？」

「持ってきたのは俺だけだね」

「うわ、みーくんそれ言う？　すごくカッコ悪いよ？」

「うっくん、わたしもいまの発言はちょっと男性としてどうかと……」

俺を責めるときは何でこの二人はこんなに息があったコンビブレーを見せてくれるんだろう。俺はがっくりと肩をおとしながら雨音の弁当の包みを開いた。中身は先週と同じ。だし巻き卵にミニハンバーグ、タコさんウインナーにほうれん草のお浸し等々。ご飯は小さなたわらお握りにしてある。

「うわ……。やつぱ雨音ちゃんすごいよ。ボク、まだこんなに料理のレパートリーないもん」

雨音の料理の数々に圧倒されたのか、言葉を失うひなた。いや、ひなただって大したものなんだぞ？　あの食材を食品以外の何かに加工していた頃に比べたら格段の進歩だ。

さっきの売店のおばちゃんの話やら、学校での出来事やら、話題に事欠くことはない。それが女の子の凄いところでもある。放って置いたらいつまで喋ってるんだらう。一度観察してみたい気もする。

俺たちは弁当を食べ終わると、「やっぱり芝生には直接寝転びたいよね」というひなたの意見を採用して、レジャーシートを畳んで三人ならんで寝転ぶ。

ボクが真ん中、右に雨音、左にはひなた。俺を中心にした川の字だ。

「わたしがひなたさんに『法術』を使って暗示をかけたのは、先週あそのこのテーブル席で話をしているときだったんです。みーくんが眠っている間に打ち解ける切っ掛けができたから……。それならわたしは何者なのかは忘れてもらったほうが仲良く出来ると思っています……。でも、それは間違いでした。ひなたさん、ごめんなさい」

「ん？ ボクは全然気にしてないよ。ボクがもし雨音ちゃんの立場だったら、きつと同じことをしてたと思うしね」

「怒らないんですか？」

「全然。雨音ちゃんからちゃんと説明してもらったからね。なら根に持つ必要もないでしょ。終わったとき。でも、みーくんは譲らないよ。それとこれとは別のはなしだからね！」

三人の間に短い沈黙が落ちる。ひなたと雨音の感情の纏れは、どうやら二人だけで解決してしまったようだ。あとは俺の願い事を、雨音に叶えてもらうだけ。それで全ては終わるはずだ。

俺は芝生の上に寝転びながら目の前を埋め尽くす圧倒的な蒼穹を見ながら呟いた。

「あそこに、雨音は帰って行くんだな……。あの空に」

「はい。本来わたしがいるべき所はそこですから」

「でもボクはまだ信じたわけじゃないからね！ この目で見るまでは信じない」

やっぱりひなたはひなただ。あんな目に遭っているながら、それでも常識人であろうとし続ける。自分自身が超常現象の中心にいたにもかかわらず、精霊の『法術』のことも信じようとしなない。いや、考えようによつては当たり前なんじゃないか？ そんな異常な現実を、はいそうですかと受け入れられる方がどうかしているのかもしれない。

れない。要するに、俺みたいなヤツはどうかしているんだ。

「ひなたさん、証拠になるかどうかは分かりませんが、これからわたしがちよつとした『法術』を使います。それは今空っぽに近いわたしの燃料タンクに燃料を補給するような作業です。その間、ひなたさんはわたしの周囲で異変が起きるのを目撃するはずです。それを見て、本当かどうかの判断の材料にして下さい。みーくん」

俺には雨音がやろうとしていることが分かっていた。マナを集めるのだ。

「昨日の場所にもう一度案内して下さい。あそこは、マナの宝庫です」

俺は黙って頷くと、勢いをつけて芝生の絨毯から立ち上がった。大丈夫、場所はちゃんと覚えていて。『あれ』を見たら、さすがのひなたも持説を曲げるに違いない。それほどマナを集めているときの雨音は、神々しく見えるのだ。

遊歩道から深い森に分け入ってしばらく歩いた所が、雨音の言う『マナの宝庫』だ。道も無いので散策する人も全くいない。遊歩道からも見えないので、下手をすると迷子になりかねないところだが、俺は昨日きたときにいくつかの目印を決めてあった。特徴的な形の枝、足下にある岩の形、そして、木々を通して見える太陽の位置。時間が分かれば方位を割り出せる。

雨音はあの大きな杉の老木の前に立って、静かに目を閉じていた。

「こんな山の中に来て、一体何を始めるの、雨音ちゃん？」

「わたしの『法術』の源であるマナを集めます。マナは自然の多いところに多く漂っていますし、元気のいい樹木はそれ自体がマナを放出しているんです。実を言うと、わたしの身体を維持しているマナはあと数分で切れてしまします。ほんと、ギリギリなんです。そこで、森の木々からマナを分けてもらいます。わたしから五メートル

ルくらい離れていて下さい。万一『法術』が暴走したときに巻き添えにならないように」

雨音は俺とひなたが安全な距離まで下がるのを確かめてから、杉の老木に手を伸ばした。

「雨音が大きな『法術』を使うときにいつも口ずさむ呪文の詠唱が始まった。何語なのかも分からない音の連鎖。それが音楽のような旋律を伴って雨音の口から紡ぎ出されていく。詠唱が進むに従って雨音の周囲で異変が起き始める。空気が光を帯び始めたのだ。雨音が天に向かって大きく両腕を開く。光の粒子が雨音の両腕の間で渦を作り出す。渦は周囲に漂っている光を皿に引き寄せ、吸い込んでいく。」

「こ、これがあまねちゃんの『法術』なの？」

「こんなのはまだ序の口だ。俺はもつとんでもない『法術』の使い方を見てきた！」

「これで序の口って……こんな映像で見たなら合成だっていえるけど、これじゃあ信じるしかないじゃない！」

「なら信じてくれ。雨音は、本当に雨の精霊だって！」

「うっん、ボクはまだ信じない。雨音ちゃんがみーくんの願いをどんな風に叶えるか、それを見てからじゃないと信じられない！」

光の洪水は俺たちをも飲み込んでいく。腕や顔を光が撫でるとき、何とも言えない暖かみを感じる。これがマナののだろうか。

やがて、光の粒子の濃度が少しずつ薄くなってきた。雨音の前で渦巻いていた光も、今はソフトボールくらいの大きさの光の球体になっっている。雨音はその球体を胸に抱くと、最後の詠唱を終えた。

一瞬、真っ白い光が目の前で爆ぜ、俺は思わず固く目を閉じた。それでも網膜にはその光の爆発の余韻が残像となって残っている。

「終わりました。雨音、フルチャージバージョンですよ？」

いつもと変わらない白のワンピースにつばの広いリボン付きの帽子。心持ち肌の手やがよくなった程度で、見た目はほとんど変化の

ないいつもの雨音だ。だが、確かに雨音は変わっていた。靈感とかそんなモノがなくても、絶対的な『力』の奔流を、雨音の内から感じるのだ。それを感じていたのはひなたも同様のようで、啞然とした表情でただただ雨音を見つめるだけだった。全身が微かに震えている。

「ほ、本当に雨音ちゃん？ なにこれ、なぎなたの高級者の威圧感なんかよりずっと凄い……」

「怖がらないで下さい。もう少ししたら落ち着きますから。今のわたしは言ってしまうれば暴れ馬をなだめているような状態なんです。そう、いい子ね……ゆつくりおやすみなさい……」

雨音は両腕を胸の前で交差させて、何か大切なものを抱いているかのような姿で立ち続けている。いったいそのまま何分が過ぎただろうか。ふと雨音が閉じていた瞳を開いた。

「もう大丈夫。マナの補給は完了です。時間もちょうどよさそうですし」

雨音は雨上がりの紫陽花のような笑顔を浮かべて俺とひなたに言った。

「そろそろ『大切なお話』に入りましょう。わたしたち三人が、お互いに話さなければならぬ、大切なお話に」

第四章

The Long Good Bye .

3 (後書き)

いかがでしたか？ もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さいませ。

第四章

The Long Good Bye .

4 (前書き)

第四章の4をお送りします。
それではごうぞ！

閉園時間の迫る森林公園の展望広場には、すでに人が居なくなっていた。閉園時間までにゲートに着こうと思つたら、足の丈夫な若者だとしてもそろそろここを離れなければならない。自然と人払いが出る、というわけだ。大事な話をするのには丁度いい。

周囲の空気は西に傾いだ太陽に照らされて、透き通るような金色の世界を作り出していた。この美しい世界で、俺たちは『大切な話をしなければならぬ』それは少し残酷な気もした。

俺たちはジャンケンで互いの話をする順番を決めた。一番最初に負けた人が最初に話す。次に負けた人が二番目に、最後まで勝ち残った者が最後に、それぞれの『大切な話』をする、というルールだ。まず三人一緒にジャンケンする。俺とひなたがグーを出し、雨音がチヨキを出した。雨音はチヨキの形にした指をじっと見たあと、それを俺たちに向けてVサインに変えて微笑んだ。

続いてひなたと俺の勝負だ。ひなたと俺は、幼い頃から何度となくジャンケンをしてきている。相手の癖や思考パターンも当然織り込み済みだ。一回目、パーであいこ。二回目、またパーであいこ。三回目。今度はチヨキであいこ。四回目にして決着がついた。俺がグーを出し、ひなたがチヨキを出したのだ。これで『大切な話』をする順番は決まった。その前に一つだけ、俺は雨音とひなたを前に宣言しておくことがあった。

「雨音、俺の『最後の願い事』だけど……決まったから」
ぴくりと肩を震わせた雨音だが、表情は柔らかな笑みのままコクリと頷いてくれた。

さて、まずは雨音の『大切な話』が始まる。俺とひなたはじつと雨音の大きくて深い色の澄んだ瞳を見つめた。

「まず最初に、わたしからひなたさんに伝えておかなきゃいけないことがあります。わたしは昨日。あなたを轢いた路線バスに乗り合

わせていました。……みーくんも一緒に」

びくつと身体を震わせるひなた。だが、まるで雨音のその言葉を予期していたかのように平然とした口調で応じた。

「知ってたよ。中等部の後輩たちが雨音ちゃんとみーくんがバスから降りてきて、一瞬でどこかへ消えちゃったって騒いでたから。あれは、雨音ちゃんが『法術』を使ったからなんだね？」

柔らかな笑みの中にピンと張り詰めた緊張感を秘めて、雨音がひなたの言葉に頷いた。

「わたしは昨日、切れかけていたマナを補充するために、みーくんと一緒に森林公園に行きました。わたしの身体を気遣ってくれたみーくんは、往復ともにバスを使ってくれました」

「その行きのバスの中で、みーくんが雨音ちゃんに『綺麗だ』を連発したことも知ってる。ボクの後輩たちが乗り合わせてたんだ」

ボクは思わず地面に穴を掘って自分で自分を埋めてしまいたい衝動に駆られた。あの女子中学生集団、ひなたの後輩だったのか。そういうえばなぎなた袋を持っていたような気もする。

「そうですか、偶然って怖いですね。とにかく、わたしとみーくんは、あなたを轢いたバスから降りて、あなたの状態を確かめました。……救急車を待っていたら、とても助からない状態でした。一刻を争う事態だと判断したわたしは、一時的に時間の流れを止めて、みーくんと一緒にあなたをバスの下から助け出して、中央分離帯の待合スペースに運びました。そこでわたしはあなたの身体の組織の再生、というより再構築に近いことをやりました。……時間の流れを止めるだけでも大量のマナを消費する上に、ひなたさんの身体という小宇宙のなかの破損した組織の再生を同時に行うことは、わたしの保有してるマナの量から考えてもギリギリの賭けに近かったんです。結果、わたしはひなたさんの身体を再構築して出血で失った血液を再生して、もう大丈夫という状態であの場を去り、少し離れたところで時間の流れを元に戻すしかなかったんです。周囲で見っていた人たちの記憶を消す余裕もなかった。あなたの後輩さんたちにわ

たしとみーくんが一瞬で消えたように見えたのは、こういう理由です」

雨音はそこまで一気に話し終わると、少し息をついた。

「でも、大切なのはそんなことじゃ無いんです。わたしは、分不相応なことをしてしまった。もしかしたら、あなたはあそこで死ぬことが運命づけられていたのかもしれない。人の生き死にを左右するなんて、わたしたちには本来許されていません。だから、本当はあの時わたしはひなたさんを見殺しにするべきだった。でも出来なかつたんです……。みーくんだけじゃなくて、わたしにとっても、ひなたさんは特別な存在になつていたから。だから禁を犯して本来やつてはならないことを、あなたの命を救うということをしてしまった。わたしは自分のわがままであなたを救ってしまった。とっても矛盾してますよね？ わたしからひなたさんへの大切なお話はこれでおしまいです。長々と話してしまつてすみません」

雨音は静かに頭を下げた。再び顔をあげたとき、雨音はそれまで胸につかえていたものが一気に取れたように、晴れやかな笑みを浮かべていた。

「それじゃあ、次はボクだね」

ひなたが決意を秘めた目で俺たちを見やる。果たしてひなたは俺たちに何を語るといふのか。

「今朝も話したけどさ、実はボク、雨音ちゃん存在に結構前から疑問を感じてたんだ。ボクってほら、超が付く現実主義者で、神も仏もあるものか！ 超常現象？ 論破してやる、ドンと来い！ っ てな感じだったんだよ。そのはずなのになぜか雨音ちゃんが『デンプナなこと』を言つても、否定しようとも思わなかった。こんなのおかしい。ボクらしくないつてずっと感じてたんだ。その不快感に拍車をかけたのが、みーちゃんと雨音ちゃんが一つ屋根の下でくらすてるつていう事実。要するに嫉妬だよ。ボクはいつたいどこから来た何者なのかも分からない雨音ちゃんに、みーくんを取られるんじゃないかってすごく怖かった。でもね、そんな風に嫉妬に狂った頭

の片隅で『雨音ちゃんなら仕方がない、赦せる』とも思ってたんだ。昨日の事故の時までは」

雨音の表情が硬いものに変わる。考えを整理するようにしばらく沈黙していたひなただったが、ぐっと天を仰ぐと言葉を続けた。

「事故のあと、病院に付き添ってくれた後輩がね、確かにみーくと雨音ちゃんが、バスに轢かれたボクのことを確認してたんだけど、次の瞬間無傷のボクが中央分離帯にいて、みーくと雨音ちゃんの姿が消えていたっていうんだ。それも一人だけじゃない。五人いた後輩が全員だよ。ほんと、ボクたち全員の気がおかしくなったんじゃないかって疑ったよ。でも、あれは雨音ちゃんがわたしを救うためにやってくれたことなんだね……。雨音ちゃん、ありがとう。あなたはボクの命の恩人だ。雨音ちゃんがボクにかけた暗示が力を失っても、ボクは雨音ちゃんを嫌いになんてなれないし、すごくいい子だって思ってる。でもね、みーくんのことだけは絶対に譲れない。誰にも渡さない！ たとえ雨音ちゃんにでも！ そう思うのと同時に、雨音ちゃんならみーくんを任せてもいいかな、なんて思っちゃう。ほんと、ボクも矛盾だらけだ」

話し終えたひなたは、目にうつすらと涙をためていた。でも、その表情は晴れやかでとても綺麗な笑顔に見えた。

そして最後は俺の番だ。まぶたを閉じていても、雨音とひなたの視線が俺に集中するのを感じる。俺は大きく深呼吸すると、雨音に向かつて語りかけた。

「雨音、まずは君との出会いに感謝したい。登場の仕方こそ、屋根をぶち破ってしかも気絶してるなんていうもので、きっと俺は悪夢を見てるんだと思っていたんだ。でも、君は俺の目の前で奇跡を起こして見せてくれた。自分でぶち抜いた屋根と天井を一瞬で元通りに修復するっていう奇跡を。あんなものを見せられたら、そりゃ納

得しないわけにはいかないよな。どんなに素っ頓狂な登場の仕方されても」

俺はそこで一旦言葉を切った。あれだけ何を言おうかと考えていたのに、いざ話そうとすると言葉が出てこない。まあいい、自分の素直な想いをそのまま言葉にすればいい。俺は、話を再開した。

「正直言つて、最初は厄介名荷物を背負い込んだと思っただけで俺がこんな目に遭わなきゃいけないだつて神様を呪つたりもした。だから、さつさと適当な願い事をして厄介払いをしようとも本気で考えてたんだ。あの『俺の目の前から消えてくれ』っていうのは、あの時本当に願ったことなんだ。ひどい？ うん、そうだねでも、いきなり空から女の子が降ってきて、自分は雨の精霊だ、三つだけ願いを叶えてやる。さあ願いを言え。こんな風に言われたら誰だつて似たような行動を取るもんだと思うよ。でもね。雨音と一緒に過ごすうちに、俺は雨音にだんだん惹かれていく自分に気づいたんだ。世界で一番好きかもしれない。それほどに惹かれていった。今でもその気持ちは変わらない。俺は雨音が大好きだ」

雨音が胸の前で組んでいた手にぎゅうつと力を入れるのが分かる。俯いた雨音の表情は何えないが、髪の毛の中からぴよこつと飛び出しているちいさな耳が真っ赤に染まっていた。ひなたは、同じように下を向いていたが、それ以上話を聞きたくない、もうやめて！と言わんばかりの表情だった。

「ここまでは全部俺の本心を言ってきた。そしてここからも全部俺の本心だ。昨日のバスの事故。ひなたが轢かれて、瀕死の状態だと雨音に告げられた時、俺はひなたがいない人生なんて考えられない、そんなの絶対にイヤだと思っただ。バスの下の無残なひなたをこの目で見たとき、その恐怖は現実が変わろうとしていた。そしてやっと気づいたんだ。ひなた、お前も俺にとつてやはり特別な存在なんだ。俺は昨日の事故で、それを痛感した。勝手なもんだろ？ あの売店のおばちゃんが言うとおりだよ。俺は雨音もひなたも手放したくない。こんな矛盾だらけの男、ろくな死に方しないよな」

俺たちは三人が三人とも、自分の内にある矛盾と泥だらけになりながら格闘してたんだ。雨音のもつ矛盾。ひなたの持つ矛盾。そして俺の持つ矛盾。矛盾だらけの三人が出会い、共に一週間をすごした。それぞれが心の中に葛藤を抱え、苦しんだ。もう十分だろう？ 神様がいるとしたら、この哀れな三匹の迷える子羊に、少しくらい救いの手を伸ばしてくれてもいいんじゃないか？

だが、神様などあてにしていたら、自分の欲しい物はどんどん逃げていく。気づいた時には手遅れになっていて、あとで死ぬほど後悔することになるんだ。俺はそんなのはイヤだ。

だから、雨音に最後の願い事を伝えなくてはならない。

「とまあ、俺からの話はここまでなんだけど、俺から雨音にはもう一つ、とても大切な話があるんだ。聞いてくれるかな？」

下を向いていた雨音が、はっとした表情で顔をあげる。顔をあげた雨音の瞳には実に複雑そうな光が滲んでいた。俺の願い事を聞きたい。でも聞きたくない。そんなところだろうか？ ひなたも同時に俺の目を見つめてきた。俺が『最後の願い事』を伝える気になったのを感じ取ったのだろう。

雨音はしばらく逡巡したあと、コクリと頷いた。

「よかった。聞いてくれなかったら契約違反で訴えなきゃならないところだから」

俺は、展望デッキにある三人掛けのベンチの右端に座った。二人にも座るように視線で促す。二人は『何故』という表情でベンチに近づいてきた。

「真ん中に雨音が座って。ひなたは左側に。そう、それでいい。これから、俺は雨音に最後の願い事をします」

硬い唾を飲み込む。歯をぎりりと食いしぼる。言わなければならぬ。俺たち三人が一緒にすごしたこの一週間を無駄にしないためには、絶対に言わなくてはならない。膝の上に置いた手を固く握りしめる。ふと。その握られた左拳のうえに柔らかな絹のような感触が降りてきた。

雨音の手が、俺の拳を包み込んでいた。

それだけで何故か心が落ち着く。大丈夫、俺にはちゃんと伝えられる。

「雨音への最後の願い事だ。俺とひなたの友達になってほしい！ごく普通の友達だ！一緒に学校へ行ったり、一緒に学校をサボったり、一緒に遊びにいったり、一緒に勉強を教え合ったり、馬鹿なこととして大笑いしたり……時には喧嘩もしたりして、でもまた仲直りする。そんなごく当たり前の友達になってほしいんだ！このまま俺たちの目の前から消えてしまっなんて、そんな悲しい事言わないでくれ！雨音！これが俺の最後の願い事だ！叶えてくれるよなっ!？」

俺はぎゅっと目をつぶったままで雨音からの返答をまつた。一秒が永遠の長さを感じられるほど、俺は彼女のこたえを待ち焦がれた。固く握りしめた拳に添えられた雨音の手の温もりだけが、雨音がまだそこにいるということ、目を閉じた俺に教えてくれている。

ふっと、左拳に添えられていた雨音の温もりが遠ざかった。

「分かりました。わたしは、今この時から、みーくんとひなたさんの友達です。本当の、友達です」

雨音は静かに、優しく応えてくれた。その声はあまりに静かで、優しく、透き通っているかのようにだった。俺はそれまで怖くて見ることが出来なかった左隣の雨音の姿を、自分の意志で見た。そこに、雨音は確かにいた。右手で涙をぬぐい、金色の黄昏の中で透明な涙をこぼす、美しい俺たちの友達。

左手はひなたとしっかり繋いでるようだ。俺の右拳から手を離れたのは涙をぬぐう為だったのか。雨音の手が離れたとき、俺はつきり願いを聞けないといわれるとばかり思っていた。だが、雨音は確かに俺たちの友達になってくれると、そう言った。

「今日からわたしは二人の友達です。でも叶えられる願いはあと一つだけ。だから……わたしは地上には残れません。わたしはあの空に帰ります」

俺は再びぎゅっと目をつぶり、両の拳が真っ白になるほど強く握った。その左拳に柔らかな感触が再び降りてくる。俺は拳を解き、雨音のその細い指に自分の指を絡めた。そうしていれば、雨音は空へ帰れないかもしれない。そんな幼稚な発想が頭をよぎった。

だが、雨音の細い指の感触は、少しずつその存在感を薄いものにしていった。

雨音が消えようとしている。俺の最後の願いを叶えて。

「大丈夫ですよ。わたしは雨の精霊です。わたしはこの世に遍在する者。あなたの周りで雨が降るとき、わたしはあなたの隣にいます。もう永遠にあえないというわけじゃないんです。たとえ感じられなくなっても、わたしはみーくとひなたさんの隣にいるんです」

雨音の聲がだんだんと遠いものになっていく。握る手の感触ももはや風前の灯火のように頼りない。俺は目を固くつぶったままでいたが、ふと思いついて雨音のいる左側を見た。

雨音は金色の光になっていた。いや、金色に見えるのはきつと夕日のせいだ。透き通るように白かった肌は、文字通り透き通りかけてしまっている。それでも、まだ雨音は自分の意志でこの場に留まっている。俺にはそう思えた。雨音は何を俺に伝えたいのだろう。

「みーくん、わたしから一つだけ、お願いをしてもいいですか？」
金色に透き通った雨音が、柔らかな笑顔を浮かべて言う。俺は黙ってこくりと頷いた。

「あなたの名前を教えてください。友達なのにあだ名しか知らないんじゃない、困るでしょう？」

「……広海。広い海って書いて、ひろみだ」

「広海くん……いい名前ですね。でも、みーくんっていうのもとても可愛いです」

雨音の聲はますます遠く。かすかなものになっていく。待つてくれ、消えないで、俺たちを置いて消えないでくれ！

「雨は大地に降り注ぎ、やがて大きな川となってさらに広い海へと

流れていきます。雨の日があれば、その反対に陽の光に溢れた晴れの日もあります。わたしたちが友達になることは、きつと、ずつとずつと前から決められていたことかもしれませんね。だからこそ、わたしはみーくんの元に遣わされたんだと思います」

その時、頬にぼつりと冷たい物が当たった。

「広海くん、一二年前の約束、守ってくれましたね……。」

一二年前？ 俺の脳裏に幼い頃の記憶がフラッシュバックする。俺は小さい頃に、女の子とあの杉の老木のところに行っている！

そうだ。白いワンピースを着て、肩より少し下まで黒髪を伸ばした女の子だ。その女の子の面影と、雨音の顔が重なる。

「雨音……、なんで初めから教えてくれなかつたんだ」

「それは、あなたが自分で思い出してくれないと意味がない事だからです。でも、忘れていてもちゃんと約束は守ってくれました。わたしにはそれで十分なんです」

きつと、雨音の『法術』で消されていたであろう記憶が、まるで雪が融けるように、氷が溶けるように、意識の中で解凍されていく。最後の最後でなんてことだ。もつと早くにこのことに気づいていたら、俺たちはもつと早くに友達になれていたのに。そう、願い事なんて関係為しに、ただ単に友達になろうという一言で。

「待ってくれ、雨音。せつかく友達になれたのに、このまま消えるなんて、そんなこと言わないでくれ！ 一二年前の約束だつてちゃんと果たせていない。友達と一緒に遊ぶものだろう？」

「広海くんは、ちゃんと約束を守ってくれました。それに、いつかまたきつと逢う日がやってきます。私には分かるんです。それはもしかしたらずつと先の話かもしれない。でも必ず逢える、と。だから、今日はさよならです。またいつか……いつか逢いましょう。わたしの大切なお友達……広海くん、ひなたさん」

ほとんど透明に近くまで透けていた雨音は最後に不思議な旋律を

伴った言葉を詠唱して、光の粒となって俺たちの前から姿を消した。まるでシャボン玉が弾けて、きらきらと光るように。

気づいたら俺の左手とひなたの右手が繋がれている。雨音の『法術』に違いない。

最後に『これからも仲良くして下さいね』とでも言いたかったのだろう。

空は綺麗に晴れ上がっているのに、太陽は西に傾いているけれど、まだ燦々と輝いているのに、小さな雨粒が、ぱらぱら、ぱらぱらと俺たちの周りに降り注ぐ。突然の天気雨だった。これは雨音が俺たちにあいさつをしているのだ。俺はそう直感した。雨音らしいじゃないか。

「行っちゃったね……」

「うん。最後にきっちり仕事をしていったよな。俺の願いは叶ってる」

「信じられないけど本当に雨の精霊だったのかあ……。次にあったらデンパ女呼ばわりしてごめんって謝らなきゃ」

「うん……そうだね。それがいい。雨音の事だからきつと赦してくれるさ」

雨はまだ降っている。

陽の光を反射しながら、ぱらぱら、きらきらと。

それはまるで雨音がふるさとへ帰っていく足音のようにだんだんと弱くなっていく。

雨音は俺とひなたにさよならの雨を降らせてくれた。

この黄昏時の天気雨という雨音からのプレゼントは、どんな宝石だって敵わない。

値段だつてつけようがない。

別れの雨は少しずつ弱くなっていく。

雨音の足音が遠ざかっていく。

「またね、ボクの大切なお友達……雨音ちゃん」

「いつかまた、今度は屋根を壊さずにあらわれて欲しいな」

「みーくん、涙流しながら言ってもカツコつかないぞ？」

「なっ！ これは、こっ……心が汗をかいてるだけだ！」

「ふっふん」

「なんだそのニヤけた顔は？」

「なんでしようねえ。にやにや」

ふと気づくと、雨は完全に上がっていた。

「雨、あがったね」

「うん」

雨音の足音はもう聞こえない。

この大空のどこかにいて、雨を司る精霊の眷属。

その一人との一週間に渡る生活は、楽しいことばかりではなかった。

辛い想いもした。それでも無駄なことではなかった。

なぜなら、俺たちは新しい本当の友達を得られたのだから。

第四章

The Long Good Bye .

4 (後書き)

いかがでしたか？
もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さいませ。

エピソード

ほんとうのともだち

(前書き)

これが最後の更新になります。長い間お付き合い下さりましてありがとうございます。なお、本作は11月末日まで公開させていた
だいた後、改稿版を新人賞に投降させていただきます。

エピローグ ほんとうのともだち

雨音が自分のふるさと、つまり空の上に帰ってからもう四ヶ月が過ぎた。

俺とひなたの間柄には、少しだけ変化が見られた。というのも、雨音がひなたに密かに書き残していた手紙が後日配達されて、そこで如何に俺がひなたの死を怖れ、ひなたが助かった時にどれだけ安堵の涙を流したか、ということが事細かく書かれていたのだ。消印は日曜日のもだった。休日でも郵便物の集配業務は止まってないから、多分夜中の内に手紙にしたため、ポストに放り込んだのだろう。

とにかく、その手紙のせい、ひなたは妙に積極的になった。

「これまではお姉さん気取りだったけど、今では女房気取りだな」
これが級友一同の統一見解だそう。要するに、尻に敷かれてるって言いたいらしい。

尻に敷かれてるかどうかはまあ置いて、ひなたと俺の関係はいたってプラトニックなものである。誓って言うが、その……なんだ……高校生にあるまじき行為には及んでいないのだ。え？ 甲斐性なし？ 放って置いてくれ。

「はい、みーくん、今日のお弁当」

「ありがとう。しかし、以前のひなたとは大違いだな、やっぱり」
「うるさいなあ。ちゃんと料理出来るようになったんだから、もうねちねち言わないでよお」

「お？ またみーとひなたんが夫婦げんかしてるぜ」

「またかよ。よく飽きないもんだな」

「だ か ら ！ 俺たちは夫婦じゃないってば！」

「似たようなもんじゃないか。家も隣同士だし、行き来は自由だろ？」

「そつだそつだ。屋根伝いに夜這いに行ってるに違いない。みーはむつつりスケベだからな」

「誰がむつつりか　　ッ！」

「そんなの、みーくに決まってるじゃない」

「ひ、ひなたさんッ!？」

「まあ夜這いはないけど、わたししょっちゅう着替え覗かれて」
「それはひなたがカーテン開けっ放しで服脱ぐからだろ！俺が気を利かせて自分の部屋のカーテン閉めてやってるってのに、その扱いは非道くない!？」

とまあ、ひなたとの間柄は微妙に変化してる程度だ。ただ、時々並んで歩いていて手を繋いだりはしている。進展っていったってその程度だ。え？期待はずれだって？エロい展開を期待してた奴らにはご愁傷様というしかないな。

そういえば、雨音はどうやら空に帰るときに、学校関係者の記憶やら何やらを一切消していったようだ。雨音によく言い寄ってたヤツですら、雨音のことを覚えているかと尋ねたら「あまね？誰だそれ。どこか別のクラスの娘か？可愛いか？よかつたら紹介してくれ」ときたもんだ。たとえ雨音が地上に残っていたとしても、お前にだけは紹介なんかしないね。

例のバスの事故の情報もなんか弄られてるみたいで、単にひなたがバスの前に飛び出した幼児を救ったことになっていて、あのあと警察から感謝状がでたそつだ。報道もすっかり落ち着いた。現場から忽然と消えた謎の男女といった報道はなくなったけど、都市伝説を扱うウェブサイトなんかはその痕跡がある。まあ人の噂も七十五日っていうからな。一二〇日もたってるんだ、雨音の『法術』が及ばなかった目撃者がいたとしても、そりゃ噂もされなくなるさ。

ところで、ひなたに雨音からの手紙が来たことは話したけど、実を言つと、俺のところにも手紙は来た。内容は……トップシークレ

ツトだ。ただし、男なら誰でももうらやましがらるだろう内容だったとだけいっておいてやるう。どうだい？ 羨ましいだらう？

まあ「この手紙、絶対ひなたさんには見せないでくださいね」って下りがあることぐらいは教えてもいいかな。ふふん、つまりそういう手紙な訳ですよ。

ちなみに、雨音からの手紙は机の鍵のかかる引き出しに厳重に保管してある。

ああそうそう。森林公園でのデート……もとい。マナの補給の時に撮った写真は無事だった。精霊だからデジカメに映るかどうかが疑問だったんだけど、受肉して肉体を持ってたんだから、映るのはまあ当然か。プリントした写真は俺とひなたで大切に持っている。

ひなたなんかはフォトフレームに入れて、机に置いてるそうだ。俺？ 定期入れに入れてる。誰だ、妻子持ちのサラリーマンみたいだなんて抜かしたヤツは！

どうやら俺とひなたは記憶消去や情報改ざんの対象からは外れているようだ。まあ、友達だから当たり前って言えば当たり前なんだけど。

というわけで、あれから四ヶ月の俺たちのことを簡単に説明させてもらったんだけど、どうかな？ え？ 分かりにくい？ それはそれ、俺は人にものを教えるのに向いてないということと勘弁してほしい。

今日はうちの学園の「創立者誕生日」とやらで、午前中に全校集会があったあとは部活も休みで、いったい何をして過ごしたもののか頭を悩ませている。俺の隣にはいつものなぎなた袋に防具一式という重装備のひなたが歩いている。

「なあ、ひなた」

「うん？ なに、みーくん？」

「手、つなごうか」

「つなげるものならとつくにつないでるでしょ！」

これを見るとばかりに自分の荷物をぐいぐいと押しつけてくるひなた。

わかった、悪かった。ちよ、苦しい。

「ふん、分かればいいんだよ。ボクだってこう肌寒くなってくると人肌恋しくなるしね」

「しかしよく晴れてるよなあ。空の色が夏と全然違う気がする」

「実際違うと思うよ。湿度とか黄砂の影響とか」

「詩的に表現しようとした俺の努力を返せ」

「はいはい。じゃあそれも誕生日のプレゼントにつけといて」

そう。今月は俺の誕生日がある。半年間お姉さん面され続けて、ようやく満年齢で並べる日がやってくるのだ。でも、一七歳か。昔は一七歳っていったらえらい大人のような気がしていたけど、いざ自分がその立場になると、全く実感が湧かない。俺の精神年齢って何歳くらいで止まってるんだろう。……四ヶ月前のあの一件で、少しだけ成長出来たような気がしてただけど、ダメだな。俺はまだまだ青二才だ。

おっと、話が脱線した。で、誕生日がくるんだが、それが今度の土曜日、つまり明日なのだ。ひなたは「プレゼント、楽しみにしててね！ 頑張ってるから！」と言うのみで、一体何を用意しているのかも教えてくれない。まあ、教えてもらったら嬉しさやサプライズにも欠けるから、教えてくれないこと自体はいい。問題は「がんばってる」という言葉だ。

かつて、ひなたは食材殺しの異名を持つ、食材を食べ物以外の何かに加工するスペシャリストとして名をはせていた。そのひなたが食材クラッシャー（何か異名がちょっとだけ変わってるような気がするけど気にしない方向で）の名を返上するために、日々地味で過酷な鍛錬をしていたことを俺は雨音がうちにいる間に知ったわけだ

が、あの時は「すでに頑張ったあと」の状態だったと思うんだ。つまり、何が言いたいかはわかるよな？

ひなたは現在進行形で頑張っているんだ。これが怖くなくてなにが怖いっていうんだ？

「ちよつと、また失礼な想像してたでしょ」

「何故分かるんだ。超能力者かお前は！」

「超能力なんてトリックのある手品ばかりじゃない。馬鹿なこと言っていないで何を想像したのか白状しなさい」

「いいよ。どうせ言ったところでお前は話をはぐらかすから」

「はーん。誕生日のプレゼントのことだね？」

「そうだよ。どうせ教える気ないんだろ？」

「ちよつとだけならヒントをあげるよ？」

お、珍しい。ひなたが自分から折れた。どんなヒントかわからないけど、とりあえず聞いてみるだけ聞いてみるか？

「じゃあそのヒントとやらを」

「手作りです」

「すっげー怖いんですけど」

「失礼だなあ。ボクだって日々精進してるんだゾ？ お母さんだってひなたは飲み込みが早いって言ってくれてるのに」

ほう、ひなたのお母さんの御墨付きか。ひなたの母さんってのが、どこに出しても恥ずかしくないくらいの完璧主婦で、料理だけでなく裁縫（和裁も洋裁も）、茶道、華道、日舞、社交ダンスその他諸々、出来ないことを探す方が難しいんじゃないかと思わせるお人なのだ。ただし、前にも言ったけど、車の車庫入れだけは一向に上手くならない。不思議な人だ。

ひなたもその人の血を受け継いでいるんだから、色んなもののが能がないということはないのだろう。現に料理の腕は現在進行形で急上昇中だし、なぎなた部ではついに部長を務めるようになった。それに、いつの間にか俺はひなたに毎日弁当作ってもらうようになったし。

「そういえばさ、今日は夜から雨だつて天気予報で言つてたよ？」
「こんな秋晴れでか？ 女心と秋の空とはよくいったものだなあ」
「そのことわざ、男心バージョンも存在するの知つてた？」
「人の心は移ろいやすいものつてことだね」
「もー、そうじゃなくて！ 雨の日は『あれ』でしょ！」
「そうだな、『あれ』やるか」

『あれ』とは、俺とひなたが雨音に「元気でやつてるから安心してね」というサインを出すことだ。馬鹿馬鹿しいと思うなら思つてくれても結構。俺たちはかなりマジでやつてる。これまでも雨の日のたびに、何度も何度も自宅の屋根にサインを出し続けた。雨音からの返信らしきものは今のところない。

でも、雨音はきつと見てくれていると俺たちは信じてる。

そのサインっていうのが、ブルーシートに極太マーカーで描いた『傘をさした二人の女の子と、男の子が並んで手を振っている』イラストなんだな。ちなみに描いたのはひなただ。ひなたに限らず、女の子には不思議と絵心のある子が多い気がする。

「秋雨前線がちょうどかかるらしいんだよ。だから、俺は今日もサイン出す予定。みーくんはどうするの？」

「……出すに決まつてるじゃないか。友達が会いに来るんだから」「そうだよな！ みーくんならそう言うと思つた！」

最近の天気予報は侮れない。予報で一時間以内に雨が降ると言つたら、まず間違いなく降ってくる。ケータイに天気情報を配信してる会社もあつたりして、そういう会社はこの不況でもかなりの業績を上げているらしい。

で、現在午後一時。外はしとしとと静かな雨の音がしている。サインは雨が降り出す前に屋根に固定しておいた。しかし、こういうときに一人暮らしたと都合がいいよな。親父にこんなのがばれた

ら、怒られるというより脳みその心配をされそうだ。

しかし、今夜の雨は実にいい。優しい雨だ。

そう、俺は雨の夜が好きだ。

優しく街に、森に、田畑に降り注ぐ、天の恵み。

それを司っているのは俺とひなたのかけがえない友達、雨音。天上からでも、雨音ならこのサインの意味は読み取れるはずだ。なにしろ、彼女は雨の精霊なのだから。

今日も空から見てるんだろう？俺たちは元気だぞ。

雨音は雨の精霊の役目をしっかり頑張ってるよね。

何だか急に目頭が熱くなってきた。慌てて手近にあったタオルで顔を拭く。

よし、大丈夫。まだ泣いてない。

俺たちがやってるのは返事の来ない手紙を何度も何度も書くようなことだ。

常に一方通行で、相手に届いてるのかも分からない。

だけど、俺たちは信じている。このサインは絶対に雨音の目にとまっていると。

だから、雨の日には必ず

突然の大音響とともに、部屋の照明がブラックアウトした。落雷か？

いや、違う。これはもしかして……。

俺の心臓の鼓動が早くなる。

早く、早く照明よ回復してくれ！俺の想像通りなら、きっとこれ

れは唐突に蛍光灯が再点灯して、白い光が俺の視界を一瞬奪った。

だが、その一瞬で十分だった。闇に慣れていた目がだんだんと視力を取り戻す。

ほら、やっぱりだ。

部屋の真ん中あたりで長い黒髪を腰まで伸ばし、白いワンピースを上品に着こなした女の子が目を回してぶっ倒れている。俺はその少女をたたき起こす為に、部屋の隅に山積みになっている極厚の月刊マンガ雑誌を手に取った。

凶器を手にゆっくりとターゲットに近づいていく。目覚める様子はない。俺は少女の脳天をめがけて渾身の一撃を見舞った。たかが本と馬鹿にするなかれ。角を使えば立派に人殺しの道具になりうる。いった
ッ！！ ハッ！ いつの間にかわたしはこんな所へ！？」

四ヶ月ぶりだよな、そのリアクション。

俺は月刊マンガ雑誌を放り出して、その少女 雨音 の細い身体を抱きしめた。

「つて、みーくん！？ ちょっと……苦しいですつてば」

俺は無言で雨音の身体を抱きしめ続ける。その時、うちの門扉が錆びかけのきいという音を立てて開かれた。合い鍵で玄関も開かれる。ドタドタと二階へ上がってくる足音がする。誰かって？ 雨音のもう一人の友達に決まってるじゃないか。

「みーくん！ 今なんかすごい音がして ツ！！ うそっ……あ、雨音ちゃん？」

ひなたが俺と雨音と一緒に抱きかかえようとする。もうメチャクチャだ。屋根と天井はぶち抜かれ。雨音の服や髪には木くずやらなんやらが大量に付着している。それでも俺たちは構わず雨音を抱きしめほおずりする。天井の大穴から雨がざんざん部屋の中に降り込んできて、俺たち三人を濡れ鼠にしていく。

「ちよっ……ひなたさんまで！？ ちょっと落ち着いてくださいっ！！」

「これが落ち着いていられるわけないでしょう！ もう、ボクたちずっと雨の日にサイン出し続けてたんだから！」

「屋根に置いてあったイラスト入りのブルーシートみてくれたか？ ひなたの発案なんだ」

俺がそういうと、ひなたがちょっと誇らしげに胸を反らしてみせる。

「この一帯を通るとき、いつも見てましたっ。三人一緒だよって意味だと思って、寂しくありませんでした！ ……ホントはちょっと寂しかったけど」

「ほら見なさいよ、ボクの言ったとおりじゃない。ちゃんとサインは通じてたんだよ！」

「俺だって信じてたさ！ 必ず雨音はこれを見てくれてるって。だからずっと寂しくなかなかった。でも、こちらからの一方通行なのは辛かった」

そうだ、俺たちは離れていても互いを意識していた。忘れなければ、繋がりは切れない。繋がりが切れないということは、離れていても友達でいられるということだ。

「ところで、今回はなんでまた地上に？」

俺のごく当然な質問に、雨音は凍り付いたように固まってしまった。

ん？ よく見るとなんかぶるぶる震えてるな。

「えート、ワタシ何二モ知りマセンノコトヨ？ ホントノコトヨ？ 表情がまるで交通安全運動で使われる腹話術人形みたいになった雨音は、カクカクとした動作で階段の方へ行こうとしている。

「ひなた！ 逃がすな！」

「合点承知！」

「あーうー……、と、友達を捕まえるんですかあ……？」

「捕まえたりしないよ。ボクたちの質問に答えてくれたらね？」

ひなたが極上のスマイルで雨音に迫る。ひなたの笑顔は怖いぞ。何しろ三秒も笑顔で見つめられたらローリング土下座をかまして謝りたくなるほどの破壊力だ。もちろん普段の笑顔はそれはまあ、可愛いんだが。さて、雨音は何秒で落ちるかな？

「ごめんなさい、白状します」

おっ、十秒以上持った。雨音って結構肝っ玉太いなだな。

「じ、実はデスね……。わたしたち精霊を統べている神様、クラオカミさまが『雨音は順応性が高いから地上留学』とつい先ほど仰いました……」

それ、もしかして厄介払いとかじゃないよね、雨音さん？

「それで、頼れる人はやはりみーくんとひなたさんしかいないと言うことで、秋雨前線にのっかってやってきた訳です」

「そっか。それは大変だったね」

「そうなんですよ。クラオカミさまには逆らえないので……。とくくっても怖いんですよ」

つまりだ。地上留学という名目で追放されたんじゃないのか？という疑いはさておいて、とにかく雨音にちゃんとサインが伝わっていて、俺たちは離れていてもやっぱり繋がっていて、諦めさえしなければいつかこうして逢えることを証明して見せたわけだ。

そういえばまだ言ってなかったな。

「雨音」

「なんですか？ みーくん」

「おかえり。また逢えたね」

雨音は弾けるような笑顔で俺たちに帰還を告げた。

「……はいつ！ ただいま！」

おわり

エピソード

ほんとうのもだち

(後書き)

いかがでしたか？
もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9773x/>

雨の足音

2011年11月16日21時31分発行